

義久公  
義弘公  
天正六年

後  
編  
舊記雜錄 卷十

952 「國史」卷十 貫明公 松齡公

六年戊寅春正月二日、縣領主土持右馬頭親成遣族人相模守榮續獻甲冑及刀、請修舊好、據日州御發足記、上持次郎九郎傳十八世至土持冠者榮妙、親成、榮妙十五世孫也。肥前長崎宇久左衛門大夫純幸因伊集院右衛門大夫獻太刀、據貫明公舊譜、日州御發足記。六日、天草氏獻鎧以賀日州之捷、據日州御發足記。十七日、山毛地頭米良彌次見音現於公、獻太刀及刀、日知屋地頭福永新十郎見獻太刀、上、同。福永丹波守之爲内應也、許以野尻、賜花押書以爲左券、至是辭之、強之、固辭不受、上、同。二十三日、門房地頭某、鹽見地頭某見於公、上、同。公賜島津朝久宮崎三

百町、據島津内膳家譜、日州御發足記。二十五日、志岐兵部入道遣永福寺、獻書以賀日州之捷、據日州御發足記。公與土持親成日州石塚等百餘町、又以御手洗村十町與榮續、據貫明公舊譜、日州御發足記。二月朔日、土持榮續獻甲冑、以拜之、據日州御發足記。五日、肥州栖本

下野守獻太刀、以賀日州之捷、上、同。九日、以本田親成、上原尚近爲餂肥噉、同上、噉字方言、讀曰阿津加比、瀨村邑有噉組頭職、噉號始見此。本十四日、以日州清水名五町地、爲鞍馬寺領、寄進狀云、爲子孫祈

福祿、據貫明公舊譜。以山田新助有信爲高城地頭、川上三河守忠智爲財部地頭、據山田新助系圖、日州御發足記、財部即今高鍋地。有信、有德之子、

忠智、忠興之子也、據山田新助系圖、島津支流系圖、山田有德見天文二年、川上忠興見天文八年、並係第十六卷。三月三日、伊東氏臣長倉勘解由左衛門收散卒、得數百人、

據日州石城、據貫明公舊譜、日州平治記、原書止。十六日、公發都於郡、十八日、還鹿兒島、據日州御發足記。三城地頭叛攻縣、

土持氏告急於都於郡、上、同。夏四月、大友左衛門尉義鎮名法宗、帥師拔縣、土持親成奔豊後戰死、其子彈正忠奔長門、

據土持次郎九郎系圖。義鎮、政親五世孫也、據諸家大系圖、大友政親見第十二卷、永正五年。五日、琉球王使妙嚴寺齋書、獻公紅泉參斤、太平布五十

端、燒酒貳甕以賀山東臣服、據貫明公舊譜。獻松齡公紅絲貳斤、上布四十端、綿十把、織物四端亦如之、據松齡公舊譜。秋

大友義鎮屯縣、據貫明公舊譜。七月六日、島津忠長、伊集院

忠棟攻石城、濟水而進、不克退屯佐土原、伊集院肥前守

久信源助久春改名久信、稱肥前守、山田有信有戰功、據實明公舊譜、島津支流

平治記、決勝記、市來千左衛門系圖、查較彌四郎家藏文書、以此為六月六日事、松齡公軍記亦言六月、與實明公舊譜、日州平治記等不同、

二十日、公賜北鄉時久盟書、據島津支流系圖、八月朔日、公因

天界寺還、與圓覺寺書曰、辱賜青磁花餅、欣慰、憶昔少年、

從師受學、感念不已、今贈金扇子拾本、聊以為儀而已、

據實明公舊譜、三日、公賜北鄉忠虎盟書、據島津支流系圖、毛利輝元與吉

川駿河守元春、小早川左衛門佐隆景謀納幕府、遣五戒坊、

求助於公、九月十一日、幕府寓內書於五戒坊、告公

曰、方與輝元等圖恢復、諸國士卒望風響應、惟恐大友氏

躡我後也、先欲以明年春遣防長兵伐豐筑、願君助之、餘

付輝元·元春·隆景、據實明公舊譜、是日一色昭秀·真木島昭

光與伊集院右衛門大夫·喜入攝津守書、亦如內書旨、同上、

此書無年、然書中事及月日與內書符合、則為十二年、小早川隆景

是年書明矣、舊譜置諸下天正十二年、恐誤、同上、此書無年、其事與內書

·吉川元春與二子書、大略如之、同上、大略符合、舊譜置諸下天正十

二年、亦公如日州、十三日、到野尻、據日州御發足記、十七日、遣

島津征久為大將、伊集院忠棟·平田美濃守光宗·上井寬

兼為副、復攻石城、忠棟伐大木為橋梁、諸軍並進晝夜攻

圍、據實明公舊譜、日州平治記、原書皆作上嶽、今作十、據實明公舊譜、日州平治記、原書皆作上嶽、今作十、

松齡公自飯野來、會公於野尻、據日州御發足記、石城被圍十餘

日、糧食已盡、汲道又絕、晦日、城主長倉勘解由左衛門請

棄城去、與之酒食而遣之、勘解由左衛門奔豊後、據實明公舊譜、

日州御發、冬十月四日、公發野尻至飯野、留五日、還鹿兒島、

據日州御發足記、大友義鎮將納伊東義祐於佐土原、先遣兵十萬攻

高城、地頭山田有信與中務太輔家○·吉利忠澄·鎌田政

近·比志島紀伊守國貞等合軍一千餘人、閉城固守、據實明公舊譜、

流譜、山田新助系圖、日州平治記、大友軍斷其汲道、城中患之、

忽於古垣隱者得湧泉、混混不竭、據實明公舊譜、日州平治記、禮記喪夫記、乘杖者斷、而棄

之於隱者、註棄於幽隱之處、今用隱者字本此、據比志島善八系圖、

治三、大友軍徇伊東氏舊邑、令叛薩摩、據實明公舊譜、二十

三日、日州三納人叛、夜壞寨柵、殺地頭伊地知式部太輔

及麾下數人、據日州御發足記、二宮式部家藏舊記、伊地知金左衛門

死日州三納即此人也、式部太輔某子曰重隆、亦稱式部太輔、戰

轉某見第十六卷天文十三年注、又陷平野城、燒夷八代·本莊·

綾等處、二十四日、攻都於郡城、守將出兵擊之、賊徒敗

走、追至川原田道場光大寺殺五百餘人、據日州御發足記、此

近、與家○共守高城、然則擊三納村賊兵者、留守將士也、按實明公舊

譜、日州平治記、三納人召募農夫一千餘人、據川原田道場、我軍圍之殺

數百人、與二十五日、公救高城、自高津濱乘舟如濱市、會

邊報至曰、三納反矣、舟中皆有懼色、明日、公將至高原、

邊報復至曰、已克三納矣、道路無復艱阻、軍中乃安、同上、據實明公舊譜、

院忠棟・上井覺兼成佐土原、據日州御發足記、前年十一月既使

助之、覺兼十一月朔日、日州御發足 公到佐土原、數十萬衆宿城

下、傳舍不能容、有露次者、據實明公舊譜、日州平治記 四日、公復折

於霧島社日、捷以法華經萬部・高城一邑爲賽、據實明公舊譜、 五

日、高城遣上床主稅助・土橋某、告急於公、據日州御發足記、

六日、公欲擊大友軍、俄而大雨、平地水深數尺乃止、同上、

九日、松齡公與島津征久・伊集院忠棟・上井覺兼等進至

財部、同上、分四千人爲三伏、十一日、實明公・松齡公舊譜作十日、先遣

輕卒挑戰、大友軍逐之、伏兵並與大破之、據日州平治記、

二宮式部家藏舊記、會 公自佐土原至屯根白坂、據實明公・松齡公舊譜、夜

放火箭射之、大友軍驚駭、據日州御發足記、十二日、黎明大友軍

縱兵擊我、殺本田親治・北鄉藏人久盛等、乘勝而來、松

齡公勒兵待之、據實明公・松齡公舊譜、日州平治記、日州御發足記、

年、諸將以五萬人橫擊之、公將五萬人下根白坂遂擊之、

家□・有信自城中出、帥兵應接大破之、追至耳川而還、據實明公・

明公・松齡公舊譜、島津支流系圖、公之宿紙屋也、夢中得句曰、

山田新助系圖、日州御發足記、 公之宿紙屋也、夢中得句曰、

天津太乃加和乃毛美知加奈、既覺補成之曰、于津天幾波

云云、至是大友軍敗走、落水死者無數、紛紛如墜葉之漂

波、據實明公舊譜、日州御發足記、舊譜十月二十五日、 十三日、公

遣島津征久以下諸將濟耳川、略日知屋・鹽見・門河・山

毛・坪屋・田代等地、據日州御發足記、 公賜北鄉忠虎盟書、據島津支

流系、高城之役、松齡公及家□戰功居多、公賜松齡公

及家□書以褒嘉之、據實明公舊譜、 又封家□爲佐土原領主、據島津支

流系、大友義鎮屯縣、自秋涉冬、及高城之敗、龍師而去、義

鎮既去、縣人請吏于我、遣兵戍縣、遂召土持彈正忠於長

門使居之、據日州御發足記、土持次郎九郎系圖、召土持彈正忠使居縣、因遣兵戍縣事而終言之、非此年事也、 二十

九日、公還鹿兒島、據日州御發足記、 十二月朔日、五戒坊到鹿兒

島、十日、公與一色昭秀・眞木島昭光書曰、幕府因輝

元使僧來辱賜內書、使伐大友氏、謹聞命矣、當與龍造寺

謀之、抑前日與大友氏戰於日州、殺五萬餘人、豐筑軍士

氣奪膽落、不能復振、毋爲過慮、又復輝元・元春・隆景

書亦如之、據實明公舊譜、

953 「加治木大村市兵衛重頼之旧記」

天正六年之比

義久様御代ノ御老中

川上左近將監殿久時

伊集院右衛門大夫殿忠棟

平田美濃守殿藏宗

本田下野守殿三清

上井伊勢守殿

津支

合八人御老中

同比御使衆

新納右衛門佐殿

伊地知伯耆守殿

税所新助殿

吉田美作守殿

合八人御使衆

鎌田刑部左衛門殿

本田因幡守殿

比志嶋宮内少輔殿

伊地知備前守殿

954 天正六年戊寅

正月十一日、土橋城之助豊後州臼杵郡にて戦死、或二日ともあり

四月、土持左馬頭・田部親成大友氏の兵と豊後田浦邊に戦て死之

八月十一日、二宮肥後守肝付兼盛臣にて殉死せり

十月、細山田越前守北郷家臣日州都於郡川原田に戦死、蒲生某同上に

十一日、長谷場彌九郎高城城下にて戦死、福永丹後守同上に

十二日、廻三曲坊・鎌田大膳亮以上二人高城城下にて戦死

廿日、間世田刑部左衛門志布志士にて大友宗麟の日州高城を攻るを拒ぎ戦死

七同上、有川備前守貞綱同上に、貴嶋豊助、或典介

樂日州高城にて、否笠刑部少輔、月日なし、此討死とあり

二十一日、川越九郎兵衛重林或十一日とも、高城口にて戦死とあり

二十三日、伊地知式部太輔重隆日州三納地頭にて地下人叛ける時討て死す

二十七日、甲斐右馬頭重種大友氏日州に寇する時、田代にて戦死

十一月十二日、市來軍助家滿日州高城の成將山田有信等公の援軍を待得て城中より衝出

川にて尾撃の時、毛利助左衛門・北郷藏人久盛三俣地頭にて主従五人死之

忠相の、岩滿美濃守重直伊豫介ともあり、久盛の臣也

孫也、高野刑部左衛門或作式部、山内宗左衛門同上に

池田市兵衛同上に

同、芦谷眞兵衛同上、是等村田能登守經重、北郷時久、家臣なり

山下宗左衛門或山中とも

丸目伯耆守頼頭・眞方大炊介

秀眞・秋永八兵衛通炭・海江田主殿助綱富・大坪壹岐

守貞供嫡子太郎右衛門貞親、即否笠刑部少輔、十月廿日の場時に父の敵を討取れり

福永丹後守十一月、長谷場弥九郎純時、十九歳なり、十月十一日の列にも載す、是非

歟、鎌田大膳亮主従戦死、十月十日、林田伯耆守、二階堂式部、本田次郎左衛門親供ともあり、本田因幡守親治、六右

祖な、廻三玉坊十月十二日の、鮫島與介宗直、隼人宗朝倉常陸守、平原隼人佐、曲田某、大山某、佐土、土岐播磨中、天正

新納院高城に、玉泉坊以下の交名は、耳川戦亡の中に、難見すれば、姑く此に置て歟考

・長野九郎右衛門・丸尾大炊左衛門・平田右近將監・

川上十郎次郎範久日州石城にて戦死、年二、河内勘右衛門列

戰場及年月なし、但其内に海江田主殿、根占權允・大井宮内左

衛門・天草弓八郎・餅原與四郎・有河仲二郎・長田新

左衛門羽月七、長田氏系圖ヲ按るに、長田新左衛門重正見へたり、其弟仲左衛門は島原戦死とあれば、時代も當れり、後考を歟

三代主馬・竹下平藏・長山銀允、

同日、坂元和泉守重朝 北郷家臣、日州  
目白坂に戦死

此年、伊地知民部少輔中間一人 新納忠元等、出水の義虎と  
謀て玖麻の將早牟田城之介

を討れし時、城  
之介と戦て死之、

年月闕、山中惣左衛門・來住備後守 以上二人北郷氏家臣、新  
納院高城戦死とあり考

を 圖師與八左衛門 求丁合戦に討死とあ  
り此に載て考を竣、

955 「御文庫」番箱義久公「軸中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

謹而奉言上候、仍伊藤表被得御軍利候由承及候、千勝万

勢目出度奉存候、此等之趣可預御披露之由、宜得貴意候、

誠恐誠惶謹言、

「御譜中」天正六年ト朱カキ」

純幸(花押)

進上

伊集院右衛門大夫殿 (忠徳)

宇久左衛門大夫

伊集院右衛門大夫殿

純幸

「上包」  
進上

956 改年之御吉兆千喜萬悅、不可有盡期際限候、抑御太刀一

腰令進上候、右之奉補御祝言計候、猶永日中可申上候之

間、此等之趣宜預御披露候、誠恐誠惶謹言、

正月二日

純幸(花押)

進上

伊集院右衛門大夫殿 (忠徳)

宇久左衛門大夫

「上包」  
進上

伊集院右衛門大夫殿

純幸

957 「義久公御譜中」

「正文有之」

(本文書ハ九五五号文書ト同文ニツキ省略ス)

958 『入來家臣東郷善兵衛藏』

市比野名之内

上

みつ渡せ

二反

一斗蒔

上

とふ遍

二反

二斗蒔

中

山くち田

二反

二斗三升蒔

下

かひち田

二反

二斗五升蒔

みつ渡せのひらき

百地

いのむれのわき

一まき

959

「正文在垂水郡」

去十七日到宮崎表敵數人被討捕、其上取合共餘多有之由、注進万々目出候、弥境目之儀賢慮尤候、其元長々在番軍劣之儀察存候、猶追々吉左右可預示候、恐々謹言、

なかつる 八升まき

かなとこいし 百地

みそ下 二まき

野ひらき 七升まき

よこいし 百地

畠地

うへ野 一反

まんとのかうち 二升蒔

おまかり屋しき 一

以上水田八反、此内ミつ渡せの一反水損、

堀町 七所

島地 二所

やしき 一

天正六年正月十八日

東郷下總守(重忠)

正月廿日

又四郎殿「右馬頭以久也」

龍伯御判

(本文書へ編年ノ誤ナルベシ)

960

「御文庫廿二番箱二卷中」「義久公御譜中ニアリ」

「土持殿へ案文」

爲往昔幕下之筋、累年本領懇望之條、今度日州之内石塚加三ヶ名百町余、先々被進之、又時節次第右之城所領門川繰替必可宛行者也、仍證跡如斯、

天正六年

正月廿四日

伊集院右衛門太夫

忠棟

平田左馬助

光宗

喜入攝津守

季久

土持殿

961

「尚久一流系圖」

圖書頭忠長之子

忠倍

初忠直 童名菊壽丸 又五郎 河内守

天正六年戊寅二月朔日誕生于鹿籠、母島津右馬頭忠將女也、

〔御文庫廿二番箱二卷中〕「義久公御譜中ニ在リ」

〔豊後より土持親成へ之書狀写〕

今度日州錯乱已來、様躰節々可有御□進之由存候處、于今御油断不及是非候、結句嶋津家、御同名相模守方被差出、別而被仰合之段承候、寔無御心元存候、併彼方歸國之様其聞候、先以肝要候、連々之御覚悟於無別儀者、御親類衆被相副、相模守急度參上之儀被仰付、薩州立柄等具被遂言上專要候、其國之事者、從爰元被加御下知旨候之条、自然薩州衆被出行之儀共候者、則時被懸合、潔被抽御忠貞、可被顯御心底事可目出候、如此之砌者、無実所甚説不玆儀候之間、聊茂不被入敵案様能々有御思惟、縱如何躰之邪説申犯候共、不被衰于他御忠儀一片之御心懸、可爲御長久之基候、御好之義候之条、不顧斟酌令申候、曾而無御疑心御存分之趣、無御腹藏銘々預御入魂、各申談被合、毛頭不可存無沙汰候、可御心安候、猶重々

可申承候条省略候、恐々謹言、

〔御譜二天正六年ト朱カキ〕

二月十一日

吉岡越前

鑑興判

親成  
參申給へ

〔御文庫廿二番箱二卷中〕「義久公御譜中写有之トアリ」

追而掃部助事、一三日已前可罷歸存候處、于今滞留仕候、如何之義候哉、御請文之義者、態以使節被遂言上、鑑述事者、先以可被差返事、對宗天可畏入候、就日州錯亂之儀、親成爲可被成御入魂、前日同名掃部助被差遣候、然上者彼表様躰早速可有言上存候之処、于今御油断之儀不及是非候、結句嶋津殿へ御同名相模守被差出之由承候、誠御覚悟之趣無心元存候、雖然彼方歸國候由、其聞候之条、先以肝要候、然者親類衆ニ被相加、相模守急度爰元有參國、薩州立柄可有言上事專一候、日州之儀者先年從京都御判國と申、自此方被加御下知旨候条、自然薩州衆於及行者、最前懸合被抽忠儀、親成無別儀可被顯御心底事、可爲御家長久之基候、御好之義候ハ、不顧斟酌申事候、御内意之續細碎預御報可爲其心候、猶期來悅候、恐々謹言、

〔御譜二天正六年ト朱カキ〕

二月十一日

佐伯入道

宗天判

「義久公御譜中」「御文庫拾六番箱三卷中ニ在リ」

「此書中、甲寅霜月十八日御生ノ御女子云々、按スルニ、惟新公ノ御長女御屋地君ニ當ルナラン、天文廿三年誕生トアリ、月日知レス、外御親族方同年同月御生ノ方ナシ、右馬頭忠將ノ息女ハ同年八月廿七日生トアリ、其他見當ラス、後考ニ供ス」

「上書」  
鞍馬寺

御立願文

鞍馬寺  
妙法坊

天正六年寅貳月十四日

義久(花押)

相達養雲房者也、  
去年丁丑七月十五日之夜、子孫繁栄喜悅之夢想趣者、或氏女小木像之毘沙門手渡、得于我、右之女性甲寅霜月十八日誕生、今年廿五歳、是則鞍馬之大悲、多門天之奉仰と御靈夢無疑可得繁昌、以此旨、可被抽丹精、巨細可被

「義久公御譜中」「此正文御文庫三番箱一卷中ニ在リ」

「案文在加治木衆長谷場傳左衛門」

親成  
參申給へ

鞍馬寺

毘沙門 新寄附領

日向國清水名之内弁佐司之門水田參町六段、浮免壹町四段、都合五町、雖爲微少之地、依義久子孫繁栄之儀、被致寄進、別而可被勵御懇祈事所仰也、仍狀如件、

天正六年貳月十四日

平田左馬助

光宗(花押)

伊集院右衛門大夫

忠棟(花押)

喜入攝津守

季久(花押)

妙法坊

「義久公御譜中」「此三通御文庫拾六番箱三卷中ニ在リ」

「寫有之」

注文

紅泉

參斤

太平布

五十端

燒酒

貳甕

已上

〔朱カキ〕天正六年  
萬曆六年孟夏初五日

琉球國

謹上 嶋津修理大夫殿

967 「正文有之」

當年之御慶重疊申納候、仍今度七嶋船之便ニ傳承、山東之人衆各々無刀ニ參上被申之由承候、千喜萬悅此事候、不圖妙嚴寺爲使僧爲御喜被令上着候、每事可然之様ニ御取合頼存候、乍輕微大平布五拾端令進獻之、聊表禮儀計候、委曲付于彼使節之舌頭、恐惶謹言、

萬曆六年戊寅孟夏初五日

池那國  
城上

〔朱イン〕

謹上 鹿兒嶋奉行御中

〔上包〕  
謹上 鹿兒嶋奉行御中 三司官

968 「義弘公御譜中」

天正六年戊寅四月、琉球國使船到着、國王贈我以紅絲二斤・上布端四十綿十織物端四也、使僧妙嚴寺、織物三端

・線香二把持參矣、

969 「義弘公御譜中ニアリ」

〔正文〕

猶々鷹之儀、  入候、迎之事ニ、無疵候ヲ所望存候、

乍便  馳筆候、  州之儀、如存分成行候由、珍重々、於拙者大慶候、尤差下使者、祝義可申之處、信長江一味申ニ付、敵地一圓ニ無合期之間、無其儀候、更非如在候、可然之様取成、可爲本望候、拙者事、信長別而無疎意入魂共、不混自余様躰候、併施面目子細共候条、於時宜可御心安候、自然此邊相應之事、不可有疎意候、將又、雖不被思寄儀候、日州手ニ入上者、大鷹定而可有之候、先年所望申候鷹、難去事候而、拙者殘多存候間、此節一居望候、於同心者、和泉郡義虎かたまで、早々被差越候者、可爲感悅候、義虎態可被差上之由申合候間、此刻馳走入可爲喜悅候、猶委曲貞知可申越候也、

〔朱カキ〕  
天正六年卯月七日

〔前久〕  
〔花押〕

嶋津兵庫助とのへ

970

猶々愚身事、信長一段之入魂之事候、様躰不可有其  
隱候間、不及申候、新武・新彈ニも言傳申度候、馳  
走共難忘之由、可有傳達候、以參可申候へ共、急便  
之条、無其儀候、期後音候、

遙久不能書信候、抑日州之儀被任存分之由其聞候、珍重  
々、大慶此事候、尤則差下使者、可及祝義之処、敵地相  
擇候ニ付、無合期所存之外候、可然之様取成頼入計候、

將又愚身事、信長一段懇切入魂、不混自余、外聞実儀施  
面目儀共候、於様躰者可心易候、委曲貞知可申下候、次  
日州被任本意候之条、鷹共數多所持之由無隱候、此節所  
望候、匠作へ懇望申候間、猶以取成可爲本望候、於自分  
茂一居至馳走者、可爲祝着候、万一同心候者、義虎迄被  
越候者、此方へ可相届候、内々申遣、其手筈候間頼入候、  
迎之儀ニ、一日も早く所希候也、かしこ、

〔朱カキ〕  
〔天正六年〕卯月七日  
〔喜入季久〕  
嶋津躰津守殿  
(前心)  
(花押)

〔此書、喜入季久譜中ニ在リ、正文在當家トアリ〕

971

〔御文庫ニ番箱義久公ニ軸中〕「義久公御譜中ニ在リ」

謹而言上仕候、今度日州御所感之御悅、任最前承付雖申

上候、尚爲達其旨、只今又使僧申付候、爲右之御祝儀、

御白糸五斤進上仕候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹

言、

〔御譜ニ天正六年ト朱カキ〕  
卯月十日

〔龍泉〕  
(花押)

伊集院右衛門大夫殿

志岐豊前入道

伊集院右衛門大夫殿

麟泉

972

〔御文庫廿二番箱二卷中〕「義久公御譜中正又有之天正六年款トアリ」

先年一輪啓入之刻、御懇札畏悅至極候、爲其辻今度賀雲  
齋被差上之處、通用依難成、從中途歸宅候、抑日州之事  
義久雖分國候、累歲逆心故、旧冬被属案利、然者自豊後  
至當邦防戰之企候哉、萬一実候者、於向後弥甚深可申談  
之段、所希候、仍乍微色絹布進獻候、聊補空書計候、恐

々、  
〔御譜ニ錦橋江從老中番次トアリ〕  
〔龍造寺之内鍋輪〕  
〔より狀案文〕

973

〔義久公御譜中〕

天正六年戊寅之春、伊東氏之家臣有長倉勘解由左衛門尉

者、收殘黨數百人、據日州邊地石之城、有欲報主君憤於我之志、實是精衛、填海之比也、於茲乎、君臣相議曰、日州已入手裏、而散諸軍戟弓矢、四民不唱太平之曲乎哉、

長倉之據石城者、猶臥榻之側容他人鼾睡矣、不可不返之、

孟秋初六丙辰、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟爲大將、領數千之騎步、將攻石城、石城前面有大河、水勢轉石、且無舟可渡、無筏可乘、諸軍著曹手兵器徒渡其河、無一人之濡其首者、豈有溺乎、我軍士破門踰牆直前挑戰、賊徒之死其首者、我之士卒死者僅不過三五人、是時忠長被箭傷、左臂且復石城之固鐵關難透、見可而進、知難而退師之常也、與其徒至於覆敗、不若全師姑退、古云善戰者不必進、而退亦進也、諸軍暫退於佐土原之地矣、

974 「義久公御譜中」

天正六年戊寅季秋上澣、島津右馬頭征久爲大將、伊集院右衛門大夫忠棟・平田美濃守光宗・上井伊勢守覺兼爲副將、再欲攻石城、太軍不得渡大河、猶豫之際、忠棟伐大木沈河底、以大作浮橋、而容易渡軍衆、列陣於三處、成圍於數重、石城雖固何敢敵我、實如蜉蝣之撼樹蟪蛄之拒轍矣、諸軍無晝無夜放鐵炮者如雷、下羽箭者如雨、且復

城中絕糧絕水、於茲乎、長倉請和諸於我軍、諸將不忍見城中者之及餓死、應渠之求解其圍、且畀酒食與糧、送於豐後州矣、

975 「右馬頭征久後譜中」

天正六年戊寅秋、伊東義佑之臣長倉勘解由左衛門者、應大友據日州之邊地石城、主遣圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟攻之、長倉強拒之、忠長以下被傷者多、故不能陷城、於是主命征久爲大將、且平田美濃守光宗・上井伊勢守覺兼爲副將再攻之、征久・光宗・覺兼、如圍攻夜以繼日、九月三十日、長倉矢盡力屈乞降、下城退去豐後、

976 「圖書頭忠長譜中」

天正六年戊寅、去鹿籠之地、移居于隅州肝付郡串良也、伊東義祐法師沒落於日向出奔於豐後之後、伊東之家臣有長倉勘解由左衛門尉者、據日州邊地石之城、有欲復仇之志、太守聞之、則與故舊之臣借評議曰、長倉在石之城、欲敵于我者、宛似螳螂向獵車、然而結黨徒增其勢、起亂於國中、亦未可知之、不如速討少寡、天正六年戊寅七月初六丙辰、忠長及伊集院右衛門大夫忠棟爲將師、率數千

之軍、往將攻石之城、其城前面有一大河、水勢轉石、無

舟可渡、無筏可乘、雖然諸軍著甲胄手兵器、徒渡其河無

一人之濡其首者、而況有溺死乎、各已爭先破門踰壁直前

挑戰、賊徒之死者數十人、我軍士之死者纔不過三五人、

丁此之時、忠長亦被箭癢、左、然而此城之固者鉄關難透、

見可而進、知難而退師之常也、與徒至於覆敗、不若全師

先退、而諸軍暫退於佐土原也、

977 「川上氏支流系圖」

久朗之子

久辰

德三 源三郎 左近將監 齋名意船

母阿多大炊助女、

978 「朱力キ」 「川上因幡守久國自作之文也」

德三丸九歲離父、 義久主惠孤者懇切至當也、且復稱忠

臣之子、正月元旦不混諸士、久辰一人賞之觀乎、

979 「朱力キ」 「右同」

天正六年日州之殘黨楯籠石之城、 義久主發多勢攻之、

久辰向大手之城戸、敵降矢石者如雨脚、野呂與助撞楯助  
主、已欲合鎗刻、鎗持未來、依之與助奪捕敗北之味方鎗、  
獻久辰、以之遂合戰、額娃左馬助・梅北宮内左衛門爲同  
列也、

980

猶々御息出家として御堪忍候、心を添可申候由承候、

不可存疎略候、

自旧冬於其御山御堪忍由雖承及候、不知案内之糸御無沙

汰罷過候処、玆翰之趣大慶之至候、仍御代々繞御所持候

哉、被懸御意候、尤雖可致頂戴候、依無嚙未相傳候、其

上彼儀者不輕令存候間、先々令進獻之候、御芳志之段不

可謝盡候、兼又御上洛被相定候哉、御心遣之段奉察候、

然者御用物之事得其意候、無御隔心被仰遣候御事と一入

満足存候、猶委者彼使僧可被申候、恐惶謹言、

六月八日 忠平御花押

修理入道殿 勝久公御嫡子忠長入道休庵

實報

兵庫頭

〔包封〕  
修理入道殿  
貴報

忠平

981 『在花林寺』

霧嶋六所權現御寄進之事

富吉之門

一所轟 一町浮免

右意趣者、今度於國境御奉公之儀、無恙可申調之旨、  
倍心中諸願決定圓滿之精誠、仍御寄進狀如件、

天正六年 戊寅 六月吉日

藤原祐延判

進上 座主御坊

982 『喜入氏藏』

追而令申候、扇子二本進之候、歌ハ梶井門跡御筆に

て候、御音信迄候、

從愛宕使者被差下之由候間、令啓候、仍今度於日州表被

碎御手、御存分被仰付候由、京都風聞其隠無之候、誠々

寄特難紙面盡存候、尤使者差下雖可申候、信長殿御手遣

ニ付、不慮ニ御在洛候故、執紛不及是非候、於爰元似相

之御用候者、可被仰上候、大夫殿へも以書狀令申候間、

宜御取成憑存候、猶志水入道可申候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
天正六年 六月十八日

〔飛鳥井〕  
雅繼

喜入攝津介殿

〔上包〕

喜入攝津介殿

雅繼

〔此一書、喜入季久譜中ニ在リ〕

983 『正文在喜入家』

尔來無音之處、幸便之条令啓候、仍今度者、於日向口被

及一戰、殊無比類御高名、早速御本意之段、都鄙無其隠

候、其後以一札雖可令申、拙夫茂南方ニ令在陣、不得風

信所存之外候、自然爰許相應之儀承、不可有疎意候、恐

々謹言、

六月廿一日

秀清〔花押〕

喜入攝津守殿

〔季久〕  
御宿所

〔裏ニアリ〕

小笠原民部少輔

〔上包〕

喜入攝津守殿

御宿所

秀清

984

「義久公御譜中」

「正文在仁禮左近」

此度於石口、貴所御息御辛勞不及申候、然者御息をハ急  
ニ歸申候、爲其替貴所早ニ御立肝要候、其故ハ伊肥州も  
被手負候て被歸候、顯娃殿も吉田若州も手負候て、同前  
ニ歸にて候、穂北之事不審御察前候、不移時御立專一候、  
御油断不可有候、事々、恐々謹言、

「天正四年」〔六年也本ノマ、〕

七月九日

覺兼(花押)

忠棟(花押)

上井伊勢守

伊集院右衛門大夫

忠棟

(上書)

宮原筑前守殿

御宿所

985

「北郷時久譜中」

天正六年戊寅、大友左衛門尉義鎮・同新太郎義統、催豊  
肥筑前後六州數萬之甲兵、議入日州之由相聞、一雲獻著  
狀於 太守義久公、賜盟約御返書、有正文、左記之、

986

「北郷家藏」

起請文

今度大友家邪路之防戰企故、依諸口雜説、以御誓紙條  
被顯心肝承、悦尤不少、於永代弥可致同懷事、不可有改  
替者也、

若令違犯者、

〔半王〕

奉始上梵天帝釋四大大天王、下堅牢地神、惣日本國中大小  
神祇冥道、別當國惣社新田八幡大菩薩 開門正一位天滿  
天神、殊者麿嶋鎮守諸大明神等部類眷屬神爵冥爵可罷蒙  
者也、仍起請文如件、

天正六年七月廿日

義久(花押)

北郷左衛門入道殿

〔上書〕  
起請文

987

「御文庫廿二番箱二卷中」「義久公御譜中ニアリ」

「天界寺爲使僧渡海之時  
琉球國圓覺寺」義久様御書案文

天正六年八月朔日

其後者乍存、并紛罷過非本懷候、抑若年之比、就習學之  
儀、得深志畢、于今無忘却候、然處毎々芳信之段、欣悦  
不少候、殊更今度青磁花瓶珠重候、仍金扇子拾本 進入、

寔補空書計候、恐々謹言、

八月朔日

修理大夫義久

謹上 圓覺寺

988

〔北郷家藏〕

起請文

萬一世上轉變之刻、雖爲親類之好、捨逆黨、無二可被抽忠勤之由、尤以神妙、并讒佞之儀互可申披、殊此節大友家諸口依被廻謀略、心遣之謂以御誓紙条々承早、慇懃之至弥於向後無愜易可致一味事、

若令違反者、

<sup>〔牛主〕</sup>奉始上者梵天帝釈四大天王、下者堅牢地神、惣而六十餘

州大小神祇、別者當國鎮守新田八幡、殊者鹿兒島諏訪大明神 天滿大自在天神部類眷屬等神討冥討可罷蒙者也、仍起請文如件、

天正六年八月三日

義久(花押)

北郷彈正忠殿

989

〔忠虎譜中〕

天正六年、大友氏欲亂入于日州之時、忠虎進獻誓紙於

義久公、依茲同年八月三日、義久公賜盟約返書忠虎、有正文、左記之トアリ、

990

〔日向記〕

一門川表ニテ耽ト評議ヲ調、山浦方々ニ手賦シ玉フ、山陰・田代・三方・坪屋・日知尾・水志・谷入・下神門・三方其外豊後一味ノ同意故、新納石城ニ長倉勸解由左衛門ヲ先トシテ、當家ノ貴族衆并年比衆山田二郎三郎數多楯籠ル、薩方ヨリモ山中ニ例ノカラクリヲ入ニ依テ、石城人數減少ニナル、是ヲ幸ニ嶋津方ヨリ七月六日、大勢彼城ニ押寄ル、元來角可有ト思儲タル事ナレハ、城中各令一致、短兵急ニ進出、眞丸ニ成テ相戰、寄手大軍成ト云、凡三百餘人討取、二百余人ニ手ヲ負セ、味方得大利ノ間、敵案ニ相違シテ退散ス、城中ニモ手負・死人百人ニ及ヘリ、此旨不移時豊後ニ注進ス、其狀ニ云略ス、

991

〔全〕

一嶋津方此度不得利事ハ、山裏ノ者共豊後方ニ属シ無戰功、然者籌略ヲ成セヤトテ其謀ヲ成ニ依、弥山中ノ者

992

『全』

共構未練、薩方靡シカハ三城ヨリ飛羽檄、人數ヲ乞、其返狀ノ案義統ノ狀略ス、

一八月五日、大友左衛門佐入道宗麟ハ梓山矢ヶ峯ヲ打越、  
(無)ムシカヘ着陣在テ薩方入ノ評定也、同九月十五日、豊  
後諸勢美々川ヲ打渡シ、百丁原ノ北残付山ニ陣取テ、  
六ヶ國ノ諸勢ヲコソ被待ケル、

993

『全』

一同日ニ石城ヘハ島津方ヨリ着陣責戰、城中ヨリモ粉骨  
ヲツクシ雖防戰、山中ノ城郭糧無テ、夜日ノ合戰ニ味  
方手ハ負ツ、見次キノ勢ナケレハ、稻津孫八郎・福永  
宮内少輔彼兩人度々鎗ヲ合、原口山ニテ名譽ノ戰死ヲ  
遂ニケル、山田土佐守・宮田太郎次郎・長倉勘解由左  
衛門分捕高名無比類、睨ト城ヲ相抱ケレトモ、豊後ノ  
軍法滯ル故、無是非シテ同廿九日、石城ヲ捨也、

此度其方案内ヲ以、早速美々川陣付候夏、先以肝要  
候、然者諸軍越山ノ儀、火急加下知候ノ條、不可時  
日移候、於着陣者、則時可成行候ノ間、別而馳走可

994

「義久公御譜中」

「正文有之」

(本文書ハ八六〇号文書ト向文ニツキ省略ス)

爲祝着候、必銘々以狀可申之越、  
猶永松勘解由兵衛  
尉江申合候、恐惶謹言、  
十月二日  
(大友) 義統

995

「鶴田大願寺文書」

薩摩國大願寺住寺職事、任先例、可執務之狀如件、

天正六年八月十六日  
(森昭) 權大納言(花押)

明讚首座

996

「薩州家義虎譜中」

「正文在出水專修寺」

去天正三年乙亥十二月廿五日、至當所和泉庄、 関白殿  
前久様御下向之刻、貴寺江被成、尊宿候之處、種々被抽  
御馳走候、依、尊感專修寺之事可被任、勅願所之段被  
仰出、今年天正六戊寅御倫旨御頂戴之儀、御前代未聞、  
其身之御規模永代之龜鑑彼段候、仍從殿様爲御悦被成御

書候、彼是御大慶奉察候、萬賀以參上可申入候、猶可得  
貴意候、恐惶謹言、

天正六 戊寅

八月吉日

家諸(花押)

則武(花押)

忠雄(花押)

專修寺

參御同宿中

佐多大和守

寄田内記允

市來加賀守

忠雄

「上包」

專修寺

參御同宿中

997

「薩州家義虎譜中」

「正文在出水專修寺」

去天正三年乙亥十二月廿五日、 関白殿前久様御下向之  
刻、到專修寺被成尊宿、翌年三月十七日鹿兒嶋江被成、  
同七月二日還御之砌、又當寺へ被寄高駕、同八月廿二日  
及御歸路、御滞在中萬事被抽馳走之旨、依尊感當寺可被

任勅願所御一輪頂戴之儀、前代未聞、到我等茂大悦不過

之候、然ハ今年戊寅八月廿二日御繪旨被下賜之段环重候、

右之趣爲祝言進此書候、恐々謹言、

「天正六年」

八月吉日

藤原義虎(花押)

專修寺

薩摩守

藤原義虎

「上包」

專修寺

998

「林甚五〇兵衛藏」

「ロノクラニ」

「天正六年八月廿日兵庫殿御神判之御返書案文義久様」

雖爲萬一世間轉變之刻、除逆黨無二可被抽忠節、誓紙最  
以肝心、并若讒言之時者互達之、向後一味膠漆之儀勿論、  
同前之趣等、春日八幡茂可有御照覽者也、仍爲證跡染筆  
畢、恐々謹言、

「天正六年」カタカキ御案文ニナシ

八月廿日

義久

兵庫頭殿

(義弘)

「御文庫廿二番箱二卷中ニ御案文アリ、末紙ニ左ノ如シ、天正六年八月  
廿日兵庫頭殿御神判之御返書」

999

〔御文庫廿二番箱二卷中〕

去年以神戴心底露願之條々、或者雖有世上轉變之儀、無二忠勲之事、或者讒言等之時者、互可達之事、尤同心之至感、悦不少候、早々可致返翰之處、菟角押移候、勿論於永々可爲一味之旨、寔春日八幡茂可有御照覽者也、應證跡染筆畢、恐々謹言、

八月廿日

義久

左衛門督殿

〔天正五年御進上 翌年 左衛門督殿御神判之御返書案文 義久様〕

1000

〔御文庫廿二番箱二卷中〕「義久公御譜中ニ在リ」

〔妙嚴寺爲使僧渡海之時

琉球國三司官へ 御老中返翰案文  
天正六年八月廿日

誠今年御吉兆愉悅嘉祥环重不易々々、抑日州之士率已下或者退出、或者群參、應其故當邦弥康寧之段不斜候、然者就右之儀、今度者妙嚴寺并加翰彼是感了、無極之至候、殊更大平布五拾端奇意祝着候、仍乍輕塵鐵丸五束進獻、漸表心緒計候、恐惶謹言、

天正六曆仲秋廿日

越前守經

左馬助光宗

前上野介意鈞

謹上 三司官

〔伊集院右衛門太夫殿・上并殿者日州御番之条無判〕

1001

〔義久公御譜中〕

〔案文有之〕

〔天正五年左衛門督殿御神判進上 翌年御返書〕

〔本文番ハ九九九号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1002

軍役賦

一 壹町衆者主從貳人 但人鉢ハ可仁<sup>(ト)</sup>役候事、

一 貳町衆者主從三人

一 三町衆者主從四人

一 四町衆者主從五人

一 五町衆者主從六人

一 六町衆者主從七人

一 七町衆者主從八人

一 八町衆者主從九人

一 九町衆者主從十人

一 十町衆者主從十一人

右田方壹町ニ付賦、十町より百町・千町迄軍役壹町ニ付具足壹領ツ、の賦、算用を以其合点專用ニ候事、

以上

『此軍役賦者、右天正四年之御出陣賦と相並へ候而本書御座候、同時之賦之様ニ被存候、難見分ものニ而御座候、併押而考申候得者、天正四年之次ニのせ有之候時へ、天正六年日州目白坂江御出陣之時之賦ニ而御座有間敷哉』

1003

(本文書ハ九五号文書ト同文ニツキ省略ス)

「右加治木兼大村市兵衛重頼覚書ニ有之」

1004 天正六年戊寅正月

六日にハ自天草方、日州属御安利候爲御使者、使書并鎧一領進上候、此日新納武藏守迄、上津良方より爲御勝利之御祝使僧進上、七日、此日從天草方新納武藏守迄、天草之事向後可申入之条、爲其筋官途受領之間可申請、自身可致參上之事者、遠遠大義之様候之条、必以使節可奉得尊意之由、先以内義也、天草方へ雖可被成御直書、依繁多奉行中より返章也、

1005

「義久公御譜中」  
「南林寺脇寺宗甫進上」

就歸洛之儀、輝元申越間、染筆候、然者諸國士卒可勵忠功由、無二令言上、既及行候、自然從豊州至防長取出、入洛可相妨候哉、然間爲手合、防長兩國人數、向豊筑來春頃可差渡条、豊後表可乱入事、并可爲供奉同前忠儀候、此度別而馳走偏頼入候、猶輝元(毛利)・隆景(小早川)・元春(吉川)可申候也、

九月十一日

(義昭)  
(花押)

鳴津修理大夫とのへ

1006

「御日記」

一天正六年戊寅九月

廿九日、從大口新納武藏守書狀到來、趣者、從相良方到武藏守被申、大友宗麟日向表江雖一行之企候、一口迄ニ而ハ叵閉、扱ハ肥州方之衆猶々以被頼思由候て、又々八代迄眞光寺使僧下着候、一圓難成申候得共、自然別方洩聞得候而者、得御意相良之事候之条、如何之由、懇意之儀被申事候、右江者御着陣頃初而承候由也、

1007 今度依其境雜說已下等騷動之由風聞、如何候之哉、無心

元候、縱對此方雖有被疑儀、於度々向後不可有隔心之旨、

互神文之上、聊非別義候、猶諸神茂御照覽、從是弥不可

存疎齷候、可爲御納得事肝要候、委細南林寺へ申含候、

恐々謹言、

拾月十五日

義久(花押)

北郷左衛門入道殿

「上包」  
北郷左衛門入道殿

義久

「此御書、北郷時久譜中ニ在リ」

1008 「鶴田大願寺文書」

稱興寺住持職事、任先例、可執務之狀如件、

天正六年十月十七日

權大納言(義昭)

明讚西堂

1009 『雜抄』

天正六年戊寅十月廿五日、義久主率數十萬之衆、大學

兵旗以赴日州之地、是夜、義久主夢中得句云々、

うつ敵はたつたの川のみみちかな

近臣恭聞之、以爲決勝之兆矣云々、

1010 「義久公御譜中」

是歲天正六年戊寅之秋、大友新太郎後任左兵衛尉、義統・老父

左衛門尉義鎮入道稱宗隣、動豊肥筑前後六州兵衆二十餘萬、欲

侵我日州、先屯於縣之古壘、十月廿日戊辰、大友之軍殆乎

十萬圍我日州高城、城外村舎一百有餘一炬燒之、此時山

田新介有信總五百餘之士卒爲高城宰、我薩隅日健將勇士

一千餘人、代守其藩籬也、於斯時也、弟島津中務太輔家

久爲藩籬將、且復吉利下總守忠澄・鎌田出雲守政近・比

志島紀伊守國貞同守高城矣、敵兵雖侵我城、而城門不開、

旌旗不樹、爲無人者、於茲敵陣樹旗旄フツ羅弓矢、既成行伍、

自恃兵強ツツ必欲吞我日州、將士之達騎射諸卒之熟步射者不

知幾百千、加焉、唱秦青遏雲之曲、揭右軍曲水之盃、我

高城之諸將士卒ニツキ淬其鋒、斂其鏑而待運之在天耳、且復城

小而軍多、府庫之財亦耗斃矣、匪翅ヒ府庫之耗斃、城中無

水欲出而汲溪水、則敵之士卒無晝無夜常見在之、故無一

人之掬水者、一日見古牆陰處、水少湧出、至於二三日實

流出者如有源泉、我軍士三千餘人無一之有渴者矣、湧此

水者能止三千餘人之渴矣、蓋天亦有所感而如此乎、未知

其然、世人豈能測之乎哉、於此之時大友黨陰謀、欲令伊東氏之殘黨在我國中者起禍於蕭牆之中、渠等有未懷我德者、是以有從大友之陰謀者、三納村之賊徒驅百姓之不知者一千餘人、據川原田道場舉烽火、將作亂於國中、即日我軍士圍道場之寺、殺賊徒數百人、其餘黎民有荷校者、有就囚者殆乎一百餘人、未殺戮之、十月廿四日壬寅、中務大輔家久遣捷書於麿嶋、報破陣之謀於義久、義久亦與忠志之士在左右者、決其謀於帷幄者凡幾多日、其謀與捷書殆如合符矣、

同月廿五日癸卯、義久率數十萬兵衆大舉兵旗、以赴日州之地、是夜夢中得句云、

「軍記有之」  
打敵は たつたの川の紅葉哉  
近臣恭聞之、以爲決勝之兆矣、

1011 「義弘公御譜中」

天正六年戊寅之秋、豊後太守大友左衛門尉義鎮入道宗麟・同新太郎義統、動豊肥筑前後六州兵衆來、欲侵我日州、先屯于縣之古壘、而十月廿日、大友父子殆乎率十萬來、圍於日州高城、外村舍燒之於一炬、高城之宰者山田新介有信也、且復弟島津中務大輔家久爲藩籬將、率數多銳利之

士、守高城者堅矣、同年十一月朔日、太守義久公率薩隅之軍衆、到著於佐土原、忠平亦率眞幸之騎步、到佐土原也、欲擇日時犯敵陣、而連日風雨、是以徒送數日矣、同十一月十日之夜、忠平運計策俾步卒六百餘人進敵陣邊、設伏兵於道路要所待往還時節之際、忽得敵人往還佳期、屠殺三十餘人、由是敵陣騷動、而如雲霞發出來、丁此之時、伏兵起發斬戮五百餘人、且放火於松山之陣去矣、見其火烟、則所屯佐土原・都於郡之軍衆、馳進高城城外也、同月十一日、太守義久率太軍發於佐土原、揚大旆於根白坂之上、以輝軍容矣、翌早大友之將率數万甲兵、從本營下、而與我數萬兵之屯于野外者、欲較勝於一戰、我衆兵與之戰、而殺驍勇數百人、我之軍中有本田因幡守親治・北郷藏人者、遂戰死矣、由是我之步卒戰其前後者驚奔、大友之兵乘勝追之、于時忠平手戈矛、勇往而對大友之軍、示其武威、且復島津右馬頭征久・同姓圖書頭忠武、麾軍衆橫攻其軍、且復我之軍中諸將、各鼓譟踴躍、而爭先向之、其地有深淵、大友氏之諸軍與我軍士丁兵刃既接之時、人馬欲右欲左、無所可避之地、大友之軍衆不得已而入于深淵、人馬之溺死者不知幾千萬、逃其場追敗走迄美々川七八里間、伏屍於草萊之際、曝骨於沙磧之間者、不可勝

言也、既雖載 義久公之譜、而又如斯矣、

1012 「中務太輔家久譜中 初又七郎」

天正六年戊寅十月廿日戊辰、豊後太守大友新太郎義統・老父左衛門尉義鎮入道 宗麟、催豊肥筑前後六州之兵十萬餘騎來、而圍日州高城、城主山田新介有信領五百餘員之士卒、在于此矣、我之薩隅日之健將勇士一千餘員、相換守其藩籬、於此時乎、家久爲守兵之將、及吉利下總守忠澄・鎌田出雲守政近・比志島紀伊守國貞共在高城也、十一月十一日戊午、太守義久公揚大旆於根白坂之上、以輝軍容、同十二日己未早天、大友方之三陣卒數萬之甲兵、同志發出、而與我之 太守軍衆屯野外者、欲較勝於一戰、太守之兵競進對之、家久亦發於城裏、定於十死一生、防戰移刻、敵兵筋力漸倦、而敗走爭先、路頭有深淵之不徒渡者、太軍不得遁去、而陷溺于深淵者、不可勝言、其餘軍衆棄胄曳兵任足逃去、家久單騎而突入于太軍、斬戮于將帥者十有餘人、一人如斯、我之數萬之兵無一人之不討殺敵兵者、追迄美々川、虜者殆五萬餘員云云、家久之家臣等斬獲敵首者其數多矣、不幸而戰死者亦有之、其後賜日州佐土原之地、所以移居也、

1013 「北郷時久譜中」

天正六年十月中旬、大友父子率大軍、入日州、圍新納院高城、太守公催薩隅日三州之兵、發向于高城、一雲並息次郎・同彈正忠忠虎引數千兵、爲先鋒、路經鬼山、先屯于宮崎城定軍列、時聞城中有反心者、耳語伊東勸解由左衛門、議招入敵兵於當城陷、則走會戰于都於郡河原田道場、北郷藏人久盛抽粉骨追退大敵、得全城、

1014 「御文庫廿二番箱二卷中」「義久公御譜中ニ在リ」  
「霧嶋へ御願文案」

願書

今度日州之防戰、令 守護、於爲利運者、眞讀大般若六部、必可致勤行者也、

天正六年戊寅

十月廿六日

藤原義久

霧嶋山

1015 「忠元勲功記」

一天正六寅十月、豊後國主大友宗麟大軍召列、伊東氏を案内として、新納院高城ニ押寄せ、地頭山田新助有信

を攻囲候段、鹿兒嶋江相知レ、同十一月、貫明様初上御兄弟様御救として、御出馬、同十二日、石之城下ニ而大軍被討破、耳川迄追討相成、敵六萬人爲被討取節も、忠元儀者前条同断、玖摩境御番ニ付、嫡子忠堯江御供爲仕候而、參陣不仕、出水領主嶋津義虎も同断ニ而、肥後口警固ニ付、出陣無御座、其比玖广より日々大口を相窺申事故、忠元計策を以、義虎并忠元嫡子忠堯と平泉地頭伊地知民部少輔重康等ニ致示談置、忠堯と重康を兩手ニ相分け、いづれも人衆召列、山野之内ニ伏置、忠元釣手之人數召列、玖广境迄出張候處、玖摩之物頭早牟田城之介、人數引立追掛ケ候ニ付、忠元僞走、能時分取返シ候を見合、忠堯・重康茂一時ニ起合、右之城之介を中ニ取巻、主從七人爲討取由、此方ニ者出水之伊地知左近將監重範蒙手疵、重康中間一人城之介より爲被討由御座候、

「伊地知孫兵衛初名重範日記」

「六年カ」  
 一天正元年ニ、求摩之鍵先早牟田城之介殿ヲ、新納武藏守殿山野と求摩境ニ、ふか下タと申處ニからくり寄せ、御討被成候時、十六歳ニ而初具足仕候、郎等後より切

申候間、腰に手負申候、新納刑部太輔殿・伊地知民部「忠堯也」少殿伏草起合被成、主從七人討果被成候、于今城之助殿石、ふか下タに立候而御座候、「平泉地頭也」民部少殿中間を城之介殿切殺被成候、其時出水之薩州様「義虎也」爲褒美、御腰物兼光拜領仕候、

1017

「義久公御譜中」

天正六年十一月朔日戊申、義久至於佐土原、佐土原城郭村舍雖有數千戸、從軍之士卒數十万、無可寄宿之舍屋、諸軍大半屯於曠野矣、擇日以欲攻大友氏之陣、而連日風雨、只待天晴而已、

1018

「正文在賣於郡華林寺」

願書

此度高城口干戈於爲利運者、調次第、法花經一萬部、必可致執行者也、

天正六年戊寅

十一月四日

藤原義久御判

「上包也」  
 御願書

「正文在曾於郡花林寺」

願書

右意趣者、今度大友衆、高城境着陣、難儀至極、倍以御神慮之加護、此一戰於致勝利者、高城一所之事、爲霧嶋御領、稻物必可奉納之者也、

天正六年戊寅

十一月四日

藤原義久御判

霧嶋山

「上包有之」  
御願書

「義久公御譜中」

天正六年十一月十日之夜、忠平運計策教步卒六百餘人進敵陣邊、設伏兵於道路之傍、待往還時節之際、忽得佳期屠殺敵人三十餘員、由是敵陣騷動、而如雲霞發出來、丁此之時、伏兵起發斬數五百餘人、且放火於松山陣去矣、屯都於郡・佐土原軍衆見夫火煙、馳進高城城外、同十一日戊午、義久率太軍發於佐土原、揚大旆於根白坂之上、以輝軍容、老輩等曰、我之軍威重於泰山、大友之軍危似累卵、是日福島院有司伊集院下野守久治率數百之兵衆、爲我前鋒矣、逞志扼腕直前衝大友氏之松山陣、陣中數千

之兵無一人當其鋒者、陣忽瓜潰、即解一面之圍、久治如志得入高城、此夜筑後州高良山座主在河原陣、見松山一陣陷、請和於我高城、城中相議云、夫兵惡不戰、武貴止戈、即令比志島紀伊守至於河原陣、運於和親之策、翌早已未、大友之將率數萬甲兵、勵匹夫之志、從本陣下、而我數萬兵之屯於野外者、欲較勝於一戰、其勢似不可當者、然而我兵衆與之戰、而殺其驍勇之兵者數百人、我軍中亦有本田因幡守親治・北鄉藏人者、相戰而死矣、於茲乎、我步卒之在其後者驚奔、軍士之在其前者亦恐而畏之、大友之兵乘勝追之、是時兵庫頭忠平率數萬之甲兵、親手戈矛勇往、而對大友之軍、示其威武者高於銀山、堅於鐵壁、其氣概大寒乎大友諸軍之膽矣、島津右馬頭征久・同姓圖書頭忠長サシマノチカ、率數萬之兵衆橫攻其軍、兩將聲勢誰敢敵之、且復我軍中諸將數十萬鼓譟踴躍、而爭先赴之、此地有深淵、深者殆乎二丈餘、其縱百餘丈、其橫三丈餘、平日無徒渡者、是日大友諸軍與我軍士丁兵刃既接之時、人馬驚汗欲右欲左、而無可避之地、不得已而大友之軍衆入於深淵、人馬之溺死者不知幾千萬、其旌旗羽被之浮沈於水上者、宛如紅葉之浮秋水、嚮之所謂夢中之句、非符其識者乎、非止於此、有乘馬從徒向美美川而奔者、有棄甲曳兵望彥

嶽而走者、我數萬之軍追而攻之、丁此之時、中務大輔家久出高城門、不俟武夫之從而來、單騎而入大友逃散之軍中、要窺寇遮走北、親殺將士者十餘人、一人殺十餘人、而況我十餘萬之甲士、無一人之不屠殺其敵者、我軍士之勢如亂雲敷空、敵兵之敗如秋葉飄風、其向彥嶽而走者、高城宰山田新介追之逐之、皆悉靡之、高城與美美川地之相去者七八里、其縱橫無際涯、悲夫伏屍於草萊之際、曝骨於沙磧之間者數十萬矣、是日大友一將不知誰某、率士卒七十餘人、不亂行伍隔數百步而走矣、我兵爭先追之、其將帥班師與我兵戰、其斬首者二十餘人、我軍中亦海江田主殿允・眞方大炊允相鬪而死、大友氏數十萬之軍中、能逞戰功者只此一將而已、後聞一將者田原紹忍也未知是否嗚呼、大友氏父子長傲縱慾、妄侵我日州、慾之溺其一心者自古皆然、可不戒哉、其害及六國數十萬之衆、可勝言哉、熱按古之王者、輕不發兵於外國、若有發則必有當其理也、大友氏之發兵於我州者、無一當理矣、昔者殷湯王、以桀盛不祀一征葛、齊桓公以包茅不入遠伐楚、包茅之不入者、日本諸侯自古皆然、非獨我也、桀盛之不祀者、獨大友氏爲然、其故何哉、古來神宇、佛廬、或廢之、或焚之、不祀先祖、不祀外神、常隨南蠻缺舌之人、學邪術播妄行、而非仁義

之道、貴難得之貨、作亡國之謀、欲務廣土地、爲諸侯笑、所謂不奪不厭者乎、大史公曰、嗟乎利誠亂之始也、夫子罕言利、常防其源也、大友氏父子欲利吾國、而卻危吾國、聖賢之言豈可誣哉、同十三日庚申、義久揚大旆於敵陣、河田駿河守義朗高唱凱歌、而我數萬之軍擊節和之、其聲聳動國中矣、是日諸軍至於三城與故縣、安逃亡民、民亦解其慍矣、先是黎民之從大友氏之陰謀者、未決其罪之輕重、是時猶在光照寺、諸將議云、夫干戈者爲士者之所業也、假有陰謀、黎民何干之哉、黎民而作亂者古未之聞、是膺是懲致太平之道也、於茲出此黎民於六野原、欲聲其罪而懲之、黎民各各起不可奪之志、仇於我之士卒、此時有瀧聞宗運者、與我士卒同謀一一靡之、自是以來國中無一犯上者、況於作亂乎、是月二十八日乙亥、散軍義久歸於魔府者也、

1021

「右馬頭征久後在忠興一譜中流冊中」

天正六年秋、豐後太守大友左衛門尉義鎮入道宗麟・其子新太郎義統欲復入伊東、而動豐肥筑前後六州衆、其兵殆八萬、十月二十日、襲來日州新納院高城、城代山田新助有信其兵僅五百、守城至危、此時中務大輔家久義久主之令弟

在佐土原城聞之、則相催近境諸將、走馬入高城、合力於有信、告急于麿府、故同月二十五日、主將甲兵三萬而進發、征久亦爲從軍、十一月朔日、主進軍入佐土原窺敵陣動靜、同十日曉、主令諸將帥于高城之南下水流、或向河或一隊別屯、各勵勇爭鋒、大友之大軍進來擊先陣奔之、於是味方戰死者多、忠平主出軍於筋交瀬防之、令弟左衛門督歲久・伊集院忠棟之軍亦援之、敵大軍競來、欲決雌雄于一舉、忠平主指麾勸衆奮戰、其威武嚴、起士卒之勇、其氣概大寒敵軍之膽、時征久及忠長・上井覺兼共三軍進自梁瀬橫擊之、盡筋力挑戰、於是敵兵頻擾騷、家久・有信開城門突出、敵軍大敗績、捨甲引兵、而走多逃入深淵稱大湖死、諸將亂軍追奔逐北、各有軍功、就中此般大捷、征久・忠長等之雄略可謂其功大也、

1022

「右馬頭以久譜中在忠將一  
流冊中」

天正六年戊寅十月、豊後州太守大友新太郎義統・老父義鎮法師宗麟、動豊肥筑前後六州兵衆來、而欲侵我之日州、同廿日、圍新納院高城、城外村舍一百有餘一炬燒之、十一月十一日、太守義久公率薩隅騎步數十萬、欲攻渠之陣壘、先到于根白坂上、揚大旗輝軍容、大友之將率數萬

甲兵、勵匹夫之勇、欲較勝於一戰、然而我兵衆與之戰、而斬首多矣、我軍中亦本田因幡・北郷藏人相戰而死矣、以故大友之兵乘勝追之、當此之時、兵庫頭忠平主、親手戈矛勇往、而對之示其威武、寒敵兵之膽矣、乘此佳期、以久・島津圖書頭忠長麾我軍衆橫攻敵軍、敵軍忽敗瓜潰、誰不謂兩輩之大功乎哉、

「同人同時、右ノ如ク譜中細略アリ、參照アルヘシ」

1023

「圖書頭忠長譜中」

天正六年之冬、大友新太郎義統・老父義鎮催數萬之軍衆來、圍我之日州新納院高城、太守義久主聞之、則率大軍發於麿嶋、先屯于佐土原、忠長亦從其軍矣、十一月十一日戊午、義久主發於佐土原、揚大旗於根白坂之上、以輝軍容、翌早已未大友之將率數萬甲兵、勵匹夫之志、自本營發出來、而與我之數萬兵之屯野外者、欲較勝於一戰、其勢似不可當者、然而我之軍與之戰、而殺勇銳之兵者數百人、我軍中亦有本田因幡守親治・北郷藏人者、遂戰死矣、於茲大友之兵乘其勢、追我兵之有退者、于時兵庫頭忠平率數萬之甲兵、親手戈矛勇進而對大友之軍、島津右馬頭征久・忠長亦麾數萬之兵衆橫攻其軍、且復其餘

諸將鼓譟躡躡、而爭先赴之、此地有深澗之無徒渡者、大友之軍士丁兵刃既接之時、忽敗而人馬欲右欲左、無可避之地、以不得已而悉入深澗溺死者不知幾千萬、委曲記于太守之譜中、故略于此矣、

1024 「北郷時久譜中」

同年十一月十二日、大友之將發大軍、對 太守義久公之陣、欲決勝於一戰、而一雲並相久・忠虎競進大戰、北郷藏人頭久盛戰死拔群也、今布在歷史、其外家臣村田能登守經重・山中宗左衛門等、其外戰死者多、遂破大敵、追亡至美美河盡誅戮之、 太守公御感不斜、此由達京都、飛鳥井雅繼卿送書於一雲、

1025 「北郷時久長男常陸介相久譜中」

天正六年十一月十二日、 太守義久公與大友義鎮父子合戰新納高城、〔原力、本ノ、〕大友兵競進急、相久與島津右馬頭征久勵兵橫擊、大破之、敵軍敗亡、

1026 「樺山兵部太輔規久譜中」

天正六年戊寅、大友左衛門尉義鎮・同新太郎義統父子催

豐肥筑前後六州之兵來、十月廿日、圍日州高城、敵陣構四个所、十一月十一日、味方之軍發出於財部、而大友之責松山陣、陣忽敗、而解一面之圍、于時規久入于高城也、天正六年、賜穆佐之地頭職、

1027 「義久公御譜中」

「案文在平松衆黒田善左衛門」  
先年隅州岩鋌干戈以來、夜白度之軍忠誠以無比類候、就中此節對高城堺大友家着陣、既不伏處、被顯連日之才智、至于時名譽之御粉骨、珍重々、弥永之戰功可爲感悅候、依之染筆者也、

天正六年十一月十三日 義久  
〔義弘〕  
兵庫頭殿

1028 「案文有之」

今度至高城大友家着陣、折角之處、被致夜白軍勞之謂、輒被逐本懐、寔御高名無比類候、仍爲此等之忠節令宛行領地、弥可被抽戰功事、可爲祝着者也、恐之謹言、

天正六年拾一月十三日 義久  
〔家久〕  
中務少輔殿

〔此二通御案文、御文庫廿二番箱二卷中ニ在リ〕

1029 「北郷忠虎譜中」

天正六年十一月十三日、義久公賜誓狀於忠虎、有正文、左記之、

1030 「北郷家藏」

起請文

到永代無二可被致奉公之由、尤以神妙、殊雜說之刻者、不廻時日、互可申披、并縱雖爲親類年來之好、於逆黨者不可有御同懷之段、条々被顯誓紙感入候、弥無疎遠可致一味事、

若令違犯者、

〔牛王〕  
奉始上梵天帝釈四大王、下堅牢地神、惣而日本國中六十  
余州大小神祇、別而開門正一位 新田八幡大菩薩 諏訪  
上下大明神 稻荷大明神 天滿大自在天神部類眷屬神爵  
冥爵可蒙罷也、仍起請如件、

天正六年 戊寅霜月十三日 義久(花押)

〔忠虎〕  
北郷彈正忠殿

1031 「御文庫廿二番箱二卷中」

爲去夏廻礼、今度遮而御使書珍重候、抑就 御入洛之儀、東北士卒可被遂忠懃粧、尤專要候、然處大友家 上意疎懷故、來春到豊筑一戰之御催、快然之儀候、乍去六國凶徒、去月於日州悉致誅伐之上、更々御歸京之妨、不可有其甲斐候哉、寔雖爲遠遠、混公私、倍可申談事、本悅候、仍太刀一腰・銀子祝着候、猶五戒坊可被達之候、恐々、

1032 對輝元度々雖申談候、到各々無音非本懷候、抑大友家御入洛之妨候之坎、依其明春豊筑之一戰被相催之由、幸感

悅之義候、然者今度於日州表、六ヶ國士卒悉致誅伐之条、諸境倍可爲案利候之哉、向後連綿可申達事本望候、余者五戒坊可爲演說候、

〔吉川殿〕 御書案  
小早川殿へ

1033 「義久公御譜中」

〔案文有之〕「御文庫廿二番箱二卷中ニ在リ」

從輝元使僧被差越候之處、被成下 御内書候、忝次第候、抑御入洛之儀、東北之士卒悉可被抽忠懃之段、尤以肝要候、於遠境茂相應之儀、可致入魂候、然者大友家縱雖爲

逆心、不可有指煩候、其謂此度到日州表、六ヶ國之族五

万餘騎致誅伐、已來諸口運籌策候之条、可御心安候之哉、

併明春防長之実勢豊筑發向之砌、龍造寺申合、寄々可令

馳走候、猶五戒坊可被相達之間、不能細筆候、恐々謹言、

拾二月十日

義久

一色駿河守殿

眞木嶋玄蕃頭殿

御返報

〔上書裏有之〕

〔到來天正六年十二月朔日 從毛利殿使僧五戒坊下向之時〕

〔一色駿河守殿 御返書案文 眞木嶋玄蕃頭殿〕

天正六年十二月十日

1034

〔義久公譜中〕

一天正六年戊寅秋、豊後太守大友左衛門尉義鎮入道宗麟

・其子新太郎義統欲復入伊東、而率豊肥筑前後六州之

兵、先屯於日州縣古壘、其兵八万、十月廿日、圍我日

州高城、城代山田新助有信守之、義久以三万衝大友之

軍大勝之、大友父子屢逃歸豊後、○義久十一月廿八日、

歸鹿兒島、

〔此一枚へ重復トナル欤、御譜中ヲ略シテ如此カ〕

1035

就今度不慮之干戈、可爲當家之幕下之段、尤歡悅候、然

者爲此等之至祝、使書并太刀・織色御懇志珎重候、彌向

後無疎隔可申承事本懐候、仍太刀一腰・織物竜端進之候、

聊表祝意計候、猶年寄可達之候、恐々謹言、

〔當天正六年〕

拾二月十七日

義久〔花押〕

星野九郎殿

1036

急度捧一書候、仍近日如其聞者、日州表御防戰殊外被得

御勝利、數ヶ所之城被成御知行之由候、尤千秋万歳候、

此等之御悅爲可申上、奉捧愚札候、可然様ニ御取合御披

露所仰候、益各於被成御賢略者、伊東退散不可被廻踵候

欤、彼國御退治之御祝言、重疊可申入候、恐々謹言、

〔天正六年欤〕

十二月廿一日

天草大夫 鎮尚〔花押〕

喜入攝津守殿

御宿所

1037

〔義久公御譜中〕〔御文庫拾六番箱三卷中ニ在リ〕

〔正文有之〕

熟視日豊之作略、夫豊府者芥佛法土五常、混藏經於汚瀆、

穢儒書於糞泥、犯法度欺賢慮、擲礫破門戶、放火灰柴關、

於迂子小路爲強殺二盜、不是大敗之基乎哉、果然復觀日府之體、君慢臣臣蔑君、故無公私之禮分、亂乎法樹黨、或時五六人、或時十廿卅餘、自巧禍失遇害追之二難、如惡文學孝子酬慈父之讎、似惡教師野鹿睨獵士之行、口言弓箭之儀、心爲逸遊之思、如責民獄卒之所作、偶思道者被惡萬人、似小雀遇快鷹、飽貯金銀忘貯筋糧、舌易蔑強敵、難嘗聖言治國之難、不是乞食基乎哉、既日州大敗之事、天正五丑之上已後讖言之、同季冬上旬、合乎符於讖言、豐軍大亂之事、同季冬下旬讖言之、天正六寅仲冬中旬、合乎符於讖言矣、得今之生於桑鎮西者、真觀日豐之禍略、銘乎骨髓乎體能除其誤、人人悉可今之堯舜矣、請三郡之賢士懇讀右之短章昭鑑之可也、抑又予三箇年之間、掛錫於八代、義陽公懇志恩榮感激不少、以四溟五瀆亦比不足耳、既今及暴亂之節、空乎公恩、欲辭去者、寔千慙萬愧矣、萬人之極謗推之量之、雖然陽公欲調合聖法之妙藥、治萬衆失道之大病、則僉謂曰、昔無若嚴制、公今行之、是則閑齊大惡賊來密啓故也、將又被正性奪酒力、誤心傷人犯法遇災者、以小領買大罪、則巧乎枉非歸理、其巧不成、則彼惡賊觸公耳、故如欺其家族眷屬欲窺我、古人有道云、天作孽猶可辟、自作孽不可遁云云、何不觀已

己過乎、予說誨孔子道、則清主亦專國家久長之計、故追罰亂法政者、此節亂政之餘黨惡欺予之說道諺云、料知孔子在世日逢追罰者之多矣、毫端不辨以無道遇罪也、不見乎孔丘在魯時、由大司寇、既七日、而誅亂政大夫小正卯、而居三月、而魯大治云云、不罰亂政失道者、縱雖井隣之間生百千之孔子、終在何益乎、復其族謂予曰、諫君不欲失人、欲君失人、爲合戰必不勝矣、予默思云、楚項勝戰七十二回、而亡已失天下、所以常失聖道也、漢高劣戰七十二度、而播名王天下、所以行聖道無怠也、古人云、好陳者不戰、好戰者不死云々、戰勝也、皆是天之祐也、天祐者在道道、親不知在其例麼、以織田信長公之三百餘兵、破今河義元公之貳萬餘騎之軍、終害義元公、不是元公之弱、不是長公之四調、以兼日之無道而亡、以先祖之善行而勝矣、薩之榮非有道乎、豐之亂非無道乎、聽亦能達兮、亂法失道者雜居、則縱雖勝百戰、應終失國家、正法行道者聚會、則雖弱百戰、必以天之祐、武運家連子孫共長久安全矣、君豈失人、只失無道也、亂禮法失聖道者、未見作乎人底書、人者唯言君子而已、予每作講釋、初不須善柔、言言緊切頻欲除國之病、則會者萬之一乎、其不會者、或憎或嘲云、彼吐聖書無之責人、以衆評憎走焉、

而於貴母芳姑當君之前、巧種種狂言綺語、欲漸々輕位行、故始賞如親師、今如國人、說聖教笑曰邪外、作聖占欺曰不合、以言言不爲善、以事事大稱惡、家僮於路傍欲害之、領地先詔爲我物、具人面獸心者集、則歡拊爲予之背語、造萬般異戲之惡名、動及盜姪妾、冤謗予者、作當世之傑特之大器用人、噫乎難矣乎、奈何免今之世也、雖君恩重無限、懼乎萬人之讒虎口、天之道者不遠、唯賢才而已、惡賢才者、天豈不放之、天之棄者豈不大敗乎、憐哉悲哉、古今無道之族、儘冤主君、豈不冤一箇之旅客、或人曰、及亂若遇家君之良當、雖無平日之毫恩我從而奉事、爾背恩辟亂何也、予答云、以汝比我、誠如以一毫方須彌、以一滴方大海、三十年來雖閱千經萬論、賢知者未見處無道之衢之文句、論語不道乎、賢者辟世、其次辟地、其次辟色、其次辟言云々、汝樂蝸廬、予家四海、休休合取狗口去、即閉口、而退矣、聖人乘桴、閑齋踏鞋、雖同途於古聖、心狂拙者乎、惡予之住在者、必欺馳退、從住遇禍不如退受欺、遇者笑聖言、蝓蟻賤蘇合、唯莫如去、譬如大樹下之草木、不生長非天恩之不到、被枝葉廕埋不長也、今之予樹下之草木而已、可笑可笑、咨三郡老小、欲以流言失家之綱長者、偶有習公義事君者、欺號古體笑之、己者不

異狸之步狗之行、恣樹黨飽惡道、悉形模日豐之政、各自造亂國失家之基、臨乎其亂失之時、不言己已過事、總爲君之過者必矣、然則雖生千悔回萬慮、終有何長所乎、各好感右之短章、必道道法法應振威於隣國、若惡擲此卷、必公私離散、而可乞殘食於他境、會之則知妙見之詫、則懼天魔之難矣、請電眸之賢聖、垂仁採納焉、  
良辰天正龍集戊寅季冬上辭日

三郡之名士

一覽惟幸

閑齋頓首

天正十六年戊子梅月三日書之、

日西眞幸院飯野東圓齋

1038

天正六年戊寅十一月、日州高城江大友か大軍寄來り、御大將義久主并忠平主御出馬ニ而、相從輩耳川諸所ニ於

て軍勞、

左衛門尉歲久

全

右馬頭以久

島津圖書頭忠長防戦功アリ 嶋津豊後守親久

北郷入道一雲防戦功アリ 同一郎讀岐守忠虎カ

樺山安藝守範久 佐多山城守忠孝

新納近江守忠武

川上上野守久隅

伊集院下野守

同右衛門兵衛尉

大野治部太夫駿河守同人カ

寺山四郎左衛門尉久兼

同三河守

同源助

桂常陸守

顯娃左馬頭久虎

同右衛門太夫忠棟

○鎌田筑前守政心天正十四七月  
鷹取城攻戦死

種子島左近太夫時堯

祢寢右近太夫重武

同又七郎

同外記

△伊地知民部太夫重興

東郷弥左衛門尉重尚

鎌田尾張守防戦功アリ

○平田新左衛門宗張カ、天正十五  
三月戦死

祢答院二郎能重

入来院彈正忠重豊

○同新三郎

増宗ニスレハ十三歳ニ  
當ル、左ナクハ宗張ニ  
弟新次郎盛房ナラン、  
盛房ハ肥後藏人養嗣、  
市山戦死也

同次郎三郎

次郎四郎重尚コトカ、  
トナル

御大將

肝付三郎兼則

肝付彈正忠兼連兼寛カ

○平田狩野助

宗慶初虎五郎、平次  
慶長五閏ケ原戦  
二三十才時ニ當ル、死四十五才

平田豊前介

豊前守宗祇ナラン、天  
正十八九比指宿地頭  
職也、初民部左衛門尉

吉利下総守季久

比志島宮内少輔有國防戦功アリ

新納伊勢入道一慶

初右衛門  
佐康久

同右衛門佐

伊尻伊賀守

吉田若狹守

新納十郎左衛門尉

新納縫殿助久時初忠時、藤四郎、  
忠識ノ子、  
祿地頭也

土持彈正忠綱實

日置周防介防戦功アリ

○新納刑部大輔忠堯

深江城  
戦死

新納越後守忠包

初兵部左衛門尉

松浦筑前守足輕大將也、海江  
田主殿杯同列也

二階堂安房介

川上備前守

川上左近將監久辰カ

鎌田出雲守都於部勢を相具し、高  
城ニ馳驅る  
軍勞アリ

菱刈民部太夫頼清後年右衛門、  
戦死庄内

川上參河守忠智

川上武藏守

本田紀伊守親廣

本田大炊太夫親重重親ノ子

○大寺大炊介天正十五年三月  
梓越戦死

比志島美濃守國親カ

本田与左衛門公親入道玄叱

本田下野守親貞

太田治部少輔

市來美作守

本田刑部丞痛手

本田三郎五郎痛手

○市來備前守矢崎城攻ニ戦死カ

伊地知備後守重康入道喜口

本田弥五郎刑部コトカ

平田美濃守執事トアレハ  
昌宗ナラン

伊地知伯耆守

同又八

敷根中務丞頼継

上井伊勢守兼長

○伊地知丹後守重政

天正十五年二月豊後野津戦死

○宮原筑前守景種

天正十五年三月戦死

比志嶋式部少輔國季

川田駿河守義朗

○宮原越中守岩屋攻戦死是カ

鮫島土佐守

同又左衛門尉

猿渡大炊助

稅所新介

吉田美作守

上村右近將監〔城中ニ忍入〕

田民部左衛門〔村田成從兵之〕  
〔中ニ忍入〕  
〔戰ニ〕

町田出羽守〔久倍〕

同五郎太郎

鎌田刑部左衛門尉〔政廣カ〕

喜入攝津守〔孝久〕

村田越前守〔經定〕

村田右衛門尉

上原長門守〔尚近〕防戰カアリ〕

上原太郎五郎

上原勘解由左衛門〔島原戰死〕

上原内藏助〔矢崎城攻戰死〕

伊集院美作守久宣〔豊後高田戰死〕

奈良安藝守〔狩野介コトカ〕

奈良原狩野介〔防戰アリ〕

逆瀬川奉膳兵衛〔島原戰死〕  
〔武安カ〕

富山備中

日置越後介

梅北宮内左衛門

野村堅介

野村兵部少輔

稻留新助〔相良日向守長泰コト也〕

遠矢信濃守

右松右馬丞

白濱周防守〔天正十五高田戰死カ〕

三原右京亮

木脇若狹守

高崎大炊助

東郷与介

友野左近將監

相木隼人佐

有馬主馬首〔濱田善兵衛重泰〕

勝部弥二郎

堀内大圓坊

和田圓覚坊

矢上彈正忠〔中務太輔内〕  
〔天正十五年二月十八日戰死〕

田中筑前介〔中務太輔内〕  
〔天正十四年十月量後ニ戰死〕  
永山大炊左衛門尉

長野金兵衛尉〔中務太輔内〕  
伊集院九郎

大友御合戰御日帳写

一天正六曆戊寅九月十一日、未ノ刻山東へ就御行之儀被

成御發足、御劔本田紀伊守、御旗之役三原右京亮、御

旗指者色紙金右衛門、其外御供來鹿兒島之人數迄を被

召列、先御諏訪江被成、御參、直ニ御立候也、從松尾

坂邊御吉例之雨終日也、夜ニ入帖佐之内餅田名觸主計

助所へ被成御座、御塩參、聽而御臺數返之御酒、其砌

平田新四郎御着、目出度由被申上、御樽一荷・折肴進

上、帖佐衆中茂少く祇候也、

一十二日、卯刻餅田名八日町ヨリ長濱之内鳩之脇まで御

船ニ被召、御劔御旗之役御近習衆少く御座船ニ御供也、

其外者從陸地鳩之脇濱邊迄御迎ニ被參、自御船元御興

ニ被召、社家衆留主式部少輔・桑幡左馬助辻道迄被罷

出、澤永賢父子中途出合被申、濱之市別當茂中途迄御

供申也、酉刻始霧嶋山之麓田口名へ被成、御着、其砌從

清水町田周防助祇候也、并霧嶋法印被成參上、御樽一

荷・折肴進上、其比山東郡賀平等寺爲使僧被參、意趣

直ニ被聞召、則本田下野守・白濱周防介兩人被召出、様子被 仰聞候、

一十三日、雨、卯刻田口名を被成 御立、霧島山之麓作道を被成御通、從高原御迎衆中途迄被參、地頭上原長門守依留守、高原衆中大手之原へ柴屋を構御會尺被申、長門守三男罷出、中途迄御供被申、野尻衆中猿瀬渡口迄御迎ニ被參、酉刻野尻被成 御越着、内城市來美作守所へ被成御座、則三献被上、御臺本田紀伊守賀雲御座ニ被參、敷返之御酒也、

一十四日、鹿兒嶋<sup>〔本ノマ〕</sup>之御供衆二手ニ賦分、日州石之陣所へ二番替之校量ニ被差遣、此上川上源三郎就領地之祭礼、自山東罷歸候之由、御點合被申上、<sup>〔本マ〕</sup>此日野尻之城外廻被爲 御覽候、

一十五日、御供衆各出仕也、此日石之城へ一行之御催也、此日從飯野御使者白坂宮内少輔、意趣白濱周防介被申上、此日霧嶋・鶴戸・妻霧嶋方三社へ爲御祈禱、仁王經三部講讀也、酉刻自佐土原伊集院右衛門太夫以書狀就石ニ御行ニ、昨日十四日酉之刻、各被打立由注進也、一十六日、從大口新納武藏守使僧、意趣吉田刑部少輔被聞セ、此日敷根入道山東御番罷在候之通爲可申上祗候、

此日從頼娃小四郎方以津曲宮内少輔被申子細、白濱周防介被聞セ、此日 兵庫頭殿從飯野 御參上之事、今月廿日比ニ可被差延由、本田下野守・白濱周防介從兩人前以書狀被申越、此晚都於郡從長知寺 御着、目出度由以使僧被申上候、

一十七日、吉田刑部少輔山東へ爲御使被差遣、午刻從石之陣所鎌田出雲守以使僧、石へ御陣無何事結構被執調由被申上、同申ノ刻、從老名敷中同所茂同篇之儀、使僧西之房ニ而被申上、

一十八日、爲 御遊山、あと瀬之渡之上迄被成 御差出、御歸宅之砌從北郷殿野尻迄御發足、目出度奉存候由、同名右衛門兵衛を以被申上御案内也、

一十九日、北郷殿之使者 御見參、意趣本田下野守被聞セ、則内城表之座ニ而、使者本田下野守御酒寄合被申、此日栗野ノ八幡之御祭礼成就之御水白坂藏人持參、此日 兵庫頭殿野尻へ御着也、白濱周防介中途迄打迎ニ被罷出候、

一廿日、兵庫頭殿被成差出、御樽一荷・折着進上、則御寄合本田紀伊守加雲齋被參御座、

一廿一日、野尻之城近山ニ而狩之爲御慰 御登セ也、兵

庫頭殿も被成御供、此日石之御陣へ御遣候使僧被罷歸、  
吉田刑部少輔〔本ノマ、〕被歸陣へ御遣也、鹿兒島衆も被罷歸、

一廿二日、吉田平次郎前ム御發足目出度由、以使僧被  
申上、此日菱刈表之衆新納刑部太輔・町田三郎五郎・  
白濱式部少輔・菱刈孫三郎方此衆を始、山東へ罷立候  
通爲可申上祗候、

一廿三日、山東財部ム左衛門督殿之御使僧、意趣白濱周  
防介被承、此日兵庫頭殿如飯野被成歸宅、此日新納四  
郎殿從平泉參上、此日三原右京亮・絮阿弥兩人石之陣  
へ御使也、

一廿四日、鎌田源左衛門殿伊作妙現御祭礼成就御水持參、  
此日伊地知又八・平田右近將監・高城左京亮石之陣へ  
被遣候之処、氣任ニ長々滞留曲事ニ被 思召候由、稱  
被 仰出、依夫三人斟酌也、此晚新納四郎殿へ御寄合、  
本日記伊守御座ニ被參、此晚石之御陣ム町田出羽守・  
税所新介兩人爲使被參、此日和泉川村金兵衛爲御使被  
差遣、

一廿五日、野村民部少輔石之御陣へ御使也、此朝町田出  
羽守・税所新介如御陣御暇被申候、

一廿六日、朝呼ニ被成 御登候、此日山東綾之米良備前

守ム以使僧、豊後衆耳川を渡候之由、從佐土原注進之  
段被申上、此日以御供衆野尻大手之口普請也、

一廿七日、從栴山殿使僧俊藏主、意趣本田下野守被聞セ、  
此日野尻之衆中御酒進上、此日從種子嶋、番衆岩川民  
部少輔野尻内城ニ而被懸 御目、先刻之石之城口働之  
時、手火箭射通、別而辛勞神妙之由、被成 御感、此  
日山東財部川上三河守前ム御使僧、豊後衆少々耳川を  
渡候へ共、無差儀引退、無何事由被申上、此日鹿兒島  
被居残たる衆、少々御座所へ被馳參、此日新納四郎殿  
へ御寄合、加雲御座へ被參、

一廿八日、野尻惣社〔本ノマ、〕大王へ 御社參、地下旅衆御供也、  
御幣宮田坊持參也、大宮可祝子、依伊東代者拜殿之臺  
人衆也、此日之鶴戸之別當坊御祈禱之御札配帙持參、  
御樽一荷進上也、

一廿九日、高原之鎮守へ爲 御代宮田坊社參、此日都於  
郡之長知寺〔本ノマ、〕守家也、爲祝千疋進上、此日從義虎野尻迄  
御發足目出度被思由、老名敷中迄として御書狀を以被  
仰候也、彼飛脚石之御陣所へ罷通也、此日從大口新納  
武藏守書札到來、大方趣者頃日從相良方、到武藏守以  
使僧、大友入道宗麟日向表へ雖一行之企候、一口迄ニ

而者難閉、「目款本ノマ、」扱者肥州口之衆猶々以被頼思由ニテ、又々八代迄眞光寺と言使僧下着候、一圓難申候得共、自然從別方洩聞得而者、得御意相良之事ニ候条、如何之由懇意之儀被申事ニ候、一ニ者石へ、御着陣頃始而承候通、又々栗野・横川へ雜紛之儀「本ノマ、」武藏守助定頼入由、此三ヶ條無題目、此日紙屋之地頭稻留新介從石之御陣、以同名大膳亮 御發足目出度奉存候之由被申上、此日鹿兒嶋衆從去八月初山東へ御番手衆、野尻之御座所若無人數ニ哉候半と、老名數中御分別各參上也、御陣者依猛勢其内ヲ寄々高城・財部境目へ被差籠、此日新納殿鷹一進上、此夜戌刻從穗北野邊名字之方を以被申上者、穗北へ野心人多々候、其内ノ致返忠三人者無吳儀被擲捕セ由也、

一晦日、從石之御陣御左右、昨日廿九日石之城へ被仰越者、僧被執延間敷進退、早々城を可被相渡候、左候ハ、道之口を遣「本ノマ、」、堅固ニ可被送セ由、日置越後守・市來軍介從兩人之前被言セ、無頼方故ニ哉、無吳儀應其趣、僧者從今日筋留可申由也、從夫人質執替談合定、從御陣德持舍人佐・有馬右衛門尉人質被遣、石ノ井尻伊賀守・荒武右馬介兩人也、此日石之城無篇目被請取セ、

石之衆長倉勘解由左衛門尉始悉如三城被送遣、此日野尻之南原ニ而、若キ衆江鴉狩させられ、御野遊也、此晚從佐土原鎌田尾張守被申上、一昨日廿八日、三城衆耳川を渡、びしやご嶽ニ打居タル由、從財部茂同篇之使僧也、

一朔日、從義虎使者木通上野介御樽四荷・折着進上、此「道款本ノマ、」十月

日新納殿進上之初鷹、津曲但馬守於 御前包丁被申、新納四郎殿被成御寄合、祇候衆へ於 御前猪被下、從和泉進上之酒召出也、此日從老名數中石之城昨日晦日被請取由、以使僧被申入、此日平田民部左衛門尉從石之城被罷歸、巨細之儀被申上、此日從佐土原鎌田尾張入道・上原長門守從兩人前、石之城屬御案利候祝言、豊後衆耳川少々渡候之通、以使僧被申上、此日平野左近將監老名數中江御使也、

一二日、從豊後守殿、石之城屬御手裏候御祝言、以使僧被申上、此日從高原、上原長門守三男彦千代丸御酒持參、此日從老名數中、以書狀山東番手、從爰者諸所三番替之可爲賦由被申上、鹿兒嶋衆之事者依御座所之事、野心候之間、此節者五番替ニ賦分候、諸所一番衆者太守様鹿兒嶋へ被成御歸宅候する日ノ、可爲日限談合

由也、此日石之城輒ク被召執候御祝儀、以使僧被成申、此晚羽月猿渡掃部兵衛者、以使者同前之御祝儀被申上、從新納武藏守も同前被申入、此日加世田片浦之山下造酒佐以祇候、御國料從中國銀山歸帆之由、御案内役人迄申入候、袷之表式ツ・被之皮一丁・御樽一荷上申也、此夜市來軍介石之城被罷歸、彼境之様子具被申上、從 御前別而辛勞之儀被仰聞、御手盃被下節致拜領忝由被申上、此日從兵庫頭殿、石之爲御祝御使僧也、意趣伊地知勘解由左衛門尉被承候、

一三日、鹿兒嶋奥多種御酒御持セ也、此日上井伊勢守從山東被成參上、樺山入道殿從横川被成參上、則御番所江御寄合也、

一四日、太守様依石之儀御勝利、御歸陳、如飯野被成御立、此日鹿兒嶋御供衆之内、山東番賦一番衆之分へ、從野尻直ニ番所如佐土原之可罷立由被 仰出、一番伊地知勘解由左衛門尉・同名又十郎・白濱次郎左衛門・瀧聞孫九郎・長谷場織部佐・箕輪織部佐・津留六郎左衛門尉・村田藤右衛門、代として五六日跡より市來備前守・肥後山城守兩人被罷立、御番大將平田左馬介・伊地知周防介同番也、天正六年戊寅十月廿五日、山東

高城從大友家近陣を取構、既ニ内端之往來茂不戰、折角之由追々依御左右、此日巳ノ刻被成 御發足、然者如御吉例先御諏訪江 御社參、從夫直ニ高津濱之磯ヨ御出船、御座船廻之船數大方五十艘程、御劔者本田紀伊守、御旗之役三原右京亮、御旗指色紙金右衛門、御乘馬瀧か平野川原毛・吉野黒槽毛、御兵具衆木脇大炊介・和田玄蕃介・鎌田源左衛門尉・高城左京亮、其外御供衆鹿兒嶋・谷山寄々人數何千騎共不知其數、海陸同前ニ被打立、扱御座船長濱之沖てうしか嶋近ク被押渡砌、日州財部之使僧大平寺御船へ被押向被申趣へ、高城へ近陣之上、三納之城地下人依惡心、去廿三夜敵仕拂候、其外平野城迄も燒落、八代・綾・本庄城籠各也、裏里も悉致放火、都於郡・佐土原・木脇邊迄煙を立候様子、危ク見得申候由披露也、御座船御供之船ニ至迄、各無心元被申合、然者御船濱之市へ酉刻前ニ着岸也、別當之所へ被成御船下、陸路之御供衆各被參合、雖而宮内御假屋へ被移御座、其砌從霧島山使僧、山東之様躰都於郡・佐土原迄折角之故、敵六之原を執切候之間、音信不通之由被申上、諸軍兵誠ニ手ニ汗を握風情半時計也、

一廿六日、未明宮内を被成御打立、辰刻曾於郡之内松永

川路之邊ニ而、又從霧嶋山早走以使僧被申上、一昨廿

四日山東之悪心人三納仕崩、其競を取而都於郡之城へ

攻上を防返シ、川原田道場光大寺へ追詰、敵五百餘被

討捕、殊外御勝利、取候城之之事三納・平野之外者、一

ヶ所茂無何事堅固ニ被持留、往來等も聊無煩由候条、

可御心安通具ニ被申上、此御左右ニ各得力ヲ、軍兵以

下ニ到皆同直氣色、霧嶋山嶮難所を無嫌輒被打越、酉刻

始高原へ被成御越着、内城上原長門守館へ御着也、山

東之立柄無御心被思召由、毎々被仰出、

一廿七日、辰刻高原を被成御打立、未刻紙屋へ御着也、

内城稻留新介所へ被成御座、此日伊集院右衛門太夫・

上井伊勢守、此外鹿兒島衆少々佐土原へ被差遣、平田

左馬之介者石城へ御着陣以來、直佐土原之御番被閉

目、頂魯笑齋從福嶋被續セ、先々此衆着揃談合也、此

夜半計 太守様於紙屋之内城、立田の川のみち哉、

と御夢想有、五文字不足、ヶ様之御靈夢者毎々被次セ

事も候なと申合けれハ、打敵はと被遊、加雲寄妙な

る事共也、

一廿八日、

一廿九日、

十一月

一朔日、御供衆各出仕也、

一二日、辰刻紙屋を被成 御打立、都於郡・佐土原へ御

迎衆數万騎綾・本庄・六野原邊迄追々被參、路次之爲

警固五千人程、別々帶物具左右ニ分而美々敷粧也、平

田左馬之介中途迄御迎ニ被參候、此日も忠棟宿ニ而談

合候之間、兵庫殿・左衛門殿・川上上野介殿・新納

近江殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守、一所衆・諸

地頭、此人數者佐土原尺伽堂小路迄出合被申、各御假

屋之城迄御供也、村田越前守從紙屋御供也、

一三日、御一家・國衆・一所衆・地頭、悉御宿祇候也、

此日於御宿終日之御評議也、

一四日、雨、就御談合從財部川上三河守・伊集院美作守

・伊集院下野守祇候也、此日 兵庫頭殿・圖書頭殿御

寄合、其砌敵陣火掛退候之由風説也、悉中途迄被續セ、

勿論雜説ニ而各被打歸、此日川田駿河守從根白坂邊勸

請之儀在之、然則財部へ敵陣於通路被懸野伏、敵拾五

六人被討捕セ、吉兆之由ニ而、聽而川田駿河守勝吐氣

也、此日依吉日兵庫頭殿 太守様江手裏之御武智御相

傳也、此夜平田民部左衛門高城へ間之牆を忍御使ニ被差遣、野村周防介案内者被仰付、周防介へ御腰物被下之候、

一五日、於御宿御談合、未ノ刻計從高城上床主税介・土橋名字兩使被參、高城弥折角御行被急セ、可被目出之由被申、此日可被陣崩せ被成衆盛、

一六日、先々川原之陣被崩候而、諸陣可被見合談合相定也、然如昨夜俄依大雨、御行被差延、御大將之御事者不及申、諸軍兵以下迄、到此時ケ様之大雨・洪水者、乍不及天道之御恵如何候哉と疑敷、皆々心苦申合衆、

此朝平田民部左衛門尉從高城被罷歸、扱高城之事、曆々究竟之人數差籠、手堅候之間、城へ御心遣有間敷候、併手火矢玉藥・魚塩不如意、殊外之手を取ツ、當何共無爲方様躰ニ候、片時茂御行被急セ可然由被申、此便ニ茂從豊後陣、和平之調達、中務殿可被召成由、頻申懸由、御注進也、

一七日、終日之大雨、

一八日、此日茂御宿ニ而御談合終日也、

一九日、敵陣到通路、就懸野臥之儀、兵庫殿・右馬頭殿・左衛門殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守、鹿兒嶋

之御供衆少々、其外御一家・國衆・一所衆・諸地頭、人數を催、此夜半時分佐土原を打立、財部原へ被打上、雖然無差儀由依御左右、軍衆へ從中途被打歸、兵庫頭殿・右馬頭殿・右衛門太夫・伊勢守其外評議衆各財部へ被差通、兵庫頭殿御宿於内城終日御談合、菟角河原之陣可被詰崩儀定無篇目、然共近日中吉日不廻候間、先以往來へ伏仕役之評定也、

一十日、兵庫頭殿御宿ニ而談合終日也、此夜鉄肥之山伏大圓坊、高城江從財部爲使僧被差遣、佐土原々茂伊作衆江山口早左衛門と云者迄被遣、往還無煩、

一十一日、通路之仕役行者、往來之懸衆三百程之伏草五百餘、田原橋ニ之草五百餘、築地之本詰之草三千程、十日之亥之刻々被打立、向野伏衆者夜明ニ被打出、然砌松浦筑前守從高城使也、就夫、曆々人衆者財部内城ニ而日長迄談合也、向井野伏衆、兵庫頭殿・右馬頭殿始諸大將一手之軍兵を相催、楯鉾を調、旗呼兵を持せ、財部川之渡口を前ニ持仕役、様子を被聞召合、川上上野介殿・上井伊勢守・顯娃小四郎・鎌田刑部左衛門、鹿兒嶋衆少々以同心、根白坂下之口々川原陣出野伏、依敵之振舞一行可致校量談合ニ而打上せ、陣之様躰見

廻砌、午之刻之始往來之衆被懸出と見得、敵殊之外慌て、惣陣松山之陣、馬乘陸立、五拾・百・貳百・三百計ツ、從兩陣走續勢不知其數、然者一二之伏草衆茂敵依爲大勢、如何可有欵と雖心遣、互ニ恥合ケル故ニ哉、伏草ニ爲分入籠三草同前ニ起合、我先ニと被攻掛、敵相調雖戰大軍ニ被押崩、尔々鎧を茂不合致敗軍、残少々被射取、扱手ニ立者茂ナケレハ、松山之陳へ被押寄、根白坂之口、川上上野介殿・上井伊勢守・額娃小四郎・鎌田刑部左衛門・税所越前守、鹿兒嶋衆少々以同心梁瀬を打渡、雖爲小勢川原之陣へ被差向、松山之陣輒追拂、於陣中茂大將分之者餘多被討取、逃殘タル雜兵以下惣陣之南之廻切岸を逃上有様、寔哀成鉢、松山之陣悉燒拂、諸軍衆如高城被馳籠、其砌城麓之於田間、惣陳川原之陳、出合、散々手火矢を放掛、サレハ手負死人多々有、不笠刑部・福永丹後・長谷場弥九郎、是等者當座越度也、財部渡瀬之衆、兵庫頭殿・右馬頭殿・喜入殿・圖書殿・伊集院右衛門太夫・平田左馬之介・佐多殿・新納殿・北郷殿・豊後守殿、此衆を始御一家・國衆・一所衆・諸地頭、川原表へ被打渡、松山口之人數取合、間之牆を隔手火矢野伏無隙、然者惣陳・

川原陳・野頸陣、三陣互ニ往來茂絶無爲方、アキレテ今者梓弓、可引道茂ナク、籠鳥之雲を戀タル有様也、兼而從川原陳筑州高良山之座主星野方に到中務少輔殿、此度之弓箭非本意候之条、和平之調儀可被召成由、節々被申入、以其首尾既到此日、人質捕替之儀急々被申、依難黙止、人質兩人被召寄、因茲川原之陳と者互箭を被留、扱惣陳・野頸之陣江御行可被差寄評儀執、廿萬餘騎一手ニ旗呼兵を持せ、高城田間・川原表江被打居、夕陽傾ハ諸軍衆川を前ニ持一手々成勢揃、渡口を堅固ニ可被持談合雖相定、依猛勢衆之扱不及分故、或ハ川を後成、足輕雜兵如外聞差出、面々カ、リヲ燒續、楯之端を並、對甲冑弓鉄炮長刀劍を不離、敵有掛氣色可打崩粧、吳國之樊噲・張良と哉覽茂可恥風情也、味方之吐氣之声ハ天地震動スル計也、諸大將軍兵以下迄翌日之御行可有如何欵と心ニ懸人ナシ、太守様者鹿兒嶋・谷山・伊作・田布施・伊地知周防介・加世田、此衆都合三萬餘騎被召列、佐土原之陳酉刻之始被成御打立、亥ノ刻高城之向成根白坂御案陣、此夜半程惣陳之野頸之方江火箭を被射、敵殊外爲驚様林也、此夜諸陣之者共浪と成、互名殘を惜故ニ哉、諷鼓笛太鼓

ニ而終夜慰と聞得候、

一十二日、敵陳雖爲折角御行凡慮難及、如何可有と諸軍兵疑敷心を運ラシ、未明ヨリ思々出立、御下知を菟角と被相待所ニ、霧嶋・鶴戸正八幡諸天三寶〔本ノマ、〕之擁護〔護カ〕ニ哉、卯ノ刻始敵惣陣之大手之口〔本ノマ、〕高城田間ヘヲロシ、川原之軍衆弓鉄砲ヲ射掛、馬之鼻ヲナラベ鎗を揃一面ニ切掛、味方軍兵雖爲覚悟前、彼行慮外之間、少油断ニ相似たり、然者川原表之足輕已下足を乱様躰也、サレハ諸軍兵モ後足ニ成砌、〔飯野歌〕飢肥之地頭本田因幡守不及吳儀致合戦、一足不去無比類、戦死之人數茂因幡可見次由候得共、大勢ニ被押隔漸三四人程同枕ニ打死也、其并庄内・高城衆ニ北郷藏人手廻主從五六人討死、其外川原表ニ而或ハ立返鎗を合、弓鉄砲を射、或ハ主人傍輩を茂見捨、川之瀬を茂不見分、味方ニ逃掛タル奴原も有、然者彼大軍難調ニ、此川之渡口ニハ兵庫頭殿・左衛門殿・伊集院右衛門太夫を始、五萬騎程宵より堅成勢揃タル、到時聊無仰天、即刻入替川を打渡被切掛、先陳我先ニト諍ケリ、向井之川岸ニハ楯鉾を置相調所を、〔本ノマ、〕猛勢打渡合戦有之口從梁之瀬鹿兒嶋・田布施衆少々、財部衆此衆陳也、打續右馬頭殿・圖書頭殿・喜入攝

津守殿・川上殿・上井伊勢守殿此衆を始、一所外城之人數都合五萬餘騎、我ヲトラシト横合ニ御切入、太守様茂五萬餘騎被召列、根白坂被成御下、川原陣之本渡瀬を被成攻渡、敵茂色々雖相戦不叶、悉致敗軍、松山陣之下之脇竹原山を片取逃掛、敵運窮メニ哉、彼山涯之古川漫々タル片瀨ニ、馬乘陸立悉皆被追入、サレハ鎗・長刀尔々執直者稀也、其内ニ茂有正者〔生歌〕ト見得、從水底川涯へ澄上、合戦シテ被討者も有、又太刀下ニ而引組被討族も有、サテ從横入之口も鎌田大膳若武者之故、無思慮手合掛入主從戦死也、敵過半者水ニ没レ、瀨之面ニ浮沈漂ケル、究竟者共を雜兵曰下等迄切ツケ引寄、生頸をカキ落事無量、サレハ大敵を被討果之間、辰刻ヨリ未サガル迄時刻移ス、味方茂於是彼手負死多シ、然者川原之軍半時分ニ兵庫頭様・右馬頭殿・圖書頭殿・川上殿・喜入殿・伊集院右衛門太夫・上井伊勢守を始、豊後守殿・佐多殿・北郷殿・大野殿都合七萬餘騎、如雲霞惣陳サンテ被攻上、川原之陣衆筑州高良山座主星野兩手之事ハ依降參、高城麓へ被留置、其外者共僅三百程足被成、如惣陳馳籠茂有、又如野頭原直〔本ノマ、〕ニ逃通茂有、四方八方被追散、從高城者中務少輔殿を

爲大將、新納殿・栴山殿・吉利殿、國衆ニ者東郷方名  
 代・菱刈方・肝付方、其外一所衆、諸地頭・福島衆・  
 市來衆・伊集院衆・百次衆・曾於郡衆・八代衆、此衆  
 を先として三萬騎計惣陳へ被攻上、敵一涯調防戰、川  
 原表之衆を被討果を見て、無力惣陳を被追落、陣内ニ  
 而被討茂有、又如野頭原邊上、爰カシコノ野山藪等悉  
 隠ケルヲ狩出、或頭を取、或生捕ニスルコト不知其數、  
 然共津野ト耳トノ間ニ而、敵六十程相調、騎馬衆を待  
 付合戰有、味方小勢之故ニ哉、於軍場曲田伯耆・二階  
 堂式部・海江田主殿討死、サレハ曆(マ)諸大將我先ニと  
 耳川之渡口迄被追詰、此日野頭之陣之邊口ニ者、高城  
 之地頭山田新助、地下衆、又足輕少々召具シ、山中二  
 三里程被追掛、敵山毛・坪屋を差而落行を、山田新介  
 之手ニ三百程被討留、太守様者惣陳之野頭湯迫原与  
 哉覽迄被成、御打立、御手廻之軍衆五萬騎程也、當申  
 刻之始於湯之迫原川田駿河守勝吐氣被作、兼日如御下  
 知、此度右敵依爲打捨、勝吐氣之場ニ抽頭漸ク二三千  
 程也、サレハ耳川常住房迄、爲切捨死骸之躰者、寔算  
 を乱タル計也、此日茂暮ヌレハ、向井三城ニ者不相渡、  
 殊ニ大雨頻ニ降ケレハ軍之勞ト言、猛勢耳川渡口を限

ニ夜を被明、太守様者財部之内城川上三河守所へ被  
 成御座候、  
 一十三日、筑後之高良山之座主星野方兩手三百餘、如眞  
 幸表之被送せ、扱菱刈□□如八代之可被差遣談合也、  
 此日右衛門殿を始宗徒之大將大口耳川を打渡、日智屋  
 ・塩見・門川・山毛・坪屋・田代・裏里村迄屬御案利、  
 此日坪屋之地下人豊後來打頼込來を、式百程討取奉公  
 也、此日兵庫頭殿耳川陸渡之口を爲可被爲見、御手之  
 衆少々被召列候之處ニ、彼渡口近山陰ニ、敵二三十程  
 隠テ有ケルヲ、独茂不残被討取せ、然者豊州南部衆、  
 清田方軍場を最前々ニ逃ケルニ哉、三城塩見之傍迄逃  
 行ケレ共、大勢被押渡間、無吳儀右馬頭殿江致降參、道  
 之口預御免度由頻懇望也、難然止故ニ哉被助置、可有  
 其沙汰段被仰聞、此日中務少輔殿從耳川先々如高城被  
 打歸せ、此間之御軍勞無比類由、各申合ケリ、此日伊  
 地知勘解由左衛門・市來備前守、三城へ爲御使節被差  
 遣、并三納之事人質取替、即時ニ番手被差籠、  
 一十四日、從三城縣眞連房・八木越後守爲使被差遣、從  
 土持方被官前縣之事、大友入道宗麟去十二日夜粉可賀  
 を退出有之条、本之地下人迄ニ而無主之様ニ候、早々

御番手被差籠可目出由被申入、此日中務少輔殿、財部被成參上、然者到今度高城着陣、折角之儀寔夜白被抽戰功之故、無程被開 御運、爲彼忠節御感狀加領地被成給、則中書江御寄合、此日兵庫頭殿從耳表被成參上候、

一十五日、出仕如常、此日縣邊迄番手を差籠候、

一十六日、從財部如佐土原 御歸館也、此日福島之竹下宗怡御鎧下奉捧、此便從 近衛様御書并本所之御鞍鏡轡被成給候、

一十七日、於佐土原兵庫頭殿江御寄合、其砌爲御嘉例吉、市來野之黒月毛、兵庫頭殿江被成給、外聞実儀忝之由御礼御申也、此日伊地知勘解由左衛門・市來備前守、從三城被罷歸候、

一十八日、兵庫頭殿如飯野被成御歸、此日今度錯乱之三納之城ニ差籠タル番衆、地下之悪心人五十騎、於六野原被討詰、

一十九日、本田下野守三城江爲御使被差遣、

一廿日、

一廿一日、福島寺東堂諸塔頭坊主、今度之御打勝之御祝儀被申入、此日平田民部左衛門三城へ御使也、

一廿二日、福島寺東堂到高城表、爲施餓鬼財部江被爲越、

平田左馬之介被成同心、此日本田下野守三城を被罷歸、一廿三日、高城於川原、今度豊後衆爲打亡刃、少々死骸を集号豊後塚、衆僧三百人餘ニ而、福島寺大施餓鬼を被執行、高卒都婆を立被吊、此日豊州・北郷殿、從三城被成參上、

一廿四日、從方々御祝有之、此日從三城伊集院右衛門大夫・上井伊勢守・鎌田刑部左衛門以同心被參、此日都於郡地頭鎌田出雲守今度高城江着陣之砌、被馳籠タル衆中被召列被罷出、於 御前各御酒被下、此晚左衛門殿・伊集院右衛門大夫・上井伊勢守御寄合、此日福永丹後之嫡子被掛 御目、并福永駿河守從野尻如飯田召列候衆中被掛 御目、此日野村加賀守自身以祗候御祝雖可申上候、今度手負申候之間、乍聊尔御近習中迄以使被申入候、

一廿五日、御歸陳之日取雖相定候、依兩被差延候、

一廿六日、巳刻從佐土原 御歸陳、老中平田左馬之助御供也、伊集院右衛門大夫、如南郷可罷越由被申上、上井伊勢守佐土原依番前直ニ滞留也、鹿兒嶋衆茂當番前之衆者、勢州同心也、其外者悉御供被申、都於郡衆中途迄御迎ニ被參、六野原薩摩坂之邊迄御供也、從本庄

平田狩野助、八幡田之間迄御迎ニ被參、紙屋之衆中少  
ク瀬越之渡迄被參、酉ノ刻ノ末紙屋へ被成、御着、稻  
留新介所へ被成御座候、

一廿七日、巳刻紙屋を被成、御打立、從野尻御迎衆戸崎  
之渡迄被參、野尻衆猿瀬之原ノ御暇被給、從高原之御  
迎衆追々被參、酉ノ刻前高原へ被成、御着、内城上原  
長門守所へ御宿也、此晚長門守御會尺被申、川上上野  
殿・大田周防介、御座ニ被參候、

一廿八日、巳刻高原を被成、御立、高原衆花堂渡迄御供  
也、申ノ刻霧嶋坊中江、御着也、懸而御在所江、御社  
參、御宮所之規式如常、御下向之刻香堂被成御參、則  
御會尺、此砌敷根越中守嫡子元服也、

一廿九日、刻辰ノ霧島坊中被成、御立、曾於郡之御迎衆澤  
之渡口出合被申、濱之市迄御供也、社家衆留守・桑幡  
・隈元之渡迄被罷出、濱之市別當所へ被成御座、上原  
右衛門佐御酒持參、酉ノ刻始、御出船、御迎船鹿兒島  
・谷山・向嶋・大隅地下船、都合三百艘餘、順風ニ帆  
ヲ举、一度ニ馳并タル躰、更ニ舌端ニ難述、此夜亥刻  
始被成、御歸陣、御船本江意釣齋・村田越前守を始、

鹿兒島之老若悉御迎ニ被參候、

義久公  
義弘公

天正六年

後  
編 舊記雜錄 卷十一

一天正六年ノ春、伊東家臣長倉勘解由左衛門といふ者、敗軍ノ余黨ヲ集メ、日州ノ邊地石ノ城ニ楯籠ノよし聞ヘシカハ、薩州ノ諸將相議シテ曰、日州已ニ平きんに屬シ、万民心ヲ安スル処ニ、長倉カ一揆頗ル精衛ノ海を鎮んとスルニ似たり、然といへども一櫓ノ内ニ他人ノ軒睡ヲ容カ如シ、退ケスンハ有ルヘカラスト、孟春六日丙辰、嶋津圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟數千騎ニテ攻ケルニ、城兵堅固ニ防キケレハ、味方ハ暫ク陳ヲ休メ、佐土原ニ曳退、重て秋春ノ上旬ニ、右馬

頭征久ヲ大將ニテ、上井覺兼・伊集院忠棟・平田光宗等石城ヲ囲攻ニ、城中忽糧尽て防ガントスルニ便ナク、甲冑ヲ脱、弦ヲハツシ降人ニソ成ニケル、諸將ハ城中糧尽て餓死スルヲ見ルニ忍ス、其困ヲ解、酒食ヲ調、糧米等ヲ与へて、豊後國ヘそ送りけり、讎をは恩ニて報するとハ、カ、ル事ヲヤイフヘキ、

一長倉安からす思ヒ、豊後ニ至リ、義祐ヲ進メ大友父子ヲ語ヒケルニ、大友ハ兼テ願し事ナレハ、左右ナクモ語ラハレ、即諸勢ヲ催促スルニ、凡六萬余騎トソ注せり、天正六年三月十八日、國元ヲソ首途シケル、六ヶ國ノ軍勢追々ニ走カヘテ、其勢十萬餘騎トソ聞ヘシ、卯月七日ニ日州諸縣ニ打入テ、下臼杵土持領ヲ押領シ、汗馬ノ蹄ヲ休メケル云々、

天正六年戊寅正月元三、御嘉例如旧式、二日、縣より使者土持相模并書狀・鎧甲・御刀進上、土持之事累代伊東江被押隔、無奉公相似候、雖然不違舊規之筋、近年已來順路之義申入候之処、剩伊東御退治之上者、亦可奉得尊意事不存別義之段、先以早速同名相模守ニテ申上由也、

三日ニ者、諸外城之人數出仕早、四日、從山毛敵方より之廻文數通取集進上、此日山毛江山田新介御使者也、同日、到土持豊後之佐伯紀伊入道より之書狀、又大友殿と父子之書狀取合十通程奉行衆迄被持せ、文言者、日州之錯乱無是非、就其伊東三位入道父子孫之身軀腹をもきらせられ候之歎、又如何被成行候哉、無心元由、大概此趣也、五日、又從前之御祝言也、同日爲年頭之御門出、依吉方兵庫頭殿へ御光義、終日之御酒宴之砌、御太刀・御腰物御進上、六日ニハ、自天草方日州属御安利候爲御祝義、使書并鎧一領進上、此日新納武藏守迄上津良方より爲御勝利之御祝使僧進上、七日、此日從天草方新納武藏守迄、天草之事向後可申入之条、爲其筋官途受領之間可申請、自身可致參上之事者、遠遠大義之様候之条、必以使節可奉得尊意之由、先以内義也、天草方へ雖可被成御直書、依繁多奉行中より返章也、同日從勝久御孫様より〔本ノマ、〕御進上、頼朝之代々御相續之御纒・御旗・御重物小十字之御太刀・劔一ツ・御重書・御内書并御當家之御系圖・口宣、奉行各被成拜見、八日、御鷹二羽まさわさるゝとらせらるゝ、九日、此日伊東物内都於郡・佐土原を始め、城々の本衆無餘義者百人計、薩隅之外城へ五人十人宛覚悟さ

せらるへき由談合也、十日、兵庫頭殿御寄合御酒宴也、十一日、御吉書、同日勝久御孫上御參入内城、於御亭從奉行上井神左衛門尉・平田民部左衛門尉、以兩使自最前如御内義之被成御出家候へ、御對面あるへき通、福永丹波守迄被仰、即刻丹波守、安房殿江被申入、御返答、何と様にも、太守様之御意次第たるへき由也、驥而御參會也、其刻雕作之御太刀・弘法之御作劔一、御重物之由候て被成進覽、從御前御きる物一重被遣、十二日、歴御寄合、十三日にハ妻万八幡江御社參、十四日、大賢坊從三ヶ城被罷歸、御返事、無二之御奉公と也、此日從土持使者之前被申上、豊州佐伯より就伊東退治、此節毎に到縣使をさしこさる、自然人數打入様ニ候てハ御爲にも成間敷候間、先々御暇申、彼堺相調可申之由、左候へ、從爰許一人同心、自豊後越口其外立柄等ミせきかせ申度由也、此日安房殿念佛寺江可爲御弟子之由被仰出、御意次第請取可申由也、十五日、諸侍御對面迄也、十六日、於郡於郡内城百韻御連歌御發句、萬代もふるへき梅の若枝哉、十七日、薩州川内新田宮座主年首ニ參候、此日日地屋之地頭福永新十郎初參、御太刀進上、山毛地頭米良弥次御太刀・御刀進上、其後自肥

州長崎宇久左衛門大夫飛脚、御太刀并書狀到來、此日福永丹波守奉行迄、野尻此度之依忠節ニ被成下、御判形候、忝奉存候、雖然御知行始之在所候之間、御所勤可目出度由也、從奉行之前者、御判形被成下上者、聊不及遠慮無吳儀可爲安堵事、不可有別儀之由也、此上ニも頻可爲進上之旨、上原長門守を以重而被申上、委細先く被聞召置通也、此日都於郡川上大明神・稻荷大明神御社參也、拟宇久左衛門太夫之使者被懸、御目ニ、十九日、廿日、種々之御評義也、廿一日、從相良方御刀下太刀喜札ニ被相添、御返書ニも被添太刀、同日宇久左衛門太夫使者江御返事在之、此日肝付良兼後家へ以兩使、爰元江延くと逗留如何敷候、早々豊後・四國邊之様渡海可然之由、從奉行被仰遣、されは彼尼公、外面似菩薩、内心者如夜叉して、御返事喻いかなる罪ニハ沈ミ侍る共、他國の流勞さら／＼かなひかたし、ことに父三位入道ニも乍此世遠離之中となり、更にせんかたなし、願くハ御慈悲以、何方へも御願になからへ侍らへと、袖をしほらるゝと也、廿三日、大隅正宮社家衆年頭之御札御案内被申入、然者旧冬續之儀被仰遣処ニ、御祭札又ハ就社方之儀、色々上表氣任の様子、言語道断不可然被思召、向後此理於得心者、御對

面なさるへき由從奉行被仰、社家衆尤之儀候之条、自今以後相應之儀可致其得心、又無余義祭札之時者、父子之間遂祇候愚意之段可申分之旨、各同前被申上、纏而御前江出座也、是御弓箭最中依神之得添運之理尤也とそ申あへる、其後塩見・門川之地頭被懸、御目、同日福永四郎左衛門尉御太刀・御刀・御馬進上、米良四郎左衛門尉も同前之進物也、從御前も兩人江馬被下、豊州江宮崎三百町可被成安堵之由被仰出、此日福永丹波守・野村吉次方江所領書出也、廿四日、義虎御宿江御光儀、終日之御酒宴、廿五日、志岐兵部入道より使僧永福寺并書狀、意趣者、日州屬御安利候御祝儀也、廿六日、御談合繁多也、廿七日、志岐之使僧江御返事、御返書在之、從其都於郡六之原ニ御鷹狩、御供中務大輔殿・川上殿・樺山兵部大輔・北郷一雲・喜入攝津守、其外諸侍御供おひたし、御芝屋之御酒様々之御遊覧にて、及極晚御歸館也、廿八日、九日、常式之御酒宴也、卅日、御夢想之御連歌、御米に田に作成たる田島哉、つゝく家居にかゝる藤波義久、御連歌御成就之暮程、從京都之庄田与兵衛尉被召出、御前にて鞍仕也、此日土持方江之使江御返事、御返書在之、併日州物内江所領被遣、奉行之書出也、同

使者土持相模守江、日州三ヶ村之内御手洗之村十町之坪付被下、其裏書、土持方之事、依有往古之好、連々丁亭儀、以其筋目日州江爲使節早速被馳參、尤肝要之儀被成忠賞、二月朔日、御一家・國衆御出仕、其外一所衆・外城衆祗候也、此日土持相模守御所領被下候爲御祝義と、鎧甲進上、懸而御前江被罷出、此晚より供養法御祈禱霧嶋山之法印、二日、土持之使者御暇被申也、三日、渡川奈須左近將監之爲使被參、別而御奉公之儀依被申、可然之由被仰出、四日、種々御弓箭之御兵義也、五日、肥州栖本下野守方より伊東御追伏之爲御祝義、使僧書狀并御太刀一腰進上、此日御家門様御所領十町、去年之爲納黃金廿兩、伊勢因幡守殿迄竹下宗悦被指登せ、奉行之添狀有、此日栖本方之使僧江御返事、御返書在之、從是も太刀被相添、此日宮崎表御らんため御光入也にて御鷹狩也、彼城左金吾依御番、其夜者内城江御留也、終夜御酒宴也、七日、宮崎之近邊ひろき原なれハ、御狩なさせられ、御歸宅之刻、依御番佐土原於内城、椀山兵部大輔御會尺、夜ニ入都於郡江御歸院、此日肥州甲斐掃部助より書狀之返書在之、對爰元聊無疎意之旨也、八日、又例之御酒宴、九日初卯、妻方八幡・八幡八幡於神前連歌之法樂也、此日飢肥之噺本

田因幡守・上原長門守兩人被仰定、十日、嶽之米良先刻御使者被下候、爲御礼祗候、十一日、堯尊坊參上之砌、鹿兒島且義所之鑑坊之儀被仰出、十二日、從豊後表日州物内江海陸より可絡之由、自方々注進、就夫諸堺目江用心之儀、高城・財部・穂北江番衆被指籠、十三日ハ前々日同前、十四日、鞍馬妙法坊江大守様御夢想之意趣書付被御登せ、吉日良辰ニ使僧養雲坊先以御祈念被申、此日奈須將監弟弥八郎、將監之使として祗候、意趣者、今度山毛衆同然ニ在所を退出す、奉對御方聊不奉存疎意、必近日中子ニ而候者を出頭申させへき由也、さて彼弥八郎之事者、先ニ爲人質差上申候之間、如其被召置可被目出由也、此日高城之地頭山田新介、財部之地頭川上三河守、兩所無異儀領掌也、十五日、六日、例之出仕迄也、十七日、物内就雜説、庄内表之衆北郷彈正忠召烈、中途去川迄被馳向之由候得共、無差事被引歸候、此日鞍馬之毘沙門ニ所領御寄進也、御子孫繁昌之御ため也、十八日、日向之本衆共受領官途可申請、十九日、無子細、廿日、大守様法花嶽之藥師江御參なさる、於御堂も於中途も御酒持參之かた々侍りて、夜に入御歸鞍被成、此日都於郡之勸請矢藏普請川田駿河守調之、廿一日、川田駿河守・鎌田尾張

守・吉田刑部少輔鎮定規式如例、此日從高城・財部注進之趣、昨日廿日、豊州表より兵船十五六艘、門川之浦へ來着、依其三城之人衆も當方江手替之由、聖道一人落來被申由也、彼坊主伊東慶龍再來之由被申、就其物内・庄内・眞幸内端江可爲續之通觸狀被差遣、〔本ノ、一〕此日福嶋之以興禪院伊集院右衛門尉・木脇越前召置候而者不可然之由被申上、御分別之御返事種々依雜説、廿二日、續之儀又ハ普請具等、各無油断枝量肝要之由也、廿三日、耳川之渡口爲可被見せ、物内寄々人衆財部・高城表之ことく被差遣、鹿兒嶋衆五六人程御遣也、此日三城江兩使僧被遣、此日嶽之米良江假屋付として所領廿町之御約束、此日平野之米良將監今度飯田肥前同心之悪心人之内歴然之一類被生害、爲其忠節所領被下也、廿四日、從財部稅所新介爲使被參、昨日廿三三城江使僧被遣候得共、耳表江豊後來入來候間、通路難成由也、此晚平野左近將監・鎌田源左衛門尉從財部使被參、耳川之渡迄足輕少々見切ニ被差遣、必定豊州來打入近日可銘之由、三城地下衆詞戰也、廿五日、北郷一雲齋庄内衆召烈候て都於郡江參着、即御參會也、此日從財部・高城、耳川表江かり野伏被出、廿六日、就雜説、川上々野守殿高城江馳續候へ共、當時無差義被成歸、廿

七日、三城江被差遣兩使僧歸也、彼堺之儀委被申入、此使僧江三城之者物語、土持相模守頃生害之由也、此日花見之御歌當座都於郡内城ニ而あそはし候、廿八日、此日御歸鞍、爲御首途稻荷江御參、廿九日、所々續衆物數馳走之由被仰出、三月朔日、出仕如常、二日、穂北・三納へ雜説之儀相聞得、根占衆鎌田刑部左衛門尉地下之衆召烈被續せ、兩城近指懸候へ共、無何事各被打歸、此日海江田之本衆七浦内海通之者共發逆心候て、海江田之番衆を可討詰企歴然、然處其内ハ川越名字・吉田名字兩人依返忠ニ、曾井・清武寄々の人衆續合、悪心之者共被討せ、相殘之者共舐肥山之ことく逃入之由注進也、三日、御祝義之御酒、四日、右馬頭殿御宿江御光儀、五日、從兵庫頭殿伊地知勘解由左衛門尉迄自義虎之書狀三通被持せ、此内二通ハ大友義統之書狀、又豊後老中之一通也、書面大方ハ薩隅日江可被執向、其砌ハ別而可被成入魂之儀也、六日、奉行伊集院右衛門太夫宿ニて談合、穂北境百姓村を自敵方可卷執之由必定之間、待野伏之企也、都於郡番計地下之輕き人衆及二千騎被指遣、穂北衆ニ取合餘多口を被待せ、七日、待野伏衆從穂北打歸也、伊集院右衛門太夫ハ直ニ山路名彼境爲可見合せ被打通、喜入攝津介ハ

高城境普請等爲見舞、川上々野介殿以同心被打越、此日山路駿河守在所より女童廿人計退散、其内三人駿河守以分別討留、八日、種子嶋方參上也、此日土持方より遠見之者共、廻船衆彼境立柄依折角、此方打頼參也、土持無二之御奉公之儀申也、此日穗北之忠節人三人所領被下也、九日、種子嶋方江御寄合、庄田与兵衛尉被召出御乱舞、此日從和泉之使者市來加賀守、此使ニも自豊後之書狀一通被持せ、十日、例之出仕迄也、十一日、高城江山毛より落人來、敵方立柄無替義、十二日、根占方御暇被申、三納番所へ番衆可被召置事堅被仰付、十三日、豊後之商船自徳之洲出船之義依申來、種子嶋方之書狀豊後之奉行中迄被登せ、十四日、御鷹狩、十五日、本衆江無相違御奉公之儀、別而被加、御勘、十六日、御歸陣、已刻都於郡御打立、都於郡諸番衆、御一家・國衆・一所・外城衆中途迄御供也、奉行平田左馬助・上井神左衛門尉鹿兒嶋衆召列らる、伊集院右衛門大夫如鹿屋在所可爲御暇之由候て、御跡ニ一兩日被居留、喜入攝津介・村田越前守兩人都於郡御番也、此外日州諸城諸堺目番手堅固ニ被召置、酉之刻高原江御越着、十七日、辰之刻ニ高原を御立なさる、於霧嶋坊中御會尺、それより濱市江戌之刻ニ御着也、

1042

「日州御發足日、記」

十八日、從土持方之書狀自都於郡被持せ、大方趣者、三城就心替ニ縣表雖爲折角、此一節之事者可御心安、其内ニ御行可爲肝要由也、此日自濱市午之刻之御出船、御供之船數多々也、御迎船追々被參、御船申之刻鹿兒嶋江御着津也、十九日、護摩所之不動被成御參、即御歸陣之御祝、御三獻伊地知雅樂助、同名藏人配膳、川田駿河守御盃被成給、是より今月中從諸所俗出祝無寸御隙被申上也、

天正六年九月十一日、山東江就御行之義被成御發足、御劔者本田紀伊守、御旗役者三原右京亮、其外御供鹿兒嶋衆、御諫方江御參、直ニ御立也、夜ニ入帖佐餅田觸所江御座被成、十二日、卯刻帖佐を御打立、御船嶋之脇江御着岸、御供之人衆者從陸被參着候、從其宮内御通、諸社家衆各被罷出、酉之刻始霧嶋山之麓田口江御着、霧嶋山之座主御參上なさる、十三日、卯刻田口を御打立、霧嶋山之麓作道を被成御通、高原御通ニ柴屋にて衆中御酒被上、野尻衆猿瀬渡まで御迎ニ被參、野尻内城江御宿、十四日、從鹿兒嶋之御供衆盛分、石之陣所江二番替ニ被差遣、此日野尻城外廻被御覽せ、十五日、石之城江一行之御催な

り、霧嶋・鶴戸・妻方爲御祈禱、仁王經三部講讀也、酉  
之刻從佐土原伊集院右衛門大夫以書狀就石へ御行、昨日  
十四日、酉刻各被打立由注進也、十六日、猶以石之陣所  
江人數被立、十七日、從石之陣所以使僧、鎌田出雲守陣  
無何事結構被執構之由被申上、十八日、爲御遊山、〔本ノ、一〕  
瀬之上迄被成御差出、十九日、兵庫頭殿野尻江御參、  
白濱周防介中途迄打迎ニ被罷出、廿日、兵庫頭殿御寄合、  
廿一日、兵庫頭殿御隨身ニて、城近き山之御狩也、此日  
石之陣江御遣之人衆堅固之由候而被罷歸、廿二日、菱刈  
表之衆石之陣所江罷立之由被申上、廿三日、從財部左衛  
門督殿之御使僧、豊後衆可成絡之趣也、廿四日、從石之  
陣町田出羽守・税所新介兩人爲使被參、廿五日、石之御  
陣江野村民部少輔被相添、町田出羽守・税所新介御評議  
様々也、廿六日、山東綾之米良備前守以使僧、豊後衆耳  
川を渡候由、從佐土原注進之段被申上、廿七日、種子嶋  
番衆岩川民部少輔先刻石之城江働之時、手火矢射通、別  
而之辛勞神妙之由被成御感、同日山東從財部川上三河守  
以使僧、豊後衆少々耳川を渡候得共、無差義引退之由被  
申上、廿八日、野尻惣社大王江御社參、同日鶴戸之別當  
御祈禱之御札配帙持參、廿九日、從大口新納武藏守書狀

到來、趣者、從相良方到武藏守被申、大友宗麟日向表江  
雖一行之企候、一口迄ニ而へ閉、扱へ肥州方衆猶々以  
被頼思由候て、又々八代迄眞光寺使僧下着候、一圓難成  
申候得共、自然自別方洩聞得候而へ、得御意相良之事候  
之条、如何之由、懇意之儀被申事候、石江之御着陣頃初而  
承候由也、晦日、從石之御陣御左右、昨日廿九石之城江被  
仰趣者、當被執延間鋪進退、早々城を可被相渡也、左候  
者道之口を遣、堅固ニ可被送せ由、日置越後守・市來軍  
介從兩人之前被云せ、無頼方故ニや、無吳儀應其趣、當  
者從今日箭を留可申由也、從其人質取替談合定、從御陳  
德持舍人助・有馬右衛門尉人質被遣、從石井尻伊賀守・  
荒武右馬助兩人也、此日石之城無篇目被請取せ、長倉勘  
解由左衛門尉始悉如三城之被送遣、此晚從佐土原鎌田尾  
張守被申上、一昨日廿八三城衆耳川渡、ひしやこ獄ニ打  
居たる由、從財部も同篇之使僧也、十月朔日、從奉行石  
之城之事、昨日晦日、石之城被請取之由、以使僧被御申  
也、二日、諸所之御番盛之事、從御奉行衆被申上、三日、  
石輒依御手裏參、明日如飯野御開陣御有増也、四日、  
太守様如飯野御立なさる、鹿兒嶋御供之衆少々、如佐土  
原爲御番被差遣、自其於飯野ニ、石御退治之御祝義御酒

宴、御狩倉兵庫頭殿依御馳走、五日之御遊覽、從夫御歸鞍、於鹿兒嶋千秋万歳之御祝言巨筆盡々、

天正六年戊寅十月廿五日、山東高城へ從大友家近陳を取構、既ニ内端之往來も不輒折角之由、追々依御左右、此日已刻ニ被成、御發足、然者如御吉列先御諷方之御社參、自其高津濱之磯より御出船、御座舟廻之船數五十艘程、御劔者本田紀伊守、御旗之役三原右京亮、御乘馬瀧平野川原毛・吉野黒糟毛、其外御供之衆鹿兒嶋・谷山寄々人數何千騎共不知其數、海陸同前之打立也、扱御座船長濱之沖てうしか嶋近く被押渡砌、日州財部之使僧太平寺御船へ押向い被申上趣者、高城へ近陣之上、三納之城地下人依惡心、去廿三夜敵仕拂候、其外平野之城迄も燒落、八代・綾・本庄城籠名々裏里々悉致放火、都於郡・佐土原・木脇邊迄煙立候様子危見え申候由披露也、御座船御供之到舟ニ、各無心元之由被申合、然者御舟濱之市へ酉之刻前御着岸也、別當之所へ被成、御宿、御船元へ陸路之御供衆各被參せ、鑿而宮内御假屋へ被移御座、其砌從霧嶋山使僧山東之様鉢、都於郡・佐土原まで折角之故、敵六之原を執切候之間、路次不通之由被申上、諸軍兵寛汗顔、廿六日、未明ニ宮内を御打立、辰之刻曾於郡之内

松永之邊にて、又從霧嶋山早走之以使僧被申上、一昨  
日廿四日、山東之惡心人三納仕崩、其競を取て都於郡之  
城へ攻上を防返、川原田道場光大寺へ追詰、敵五百程被  
討捕、殊之外御勝利、城之事三納・平野之外へ無何事堅  
固ニ被持留、往還等も聊無煩之衆、可御心安通御左右被  
申上、各得力軍兵已下ニ到、皆同直氣色、霧嶋山之嶮  
難所を無嫌、輒被打越、酉之刻始高原へ被御越着、内城  
上原長門守館へ御宿也、山東之立柄無御心元被思召由毎  
々被仰出、廿七日、辰刻高原御打立、未刻紙屋へ御着也、  
内城稻富新介所へ被成御座、此日伊集院右衛門大夫・上  
井伊勢守、鹿兒嶋衆少々佐土原へ被差遣、平田左馬助者  
石之城へ御着陣已來、直ニ佐土原之御番被閉目、頃魯笑  
齋從福嶋被續せ、先々此衆着揃談合也、此夜半計に太  
守様御夢想、

立田の川の紅葉哉と有、夜や寒く霜や置覽と御ね覚かち  
にて、此ことの葉の千代守ませと念します、是偏ニ  
近衛閑白殿御下向御座、直ニ此道を御傳受之上、けに御心  
眞の道ニ叶ひ給故に、五文字を打敵ハとの給、此事傳承  
諸軍兵、討敵ハ立田の川の紅葉哉と奉吟味、霜月朔日、  
御供衆日本歌之道巨有事を仰き、同二日、紙屋を辰刻被

成御打立、都於郡・佐土原より御迎衆數万騎、綾・本城  
・六之原邊迄追々被參、路次之爲驚固之五千人程、別而  
帶物之具、左右に分て美々敷粧也、平田左馬助中途迄被  
參、此日も忠棟宿にて談合之間、兵庫頭殿・左衛門督殿  
・河上之野介殿・新納近江守殿・伊集院右衛門大夫・上  
井伊勢守・一所衆・諸地頭、此人數者佐土原尺迎堂小路  
迄出合被申、各城へ御供也、村田越前守從紙屋御供被申、  
本ニアマリ比類なしとそ人申ける、三日、御一家・國衆  
・一所衆・地頭悉御城ニ祇候也、終日之御評定也、四日、  
就御談合從財部川上三河守・伊集院美作守・伊集院下野  
守祇候、其砌敵陳自火出來シ退候之由風説也有て、悉中  
途迄被續せ、無何事被打歸、この日川田駿河守從根白坂  
邊勸請之儀在之、然刻從財部敵陳通路ニ到被懸野伏、敵十  
五六人被討捕せ吉兆之由にて、驥而川田駿河守勝吐氣、  
此夜平田民部左衛門尉高城へ間之牆忍御使ニ被指遣、野  
村周防介案内者被仰付、周防介へ御腰物被下、五日、於  
御城御談合、未刻計從高城上床主稅助・土橋名字兩使被  
參、弥折角也、御行被急せ可被目出之由被申、此日可被  
敵陳崩せ被成衆盛、六日、先々川原之陳被崩候て、諸陳  
可被見合せ談合相定也、然處ニ此夜依俄之大雨、御行被

差延、御大將之御事者不及申、諸軍衆雜兵已下迄、至  
此時々様之大雨洪水ハ乍不及天道之御惠茂如何候之哉と  
疑敷、皆々心苦申合衆、此朝平田民部左衛門尉從高城被  
罷歸、扱高城之事、歴々究竟之人衆指籠手堅候之間、城  
へ御氣遣有間敷候、併手火箭之藥玉・魚塩不如意、殊外  
之手を取候まゝ、何共無爲方樣躰に候、片時茂御行被急  
せ可然之由被申、此便にも從豊後陳和平之調達中務少輔  
殿可被召成之由、頻ニ申懸之由注進、七日、終日之雨、八  
日、此日も御城にて御談合終日也、九日、敵陳通路にて  
就懸野伏之儀、兵庫頭殿・右馬頭殿・左衛門督殿・伊集  
院右衛門大夫・上井伊勢守、鹿兒之御供衆少々、其外一  
家・國衆・一所衆・諸地頭人數を催、此夜半時分佐土原  
を打立、財部原へ被打上、雖然無差義之由依御左右ニ、軍  
衆者從中途被打歸、兵庫頭殿・右馬頭殿・右衛門大夫・  
伊勢守、其外評儀衆各財部へ被差遣、兵庫頭殿御宿於内  
城終日御談合、とかく川原之陳可被詰崩義定無篇目、然  
共近日中吉日不廻候之間、先以往來へ伏仕役之評定也、  
十日、兵庫頭殿御宿にて、終日之御談合、此夜飢肥之山  
伏大圓坊、高城へ從財部爲使僧被差遣、往返無煩、佐土  
原よりも伊作衆ニ山口早左衛門尉と云者被遣、十一日、

通路之任役行者往來之懸衆二百程、一之伏草五百餘田原橋、二之草五百餘築之本、請之草三千程、十日之亥之刻より被打立、向井野伏衆者夜明ニ被打出、然砌松浦筑前守從高城使也、就其歴々人衆者財部内城にて日長迄談合なり、向井野伏衆・兵庫頭殿・右馬頭殿を始、諸大將一手之軍兵を相催、楯鋒を調旗呼兵を持せ、財部河之渡口を前ニ持、仕役之様子を被聞合、川上々野介殿・上井伊勢守・頸娃小四郎・鎌田刑部左衛門尉、鹿兒嶋之衆少々以同前、根白坂下之口より到川原陳出野伏、依敵之振舞、一行可致校量談合にて打上せ、陳之様躰被見廻せ砌、午之刻始往來之衆被懸出と見得、敵殊外仰天し、惣陳松山之陳より馬乘陸立、五百二百三百計宛、兩陳馳續勢不知其數、然者一二之伏草衆も敵依爲大勢、可有如何かと雖心遣、互恥合ける故にや、伏草に存分入籠、三草同前ニ起合、我前にと攻懸る、敵相調雖防戰太軍ニ被押崩、尔々鎗をも不致癡軍、殘少被打取、扱手ニ立者もなけれハ松山之陳へ被押寄、根白坂下之口より川上々野介殿・上井伊勢守・頸娃小四郎・鎌田刑部左衛門尉・税所越前守、鹿兒嶋衆少々以同心、梁之瀬を打渡、雖爲小勢川原之陳へ被差向、松山之陣輒追払、於陳中ニも大將分之

者餘多被討取、逃殘たる雜兵以下、惣陳之南之迫切岸を逃上有様誠哀成躰、松山之陳悉燒払、諸軍衆如高城之被馳籠、其砌城麓之於田間、惣陳・川原陳より出合、散々ニ手火矢を放懸、されハ手負死人多々有、否笠刑部・福永丹後・長谷場弥九郎、此等ハ當坐越度也、財部渡瀬之衆者、兵庫頭殿・右馬頭殿・喜入殿・圖書頭殿・伊集院右衛門大夫・平田左馬助・佐多殿・北郷殿・豊後守殿、此衆を始御一家・國衆・一所衆・諸地頭河原表へ被打渡、松山口之人衆へ取合、間之牆を隔手火矢野伏無隙、然者惣陳・川原陳・野頸陳三之陳、互ニ往來も絶、無爲方あきれつゝ、今ハ梓弓可引道もなく、籠鳥之雲を戀たる有様也、兼日從川原陳筑後高良山之座主星野方中務大輔殿、此度之弓箭非本意候之条、和平之調義可被成召由節々被申入、以其首尾既到此日人質捕替之儀急々被申、難默止人質兩人被召寄、因茲川原之陳とハ互ニ矢を被留、扱惣陳・野頸之陳へ御行可被差寄評義執々、御勢廿萬餘騎一手一手旗呼兵を持せ、高城田間川原表へ被打居、夕陽傾者諸軍衆川を前ニ持、一手之成勢揃、渡口堅固ニ可被持せ談合雖相定、依猛勢扱不存分故、或ハ河を前ニ持、或ハ河を後に成、足輕雜兵を如外關差出、面々かゝりを

燒續、楯之端を置對、甲冑・弓・鉄放・鎗・長刀劍を不離、敵有懸氣色者可打崩粧、吳國之樊會・張良とやらんも可恥風情也、味方之吐氣之聲天地震動する計也、諸大將軍兵已下迄翌日之御行可有如何かと不懸心人なし、大守様へ鹿兒嶋・谷山・伊作・田布施・伊地知周防介・加世田、此衆都合三萬餘騎被召烈、佐土原之城西之刻始被成御打立、亥刻高城之向成根白坂御篠陳御供之諸軍衆甲之鉢を枕とし、鎧之祖傳を片敷寒夜を明、寔無比類、此夜半程惣陳之野頸之方へ火矢を被射付、敵殊之外驚様躰也、此夜諸陳之者共限となり、互名残を惜故にや、諷鞞・笛・大鞞慰と聞ゆ、攝津國於一谷、平家之一門相籠、公達御寄合奏管絃給けんもかくやと覺て哀也、十一日、敵陳雖爲折角御行凡慮及、如何と可有と諸軍兵癡敷心を運し、自未明思と出立、御下知を菟角と被相待処、霧嶋・鶴戸・正八幡・諸天三寶之擁護にや、辰之刻始敵惣陳之大手野頸之口より高城田間へおろし、河原之軍衆へ矢鉄放を射懸、馬之鼻をならへ、鎗を揃一面に切懸、味方軍兵雖爲覺悟之前、彼行慮外之間、少油断に相似たり、然者河原表之足輕已下足を乱様躰也、されは諸軍兵も浮足ニ成砌、鉄肥之地頭本田因幡不及吳儀致合戦、一足不

去無比類戦死、鉄肥之人數も因幡可見次之由候へ共、大勢被押隔、漸三四人程同枕に討死也、其置ニ庄内・高城衆・北郷藏人手廻主從五六人討死、其外川原表にて、或ハ立返鎗を合せ、弓鉄放を射、或者主人傍輩をも見捨、川之瀨瀨をも不見分、味方へ逃懸たる怒原も有、然者此太軍難調に、此川之渡口ニハ兵庫頭殿・左衛門督殿、其外伊集院右衛門大夫を始五万騎程、從宵堅被成勢揃之間、到于時聊無仰天、即刻入菅河を打渡被切懸、先陳我崎にと諍けり、向井の川岸にハ楯鉢をならへ相調處を、猛勢打渡合戦有、上之口從梁之瀨鹿兒嶋之衆・田布施衆少く、財部衆此衆先陳也、打續右馬頭殿・圖書頭殿・喜入殿・川上殿・上井伊勢守此衆を始め、一所・外城之人衆都合五万余騎、我劣しと横合に被切入、太守様も五万余騎被召烈、根白坂被成御下、川原陳之本渡瀨を被攻渡、敵も色々雖相戦不叶、悉致癡軍、松山陳之下之脇竹原山を片取逃懸、敵運之窮めにや、彼山際の古川漫々たる片瀨へ馬乘陸立、悉皆被追入、されは鎗長刀等取置者稀也、其内にも有心者と見え、従水底川涯へ澄上、合戦して被討者も有、又大刀下にて引組被討族も有、さて横入之口より鎌田大膳若武者之故、無思慮手合懸入主從戦死也、

敵過半者水に没れ、洩之面に浮沈漂ける、究竟者共を雜兵已下等迄切付引寄せ、生頸を擲落事無量、されハ大敵を被討果之間、從辰之刻未さかる迄時刻移ぬ、味方も於是彼手負死人多し、然者川原之陣半時分、兵庫頭殿・右馬頭殿・左衛門督殿・圖書頭殿・川上殿・喜入殿・伊集院右衛門大夫・上井伊勢守を始、豊後守殿・北郷殿・大野殿以上七萬余騎、如雲霞惣陳指而攻上、川原之陳衆筑州高良山座主星野兩手之事者依降參、高城之麓へ被留置、其外之者共讒<sup>(た)</sup>三百程足と成、如惣陳之馳籠も有、又如野頸之直ニ逃通も有、四方八方へ被追散、從高城者大將中務大輔殿・新納殿・椋山・吉利殿、國衆にハ東郷方名代菱刈・肝付方、其外一所衆・諸地頭・福嶋衆・市來衆・伊集院衆・百次衆・都於郡衆・小代衆、此衆を爲先凡三萬騎計惣陳へ被攻上、敵一渥稠雖防戰、川原表之衆を被討果をミテ、無力惣陳を被追落、陣内にて被討も有、又如野頸之原逃上、爰彼野山之藪等ニ隠迷けるを狩出、或者頸を取、或ハ生捕にする事不知其數、しかれ共津野と耳との間にて敵五六十程相調、崎衆を待付合戰有、味方小勢之故にや、於軍場曲田名字・二階堂・海江田主殿討死、されは歴々諸大將我崎にと耳川之渡口まで被追詰、

此日野頸之陳之逃口にハ、高城之地頭山田新介地下衆又ハ足輕少々召具し、山中二三里程被追懸、敵山毛・坪屋を差而落行を、山田新介之手へ三百程被討留、大守様ハ惣陳之野頸湯迫原とやらんまで被成打御上、御手廻之軍衆五萬騎程也、さて申之刻始於湯迫原、川田駿河守勝吐氣被作、兼日如御下知之、此度者敵依爲打捨、勝吐氣之場揃頸二三千程也、されは耳川常住房迄爲切捨死骸之跡者、寔算を乱たる計也、此日も暮ぬれハ、向井三城へハ不打渡、殊ニ大雨頻ニ降けれハ軍之勞と云、猛勢耳川之渡口を限に夜を被明、大守者財部之内城川上三河守所へ被成御座、十三日、筑後高良山之座主星野方兩手三百餘如眞幸表被送遺、さて從菱刈如八代可被差遣談合也、此日右馬頭殿を始、宗徒之大將各耳川を打渡、日知屋・塩見・門川・山毛・坪屋・田代・裏之里村迄御案利、此日坪屋之地下人豊後之衆打頼逃來を二百程討取奉公也、此日兵庫頭殿耳川陸渡之口を爲可被見せ、御手之衆少々被召烈候之処、彼渡口近山陰に敵二三十程隠居て有けるを、獨も不殘被討取せ、然者豊州南部衆・清田衆軍場を從最前被逃けるにや、三城・塩見之傍迄遁行けれ共、大勢被押渡間、無吳儀右馬頭殿へ致降參、道之儀預御免度

之由類ニ懇望也、難然止故にや被助置、可有其沙汰段被  
仰聞せ、此日中務大輔殿從耳川先々如高城之被打歸せ、  
此間之御軍勞無比類由各申合けり、同日ニ伊地知勘解由  
左衛門尉・市來備前守三城爲御使節被差遣、并三納之事  
人質執替、即刻ニ番手被差籠、十四日、從三城縣へ眞連坊  
・八木越後守爲使被差遣、從土持方被官前、縣之事大友  
入道宗麟去十二日夜務司賀を退出候之間、本々地下人迄  
にて無主之様候、早々御番手被指籠可目出由被申入、此  
日中務大輔殿財部へ被成參上、然者到今度高城着陳折角  
之義、寔夜白被抽戰功之故、無程被開御運、爲彼忠節御  
感狀加領地被成給、即中書へ御寄合、此日兵庫頭殿從耳  
表被成御參上、十五日、縣邊迄番手被差籠、十六日、從財  
部如佐土原之御歸鞍也、此日福嶋之竹下宗怡御鑑下奉捧、  
此便ニ從 近衛殿様御書并 本所之御鞍被成給、あふみ  
・くつわ、十七日、於佐土原兵庫頭殿へ御寄合、其砌爲  
御嘉例吉、市來野之黒月毛兵庫頭殿へ御給、外聞実儀忝  
之由御礼御申也、十八日、兵庫頭殿如飯野之御歸被成、今  
度錯亂ニ三納之城に差籠たる番衆地下之悪心人五十程、  
於六之原うちつめらる、十九日、廿日、常之出仕迄也、  
廿一日、福昌寺東堂御參也、廿二日、福昌寺東堂到高城

表、爲施餓鬼財邊へ被越せ、平田左馬助御同心、此日本  
田下野守從三城被罷歸、廿三日、高城於川原、今度豊後  
衆爲打亡邊少々死骸を集、号豊後塚、衆僧三百人餘にて  
之福昌寺大施餓鬼執行、高卒都婆を立被吊、此日豊州・  
北郷殿從三城被成參上、廿四日、從三城忠棟・上井伊勢  
守・鎌田刑部左衛門尉同心以被參、此日都於郡地頭鎌田  
出雲守今度着陳之砌、被馳籠たる衆中被召烈被罷出、御  
前にて各御酒被下、廿五日、御開陳之御日取既ニ相定候、  
依雨被差延、廿六日、已刻從佐土原御歸陳、平田左馬助  
御供、伊集院右衛門大夫如南郷可被越之由被申上、上井  
伊勢守佐土原依御番前滞留也、鹿兒嶋衆少々當番之衆者  
被罷留也、其外へ悉御供被申、都於郡衆中途迄御迎ニ被  
參、六野原薩广坂邊迄御供也、從本庄平田狩野介八幡田  
間まで御迎ニ被參、紙屋之衆中少々瀬越之渡迄被參、酉  
之刻紙屋へ被成御着、稻富新介所へ被成御座、廿七日、  
已刻紙屋被成御立、從高原追々御迎被參、酉之刻前ニ高  
原へ被成御着、内城上原長門守所へ御宿也、廿八日、已  
刻高原被成御立、申之刻 霧嶋坊中へ御着也、驥而御在所  
へ御社參、御官所之規式如常之、御下向之刻香堂へ被  
成御參、即御会尺、廿九日、辰刻 霧嶋坊中被成御立、

## 『日向記』

曾於郡之御迎衆澤之渡口へ被參、濱之市迄御供也、社家衆留守・桑幡・隈本渡迄被罷出、濱之市別當所へ被成御座を、酉之刻始御出船、御迎船鹿兒嶋・谷山・向之嶋・大隅地下船都合三百艘餘、順風に帆を上、一度走並ひたる舳、更に舌端に難述、此夜亥之刻之始被成御開陣、御船本へ意釣齋・村田越前守・鹿兒嶋之老若御迎に悉被參、從其殿中へ御供なされ、各治世之聲樂ミさかへ難筆單々、△

一日州表の夏ハ悉ク嶋津ノ知行トナル、伊東代々ノ年比共、或ハ野村ノ一族、或福永の一黨ヨリノニ付て、親キ者ハ縁々ニ隨テ島津の旗下ニソ靡ケル、其縁類ヲ求得ざる族ハ、其數ヲ盡て誅伐ニソ行ハンケル、中ニモ伊東大炊助ハ、何トシテカハ君ニモ追後レ玉フラン、又島津ノ手ニ隨ント思レケルカ、義久本莊ニ着玉フ、御見參可有ト有シカハ、〔天正六年正月也〕同公セント打立玉フ所ヲ、八幡津留ニ伏兵ヲ隠シテ、アヘナク討果被申ケル、祐兵公ノ老名トシテ飢肥へ遷サレケル、木脇越前守夏ハ、豊後ニ可參通路ナカリシカハ、串間ノ堂

場ヲ頼テ暫身ヲ隠シケルカ、二ヶ國ニ無双武士ナル故、頼テ押寄腹ヲ切スル、弟八郎左衛門モ志布志ニテ腹ヲ切スル、又日州一番の鎗ツキト沙汰ヲ成ス三納ノ地頭飯田肥前守ヲモ誅伐ス、此等ノ衆ヲ始幾人ト云コト數を不知討果サレ、ウシトミシ世ソ今ハ戀クソ思レケル、其後義久同十六日ニハ都於郡ニ打入テ、日州不殘押領シ、諸夏仕置ヲシメサレケル、去程ニ當家一門其外供奉ノ士、長倉勘解由左衛門・佐土原遠江守入道道雲・山田二郎三郎、此衆ヲ始トシテ、賤ノ小手巻クリカヘシ、昔ヲ今ニ成スヘシト、弓矢評定相定、其趣ヲ伺ケル、義鎮・義統此旨聞届玉ヒ、吾九州探題職ヲ受て以來、已ニ六ヶ國ノ諸大名幕下トナル、然ニ日州ヨリ伊東殿頼て入玉フ、殊ニ親ミト云、此度日州ヲ打隨へ、伊東殿ヲ居置、大隅・薩ヲ對治シ、我九州ノ將軍トナラント思フ心ソ付ニケル、斯ル処ニ、日州門河ノ城主米良四郎右衛門、塩見ノ城主右松四郎左衛門、山陰ノ城主米良喜内、此衆内ニ密談シ、一度日向ヲ覆サント相計、已ニ籌儀調シカハ、門川ノ米良四郎右衛門許ヨリ飛脚ヲ以テ豊後ニ被申入ケルハ、薩州武略ヲ以、國中ノ侍共數代ノ志芳恩構未練、刺主ニ矢ヲ放ナトス

ル故、居城ヲ捨、尊家ヲ頼被申ノ由、風聞不及是非候、  
義祐夏、先年國中ニ逆心ノ族數輩因有之、三城表ニ發  
足被致候、其刻モ此表ノ城主共、其外譜代ノ倅者一統  
ニテ一戰ヲ勵シ、君ヲ本國ニ入申畢ヌ、此度モ財部表  
ヲ通シ申サハ、三城ニ申請心ヲ及、可盡粉骨ノ所ニ無  
其甲斐御夏共候、願ハ宗麟公御弓筋ヲ企玉ハ、六ヶ  
國ノ諸勢ヲ三城ニ引受テ、日薩隅ノ案内者ヲ可仕候、  
此旨佐伯紀伊守入道宗添老取成頼入存由注進ス、宗添  
齋此趣有ノ儘ニ披露セシニ依テ、三城警固ヲ可遣評議  
ニ定ケル、

就其境行、最前以來無二ノ覚悟、寔ニ感悅候、今度  
ノ調義於任存分者、城督并本領ノ義者不申、依忠貞  
ノ浅深、知行等望次第可申談ノ條、當弥以堅固ノ才  
覚可被遂本意夏肝要候、恐惶謹言、

〔天正六〕

二月十二日

義統在判

米良四郎右衛門との

塩見・山陰ニモ右同書簡也、角テ評儀相調シカハ、先  
日州門川ヘノ先手、又船手等の警固ヲ相定ラレ、先手  
ノ大將ニハ白杵相右衛門・吉水新助・柴田治右衛門、  
船手大將深栖若林、其外日州ヨリ供奉ノ侍ニハ、伊東

新助・伊東彈正入道休徹・伊東下総權守・舎弟常陸守  
・同參河守・長倉勘解由左衛門・伊東近江守・舎弟長  
倉六郎太郎・佐土原攝津守・福永宮内少輔・宮田讃岐  
守・稻津八郎、其外一門ノ旁々皆一同ニ日州門川ノ城  
ニ籠リ玉フ、比ハ二月廿一日也、門川城主米良四郎右  
衛門、薩州ヘ嫡子弥八郎ヲ人質ニ出シ置トイヘ共、愛  
染ノ根ヲ切テ主君ヘ忠貞ヲ勵シ、豊後ニ一味一心也、  
塩見ノ城主右松四郎左衛門、是モ嫡子二郎三郎ヲ人質  
ニ出シ置シモ不顧、山陰ノ城主米良記内、此衆ヲ始北  
浦一同、廿四日豊後方ニ隨フ故、其競不斜、門河・塩見  
・山陰・三城、薩州家ニ野心ヲ挾ミ、豊後諸軍ヲクリ  
入、日向本來ノ人々爰カシコヨリ蜂起スル旨、櫛ノ齒  
ヲ引カ如ク鹿兒島ニ注進有シカハ、人質米良弥八郎并  
バキ聳右松二郎三郎、彼兩人ヲ向カ島ニ渡シテ、夜日  
六人ノ番ヲ付、稠敷警固ヲ成シケル、彼兩人此由ヲ  
風カニ聞テ申ケル、福永・野村逆倭至極ノ僻者カ禍ニ  
依テ、日州悉没落シテ薩州方ニ傾ヌル夏、誠ニ譜代ノ  
士トテモ頼母シケナシ、然トモ吾々尊親ハ恩愛不淺、子  
供ヲ捨テモ君忠ヲ盡ント企玉フ最角コソ有ヘケレト、  
親ナカラモ恥入タル心底也、イサ去ハ吾々モ使宜キヲ

竊、夜々ニ紛テ落行、父子一所ニ成、主ノ讎ヲ報シモノトテ、兩人ノ番人共ヲ何ノ造作モナク討伏セ、元來三城素生ニテ、船ニ乗テモ達者ナレハ、夜中ニ小船一艘奪取漕渡リ、晝ハ山林ニ形ヲ隠シ、夜ハ夜ニ紛テ忍程ニ、七日當ル夜、漸ク鰐ノ口ヲ逃テ佐土原ニタトリ着ヌ、爰ニ内心余所ナラサル人ヲ尋テ、此程飢渴ノ疲ヲ休シ爲一宿ヲ成シケル、然ニ彼亭主何ヲカ願カナ、薩方ヘノ忠節ヲシテ身ヲ安穩スヘキト待儲タル夏成レハ、天ノ与ヘト悦テ、世ニ頼母シゲニモテナシ、深更ニ及ヒ彼兩人ヲ誡テ、薩方方ニソ出シケル、

一 縣ノ領主土持右馬頭親成夏ハ、先年ヨリ豊後ノ下知ニ相隨所ニ、薩方ヨリ内略有ニ付テ、此度ハ薩方ニ出仕ヲ被申ケル、依之豊後ト三城トノ通路往來断絶、其上ニ三城近方迄折々相働ノ故、門河表ヨリモ二月廿三日土持表發向シ、物頭五迄打捕得勝利、豊後ニ注進有、其狀云、「義統ノ狀略ス」

一 豊後ト日州門川トノ通路自由ナラサリシカハ、豊後ヨリモ土持一家可討果トノ評議ヲ以テ、同年四月十五日大軍ヲ催シ、梓山ヲ打越在々發向シ、夏田ノ村社ケ原ニ陣ヲ取、門河ヨリモ新名表ヘ打テ出、兩口ヨリ攻戰、行カケノ勝負ヲ遂、土持親成ヲハ生捕テ、豊前ノ如流サル、云々、

一 八月十八日ニ美々川ヲ越、常住坊ニ打入、軍ノ手分ヲ相定、十万騎ノ軍兵十月十九日ノ早天ニソ打立ケル、サシモノ曠原山林モ兵士ニセカレテ隙もなし、新納院高城ニ打入十萬余騎ノ軍兵、總陣ヲカタメ、野頸・内原・田間・松原思ヒ／＼ニ籠りける、其頃山田新介有信ハ五百餘キヲ隨テ高城ヲ守リケル、其外三州ノ勇士千余人替々守護しける折節、太守義久主の御舍弟中務太夫家久ヲ大將ニテ、鎌田政近・比志島國貞・吉利下総守・新納忠元・日置越州・松浦筑前・肝付・菱刈・福永・野村・梅北某・檢見崎常陸を始、逞兵突氣の勇士共其勢六千餘騎ニテ高城をそ守りける、翌レハ十月廿日、大友十萬餘騎高城ニ押寄、城外の民屋百餘

間一片の煙と燒拂、去とも高城ニは人有共見得ず、城門をも開かず、旗一流も立す閑り返て音もなし、大友か勢勝ニ乗り、軍列ヲなし旗ヲ立、弓矢を連ね、射騎に習へる將士、步戦ニ熟せる諸卒共、高城の小勢成を侮りけぬ、泰青カ過雲の曲、右軍ニ曲水の盃取〳〵に社見得ニけり、城中よりも打出て〳〵戦て互に勝負を争ひける、大友が大軍城の四面を圍ぬれ、味方の兵渴ニ臨んで喉を濕すへきやうもなし、或時古牆の陰処より水有、一滴湧出せり、軍ハ是ヲ掬して社暫の渴を凌ぎけれ、二三日を経るに隨ひ、其水流猶増りて、五月の空の庭潦、晴ても残る風情也、六千餘の軍兵おの〳〵夫汲けれ共、一滴も滲かず、後漢の貳師將軍は、陣中ニ水絶て渴命を忍に堪す、劍を抜て岸を突て、忽飛泉湧出して軍兵渴を蘇すかや、諸人奇異の思ひをなす、是併太守公の徳澤の不淺、天感に通する故成へし、

日州新納院高城耳川合戦日記 川上左近將監

天正六年寅九月拾一日、未ノ刻山東へ就御行之儀被成御發足、御劔本田紀伊守、御旗役三原右京亮、御旗指者色紙金右衛門、其外御供衆鹿兒島之人數迄を被召列、先御

諏訪江御社參被成、直ニ御立也、從松尾坂邊御吉例之雨終日降也、夜ニ入、帖佐之内餅田名觸主計介所江御座、御塩參、頓而御臺敷邊之御酒、其砌平田新四郎御着、目出度奉存由被申上、御樽壹荷折着進上、帖佐衆中ノ少々伺公也、

拾二日、卯刻餅田名八日町より長濱之内鳩之脇迄御船ニ被爲召、御劔・御旗之儀、御近習衆少々御座船ニ御供也、其外ハ陸地鳩之脇濱迄御迎ニ被參候段、御船元御乗物被召、社家衆留主式部少輔・桑幡左馬介辻道迄被差出、澤永賢父子中途江出合被申、濱之市別當茂中途迄御供申也、酉之刻始霧島山之麓田口名御通被成、其砌從清水町田周防介伺公也、并霧島法印被成參上、御樽一荷折着進上、其比山東郡賀平等寺内使僧被參、意趣直ニ被聞召上、則本田下野守・白濱周防介兩人被召出、様子被仰聞候、十三日、卯刻田口名を被成御立、霧島山之麓作り道を御通被成、從高原御迎衆中途迄被參、上原長門守依留主、高原衆中大手ニ而柴屋を構御會尺被申上、長門守三男罷出、於中途御供被申、野尻衆中猿瀬渡口迄御迎ニ被參、酉ノ刻野尻江被成御着、内城市來美作守所江被成御座、則三献被上、御臺被申、本田紀伊守賀雲御座ニ被參、數

通之御酒也、

拾四日、鹿兒島<sup>ノ</sup>御供衆ニ手ニ掛分、日州石之陣所江ニ番替之校量被差遣、此日川上源三郎就領地之祭礼、從山東籠歸候由、御懸合被申上、此日野尻之儀外廻被爲御覽、十五日、御供衆各出合也、此日石之城江一行之御催也、此日從飯野御使者白坂宮内少輔、意趣白濱周防介被申上、此日霧島・鶴戸・妻万三社江御祈禱、仁王經三部講讀也、西ノ刻從佐土原伊集院右衛門太夫以書狀就石江御行、昨日拾四日、西ノ刻各被打立之由注進也、

十六日、從大口新納武藏守使僧、意趣吉田刑部少輔被聞せ、此日敷根入道山東御番罷立候之通爲可申上之伺公、此日從額娃小四郎方津曲宮内少輔被申子細、白濱周防介被聞せ、此日兵庫頭殿從飯野御參上之事、今月廿四日ニ可被差延之由、本田下野守・白濱周防介從兩人前以書狀被申趣、此曉都於郡從長知寺、御着目出度由御使僧被申上、

十七日、吉田刑部少輔山東江爲御使被差遣、午刻ニ從石之陣所鎌田出雲守使僧を以、石御陣無何事結構被執調之由被申上、同申ノ刻老名敷中何茂同篇之儀、使僧西之房ニ而被申上、

十八日、爲御遊山、跡瀨之渡之邊迄被成御差出、御歸宅之砌、從北郷殿野尻迄御發足、目出度奉存候由、同名右衛門兵衛を以被申上御案内也、

十九日、北郷殿之使者御見參、意趣本田下野守被聞せ、則内城表之座ニ而、使者本田下野守御酒寄合被申、此日栗野之八幡之御祭礼成就之御水白坂藏人持參、此日兵庫頭殿野尻江御着也、白濱周防介中途迄打迎ニ被罷出也、廿日、兵庫頭殿被成着出、御樽一荷折着進上、則御寄合、本田紀伊守賀雲被參御座へ、

廿一日、野尻之城近山ニ而狩ニ爲御慰御登也、兵庫殿茂被成御登、此日石之御陳江御遣之使僧被罷歸、吉田刑部少輔被歸、陳江御遣也、鹿兒島衆も被罷歸、

廿二日、吉田平次郎前<sup>ノ</sup>御發足、目出度由使僧を以被申上、此日菱刈表之衆、新納刑部太輔・町田三郎五郎・白濱式部少輔・菱刈孫三郎方此衆を始、山東江罷立候通爲可申上伺公也、

廿三日、山東財部より、左衛門尉殿<sup>ノ</sup>之使僧、意趣白濱周防介被承、此日兵庫殿飯野之こ<sup>トク</sup>歸宅、此日新納四郎殿從平泉參上、此日三原右京・如阿弥兩人石之陳江御使也、

廿四日、鎌田源左衛門伊作妙現御祭礼成就之御水持參、

此日伊地知又八・平田右近將監・高城左京亮、石之陳江

被遣候之處ニ、氣任ニ長ク滞留、曲事ニ被思召由稠敷被

仰出、依夫三人斟酌也、此晚石之御陣より町田出羽守・

税所新介兩人爲使被參、此日和泉江川村金兵衛爲使者被

差遣也、

廿五日、野村民部少輔石之陳ニ御使也、此朝町田出羽守

・税所新介如御陳御暇被申、

廿六日、朝呼ニ御登せ被成、此日山東綾之米良備前守所

ノ以使僧、豊後衆耳川を渡候之由、從佐土原注進段被申

上、此日此供衆野尻大手口御普請也、

廿七日、從樺山殿使僧修藏主、意趣本田下野守被聞せ、

此日野尻之衆中御酒進上、此日從種子島番衆岩川民部少

輔、野尻内城ニ而被懸御目、先刻石之城江働之時手火矢

射通、別而辛勞神妙之由被成御感、此日山東財部川上三

河守所ノ御使僧、豊後衆少ク耳川を渡候ヘ共、無差儀引

退、無何事由被申上、此日鹿兒島被居殘衆少ク御座所ヘ

被馳參、此日新納四郎殿御寄合、賀雲被參御座ヘ也、

廿八日、野尻惣社人王江御社參、地下旅衆御供也、御幣

宮内坊持參也、大宮司・祝子依伊東代者拜殿之庭江畏也、

此日鶴戸之別當坊御祈禱之御札・配帙持參、御樽壹荷進  
上也、

廿九日、高原鎮守江爲御代宮内坊社參、此日都於郡之長

知寺家之祝千足進上、此日從義虎野尻迄御發足、目出度

被思召由、老名敷中迄として御書狀被仰通、彼飛脚石之

陳所江罷通也、此日從大口新納武藏守書札到來、大方趣

ヘ、頃日從相良方至武藏守使僧を以、大友入道宗麟日向

表江雖一行之、原ノ一口迄ニ而者難閉、扱ヘ肥州之衆猶

以頼思召由候、又々八代迄眞光寺と云使僧下着、加一圓

難成申候ヘ共、自然從別方洩聞得候而ヘ、得其意相良之

事候条、如何之由、懇意之儀被申事ニ候、一ニハ石之

御着陳、皆始而承候通、又ハ栗野・横川江雜務之儀、武

藏守助定頼入候由、此三ヶ条無題目、此日紙屋之地頭稻

留新介、從石之御陳以同大膳亮、御發足目出度奉存候由

被申上、此日鹿兒島衆從去八月始山東御番手衆、町尻之

御座所若無人數衆にや候半と、老名敷中以御分別各參上

也、御陳者依猛勢、其内を寄ク高城・財部境目江被差籠、

此日新納殿鷹壹ツ進上、此戌之刻、從穗北野邊名字之方

以被申上ヘ、穗北野心之衆多ク候、其内ハ忠三人ハ無異

儀被爲搦取由也、

晦日、從石之御陳御左右、昨日廿九日、石之城江被仰越ハ、僮ハ被執延間敷退早ク城ヲ可被相渡由、左候ハ、道之口ヲ遣、堅固ニ可被送せ由、日置越後守・市來軍介從兩人前被立せ、無頼方故にや、無吳儀應其趣ニ、僮ハ從今日以前留可申候由也、從夫人質執替談合定、從御陳德持舍人佐・有馬右衛門尉人質被遣、石より井尻伊賀守・荒武右馬介兩人也、此日石之城無筋目被請取由、石之衆長倉勘解由左衛門尉始悉如三城被送遣、此日野尻之南原ニ而若キ衆鶉狩被仰付御遊也、此晚從佐土原鎌田尾張守被申上、一昨日廿八日、三城衆耳川を渡、びしやご嶽ニ打居たる由、從財部茂同篇之使僧也、

朔日、從義虎使者木通上野介御樽四荷折着進上、此日新納殿進上之初尸、津曲但馬守殿於御前ニ包丁被申、新納四郎殿被成御寄合、伺公衆江於御前招被申、從和泉進上之酒召出也、此日從老名數中、石之城昨日晦日被請取由、以使僧被申入、此日平田民部左衛門從石之城被罷歸、委細之儀被申上、此日佐土原ノ鎌田尾張入道・上原長門守兩人前ノ、石之城屬御案利候祝言、并豊後衆耳川少ク渡候之通、使僧を以被申上、此日平野左近將監老名數中江御使也、

二日、從豊後守殿石之城屬御手裏候御祝言、使僧を以被申上、此日從高原上原長門守三男彦千代丸御酒持參、此日從老名數中以書狀、山東番手衆、從爰者三番替之賦たるへき由被申上、鹿兒嶋衆之事ハ依御座所事候之間、此節ハ五番替ニ賦分候、諸所一番衆者、太守様鹿兒嶋江被成御歸宅日より可爲日限談合由也、此日石之城輒被召執候御祝儀、以使僧申被成、此晚羽月猿渡掃部兵衛以使者同前之御祝儀被申上、從新納武藏守茂同前ニ被申入、此日加世田片浦之山下造酒佐以伺公、御國新中國銀山歸帆之由、御案内役人迄申入候、袷之表ニツ・鞆之皮ニ・御樽壹荷上申也、此夜市來軍介石之城ハ被罷歸、彼境之様子細ク被申上、從御前別而辛勞之旨被仰聞、御手盃被下、則致拜領忝由被申上、此日從兵庫頭殿石之爲御祝儀御使僧也、意趣伊地知勘解由左衛門被承也、

三日、鹿兒島奥より種々御酒御持せ也、此日上井伊勢守從山東被成參上、椀山入道殿從横川被成參上、則御兩所江御寄合也、

四日、太守様依石ノ城御勝利御歸陣、飯野御立被成、此日鹿兒嶋之御供衆之内山東番盛、壹番衆之分ハ、從野尻直ニ番所如佐土原可罷立由被仰出、一番伊地知勘解由左

## 『長谷場越前日記』

衛門・同名又十郎・白濱次郎左衛門・瀧聞孫九郎・長谷場織部介・養輪織部佐・津曲六郎左衛門・村田藤右衛門、又五六日跡々市來備前守・肥後山城守兩人被罷立、御番太將平田左馬介・伊地知周防介同番也、

一天正六年戊寅十月の十九日、豊後の國の大將ニ大友宗麟・同新太郎とて有りけるか、伊東三位入道の方人を被成而、無理の干戈を相巧ミ、猛勢を卒し宛、伊東を先陳せさせられ、日州の高城ニ被令着陳、惣陳ニハ新太郎の大將也、松山陳ニハ佐伯新介始として宗徒兵もの取籠、野頸之陳ニハ伊東衆ニ而、田間の陳ニハ草野星野ニかうら山の八幡座主を被相具せ、都合之勢廿萬騎と聞得けり、事を左右に寄せけれハ、あいの垣迄普請して高城をせめんとて籠城ニそ仕付ける、敵陣の若武者ハ三界無法之事なれハ、今を晴れと思出で、馬ニ鞍置さし出し、朝乗りニ夕乘や、寒冬奈雪の時節にて、或ハ荒里、或ハ遠陣まくさぬかわら不弁也、疲馬鞭すいに不驚、疲民刑罰に不恐と見聞ハ誠也けりと、御方の兵物見物す、扱又夜遊のすさみにハ、各々酒宴ニ沈

醉し、武勇の道を忘却シテ、つゞミ大鞍亂舞にて、榮花ニ誇る風情也、懸りける處ニ、高城の内御大將家久様を始として籠城を致す軍兵ハ、比志嶋紀伊守市來衆中を同心す、相双にて鎌田雲州ハ、都於郡と志布志兩所之城衆中を同心す、其外所々の兵物も思ヒ／＼と走せ籠る、城地頭ニハ山田新介兵儀を調へ我も／＼と勇ミけり、角ハありても朝夕ニ城戸を開く事不成して、網魚を見るか如く也、然りとハ有なから、牡丹花下のすい猫ハ心舞蝶ニ有とかや、傳聞ク、とう朱公ハこうせんを伴ひて會稽山ニ籠り居て、終ニ胡王を亡す例有り、山潜りを味方の軍衆ニ通用し、互ニ智略を被廻、廿日余りの籠城ハ夜白の軍勞無限、懸りける處ニ、御大將義久様被仰出ける様ハ、家久を始として、此度ニ諸軍兵を果してハ弓矢の恥辱たるへしと、如何ニもして迎取らんと上意也、去間、滝聞美作入道とて世に無隠れ老武者の有りけるが、唯一人進ミ出畏而言上す、數萬軍兵承り忝ハ候へ共、御一大事爲過之無子細、縱イ日州者如何様ニ成行共、千兵は求め安し、一將者難求とこそ承れ、今暫シ者紙屋之城ニ御坐有て、從境目御左右次第ニ御出馬を有へしと、頻ニ支て被申、

## 『日向記』

主將ハ此由聞食、無二之忠を被存知可然申事、何れも功者ニまかせられ候得共、今は他國の大將の見參ニ入らん事、前代未聞是也と被仰出 上意を、即御馬を被出ける、其日もなのために傾けハ、佐土原城ニそ御光着被成ける、御吉事之瑞相ニヤ、其夜半計ニハ御夢想ヲ蒙せ給ひて、立田の河の紅葉哉と五文字はなかりけり、是を御安被成宛、義久様之御作意にて、打つ敵ハ竜田の河の紅葉かなと、五文字を御續け被遊云々、

一十月廿日、大友ノ諸勢高城ノ四方ニ五ノ陣ヲ取圍、持楯カイタテ突立、夜ヲ日ニ續テ攻戰、新納院高城ノ城主ハ山田新助有信ト云者也、此時嶋津中務太輔家久・吉利下総守・鎌田出雲守、以上彼是一千余を卒シテ彼城ニ籠ル、則時押寄攻シカハ心安落ヘカリシヲ、豊後ノ諸將被申ハ、弓箭ハ此度高城一ツニ極ラハコソ、危キセリ合ヲモ可望、日向大隅薩廣遠島迄退治可有、唯敵ヲ擒ニシテ糧詰ニセント言俣ニ、日向國中ニ廻文アリ、伊東本來ノ家人共一味同心ヲ以、一日ノ内ニ國中ヲ放火シ、國ヲ覆サンコト掌ノ内也トテ、分國四十八

ノ外城ヲカラクリ、一所ニ廿人・卅人、或五十・七十ツ、年來ノ者共連判シ、十月十日ニ國中ヲ放火シ、都於郡ニ切入ントソ計ケル、依夫警衛舟ヲ數百艘、内海折生迫ニ漕着次第可放火ト約諾ス、然ルニ其内未練ノ奴原少々、薩廣方ヘ返リ忠申故令露顯、十月九日、彼企シ士皆々被誅伐ケル、豊後警固舟モ同十月乗船スト云トモ、敢テ取合者ナカリシカハ、途ニ迷ヒ漸漕戻ル、カ、ル所ニ同廿四日、平野三河引切テ評議有、先平郡久米田ニ火ノ手ヲ立、即時ニ河原田ニ押寄、都於郡ニ馳込セント吾モノト進出、一人當千ノ勇士トモ數百人眞先ニ攻戰、去トモ廻文ノ相圖相違シ、連判ノ族トモ被打果、故ニ放火ヲ不立、島津方ハ弥増大勢ニ成テ相防、平野・三納ノ働勢僅千人ニハ過サレハ、手負死人數多出來テ引退、彼謀計首尾セハ、則時ニ八千町ヲ取返スヘカリシヲ、當家ノ武運時不至ニヤト恨涙袖ヲソ湛ケル、

## 『紹劔日記』

一天正六年戊寅十月、伊東方難忘熟所にや、憑大友殿肥筑豊の數勢を催し、新納之高城江着陣シ、四ツあいの

## 『盛香集』

垣ヲ結廻し、日夜間なく責戦、薩隅日人衆粉骨故、豊肥筑之人衆追崩、悉く被打果、惣合四萬人之亡也、去者霜月十一日、財部口ノ野伏を出し、松山之陳を追拂、其日柘山規久ハ中書御替ニ高城へ籠る、諸人當り候得共、皆侘申所之番也、忠助ハ氣合惡候て不罷立候、大亡ハ十二日也、此度而已ニ不有、數代忠節之爲家故にや、穆佐・高城を拜領、柘山之家可盛也と満足至極也、今兵部太輔忠助と申ハ、先年薩州蒲生ニテ戦死仕忠副之弟也、愚息規久ハ兄忠副の跡次成故、彼穆佐へ忠副之爲跡、規久江一族皆々召列させ罷歸候、後兵部太輔と申、親之兵部ハ、豊後入之刻安藝守にて、隅州堅利江在任す、今迄如此、

一天正六年、従大友家數万の軍勢を日州ニ被向附、高城嶋津中務太輔を首將として、山田新助・比志嶋紀伊守・鎌田出雲守其外籠城ニテ、専防戦の用意ある、依之高城の人數を迎取らるへきか、又後詰可有か、延引して高城の人數を討せは、弓箭の恥辱不過之と御評儀ある、衆儀多して一決せざる処ニ、瀧聞美作入道申ける

## 『公』

ハ、誠ニ御一大事不過之候、今暫紙やの城ニ被成御座、堺目の御左右次第可有御出馬か、千兵ハ安求難逐一戦と頻ニ申上候段、義久公聞召、美作入道無二の忠儀存申上事、何老功のものに任せ候へと御意にて、御合戦ニきわまり、耳川ニ而大勝利を得給ふなり、

一於大坂 權現様より本田忠勝ニ被仰付、嶋津中務太輔豊久を被召呼、權現様には簾の内ニ被遊御坐、大友家高城寄來候時、龍伯後詰ニテ合戦ニ及び候次第、始終被聞召上候、豊久退口出、以後忠勝より何様ニ被聞召上候哉と御尋被申上候処、權現様御舌を被出、御首を御振、さてく龍伯は聞しより功者成大將なり、其故は、大友ハ軍儀不調法なれ共、目ニあまる大勢也、然を齋藤を始名有武勇のものとも、義久方を討取、味方ニ爲差もの死せざる内その勢ひを不拔、塩合能人數を引あげ、味かたの損せざる様ニ要害の地ニ引入て、負て引たるやふニ大友か諸將におもわせけるハ、能おそろしき謀事也、故ニ大友の將軍、うかゝと義久堅陣にかゝり、もろき敗軍しける事、古楠正成か須田高橋を

偽て天王寺に引付たるに不呉、義久心中いかなる事をおもひもふけて斯は謀ぬらん、豊久田舎武士にて、言語聞請かたき事多かりしと上意のよし、其時代の人より承置候となり、

1053 「莊内平治記」

一 此事時刻を回らさず鹿兒島ニ聞へしかへ、義久公大に驚き被思召、數萬の勢を催し、御自身向わせ給ふへきにそ定りけり、爰ニ北郷左衛門尉時久入道一雲は先驅の命を蒙り、息男三郎相久・同彈正忠忠虎と共に、太守公ニ先立て鬼山を打越、宮崎の城ニ屯を張り軍列を相定、時ニ大友か將士相議して曰、去年伊東敗北之時打残されし者共、一旦命を継んため敵ニ属し輩國中ニ多かるべし、彼者共を相招んにや、わり呉儀ニ及へきと、長倉勘解由か計りにて、三納・平野の者共かたらふニ、本より理非を辨へさる者共、兼而ハ薩广ニ属せしか忽に叛心し、皆大友社と志ける、角て三納・平野の者共一千餘騎を引勝て、都於郡川原田の道場ニ火を掛る、都於郡ハ無勢にて防ぎ兼たる処ニ、北郷一雲父子三騎、數千の兵を引卒して都於郡ニ打通り、河原田

1054 「莊内平治記」

の道場にて、北郷藏人久盛等粉骨を抽て數千の敵を掛散し、三百余人打捕て、都於郡を全ふせり、

一 去程ニ、義久公十月廿五日鹿兒島を立せ給ひ、日州ニ向わせ玉ふ、日巳ニ半途にして暮けれへ、霧嶋ニ旗旗を止め、終夜義久公敵軍退散の祈誓を申させ玉ひつゝ、一炊の夢の内ニ權現の御告有、

討敵は龍田の川の紅葉かな

と新ニ靈夢を蒙らせ玉い、逆徒の退散疑ナシと悦の法施を奉り喜悦の眉を開、十一月朔日ニ都於郡を打通り佐土原ニ着せ給ふ、野ニも山ニモ軍兵充滿して、夥しともいふ計なし、斯て太守公財邊ニ兵を進め、大友の陳を責へしと詮儀已に定りけれとも、折節大雨降續て空く日を送り給ふ、

1055 「莊内平治記」

一同十日の深更ニ、兵庫頭忠平主ハ野伏六百餘人を催し、敵陣近く忍寄、道の左右ニ隠し置、川上助七大將ニ而逞兵を催し、大友か軍兵の豊後への往来を切て三千餘

を打取けり、松原の陣ニ籠りたる大友か勢是を見て、雲霞の如く切て出る、兼而巧し薩摩勢、一戦ニも不及財部の方へ引ければ、敵の勢勝ニのり揉ニもんで追掛たり、六百余騎の野伏共一度に吐と懸出、敵の後を遮り兩方より攻ければ、今井上總・和田民部・白土刑部・野中大膳・阿賀野新介・問住処鳥井某を始五百余騎打たれニけり、かゝりしかは、松原の陣は落去して一片の煙と焼上る、佐土原ニ磐たる伊地知・逆瀬川五千餘騎、總陳の間の牆を打破て高城ニも籠りけり、財部の勢共へ松原城の餘煙を見て、川田某を先としてあんそうつるに打て出る、高城田間ニも、月の輪にて大友か勢と掛合、終日戦い暮しけり、義久公は數萬の兵を卒し給ひ、大旗を根白坂に立給ふ、伊十院下野守久治先陣を賜也、數百騎ニて一陣に進む、松原の陣落ければ、河原の陣に籠し高良山の座主弦をはつして降人に出ニける、十二日の卯刻計に總陳より敵軍競て打出たり、田原・佐伯・和田・宇須木・柴田・清田・志賀・吉廣・萩野・播戸と名乗て、菟野外カネノに屯す、薩摩勢得たり賢しと切先を双懸出、追つ返つ火出る迄戦ける、名を惜勇士等命を豪毛より輕んし、縦横無尽に戦けれ

ハ、味方に市來軍助ハ伊東常陸と引組、差違て死たりける、毛利助左衛門尉も伊藤權助に打れニける、時久入道一雲・息男相久・同忠虎・北郷藏人久盛等轡を双て出、左りに轉り右に突、汗馬の息をも休す、散々に戦ふて北郷藏人久盛打死す、久盛か郎臣岩滿美濃重直・高野刑部左衛門・黒田某以下拾余人、一処にして打死す、久盛は時久の從弟にて、去ぬる永禄元年に宮ヶ原にて討れし藏人久夏の嫡子也、其外時久の家臣にも村田能登守經重・山中宗左衛門尉等を始、多輩爰にて打れける、太守公の御旗元にも本田因幡守親治・廻三國・丸目某思ひしに戦て、齋藤鎮実・村上長倉の者共と差違て失ニけり、かゝりけれハ、味方の勢支度路ニ成て一瀬川迄曳退く、かゝる処に、兵庫頭忠平主・右馬頭征久・圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟、三百餘騎を左右に双へて、味方打すな、續やとて、一瀬川に相支へて敵の勢を本の陣に追かゑす、中にも島津右馬頭征久・上井伊勢守覚兼・新納治部少輔・川上三河守・平田狩野介・大寺某を始、瀬口に打出、大友か勢に突掛り、七縱八横に戦ける、北郷二郎相久ハ右馬頭征久・圖書頭忠長と共に數千の兵を指揮して、大友か

勢を横合ニ掛散す、敵軍忽敗北して我先ニと引退く、味方ハ透をあらせず鯨波を作り掛く、逃る敵を追すかふて名貫川を追越、時北郷右衛門尉久堯と伊集院美作守と先掛して分捕す、味方は息を休す美々川迄追詰て尽く討平く、爰に梁瀬口西の別府に大瀨有、堅ハ百余丈ニ過、横は三町、深き事殆と貳丈餘、彼天竺の無熱池昆明池共云つへし、苔岸影を浸してハ潭水藍を按するに似たり、夕日光りを映してハ、百鍊の鏡に臨むか如し、大友か臆病勢薩广勢に掛立られ、案内不知の者共、皆此川に掛入て、洩瀬をも辨へず混打ニ打けれハ、水ニ溺れて死する者幾百千と云事を不知、渡し掛て返さんとするも、後の勢に閑れて心ならず溺死す、後は打れ、前は溺れて、八千餘人ハ失にけり、旗旌水上に爛熳せる有様、恰も蜀江ニ錦を濯す分野も角やあらんと覺へたり、去ハ太守の夢中の句、今更思ひ念られ、寔に龍田の川水に、風に揉るゝ紅葉の散浮らん風情也、世は堯薄ニ及とも任信心、有時は神明納収まし／＼けん、此日討れし敵軍には、佐伯宗天・嫡子惟実・弟新助・宇須木經冊・同名掃部・同宗景・武田重則・瀧田太郎・萩野能登・嫡子六郎・弟弥十郎・美玉長門・蜂屋侍從

を始、馬場・田原・國分・森山・今井某・森迫・柴田・筑紫・長廣、其外從卒數をしらす、一時の間ニ亡にける、然のミならず、大友か敗軍の兵八方に散乱し、美々川に向て逃るも有、或鎧甲を捨、彦嶽に向て逃るもあり、中務太輔家久は從者をも期せず、只老騎高城ガ打出て、敗軍の敵を目ニ掛て、一鞭に百歩を飛せて、太刀を打振て逃る敵を拾余人、手の下に切て落させ給ふハ目を驚す振舞也、是を見て、嶋津征久・北郷忠虎・根占某・佐多・喜入・頼娃某を先として、我も／＼と掛出、追詰／＼切伏しハ、磊石の卵を壓し、輪宝の山を崩らんも角やあらましと覺へたり、彦嶽ニ向て逃る敵ハ山田新助有信路を遮而打止む、月野佐良志奈を初四萬三千六十餘人只一戦ニ討れニけり、斯る処ニ誰とはしらす七拾余騎の勢ニて引ける、味方ニ百歩を隔、軍列を乱す退く敵有、薩广方の荒手の勢、避し歸せと追掛しに、七拾余人の者共、左右ニや及と云儘に、取て返して切結、思ひ切たる七十餘騎、面も振す戦たる、味方も専途と挑戦ふ、七拾餘人の者共廿余人討れ、味方にも海江田主殿・眞方大炊を始六七人そ打れける、惜哉、今度大友か軍中ニ能戦功を勵せしもの、此將尅

『耳川合戦日記云』

人ニ而そ有り、後ニ其名を尋るニ、田原紹忍とそ聞へし、其外別府狩野・絲長長左衛門・脇屋監物等も此時に打死せり、扱高城も美々川迄其間七八里、人馬隙なく死かさつて死骸<sup>一本</sup>を算を乱せり、頓而日州靜なれへ、同十三日、義久公敵の本陣ニ大旗を立、川田駿河守義朗ニ命して凱歌を二度挙て、數萬の軍兵節をうつして和く、角て太守公薩隅城ニ御歸陳あり、日州はしつかなる、

一天正六年寅十月廿五日、山東高城從大友家近陳を取構、既ニ内端之往來茂不輒、折角之由追々依御左右ニ、此日巳ノ刻被成御發足、然へ如御吉例御諏訪江御社參、從直ニ高津濱之磯も御出船、御座船廻之船數大方五拾艘程、御劍ハ本田紀伊守、御旗役ハ三原右京亮、御旗指色紙金右衛門、御乘馬瀧か平野川原毛、吉野黒糟毛、御兵具衆木脇大炊介・和田玄蕃介・鎌田源左衛門・高城左京亮、其外御供衆鹿兒島衆谷山寄之人數何千騎共不知其數、海陸同前之打立、扱御船長濱之沖てうしか嶋を近々被押渡砌、日州財部之使僧大平寺御船江被押

向被申処へ、高城江近陳之上、三納城地下人依惡心者、廿三夜敵仕拂、其外平野城を燒落、八代・綾・本庄城麓名之裏里茂悉被放火、都於郡・佐土原・木脇邊煙を立候様子危見得申候由披露也、御座船・御供之船到迄各無心許被申合、然者御船濱市へ酉之刻前ニ着岸也、別當之所江被成御船下、陸地之御供衆各被參合、頓而宮内御假屋へ被移御座、其砌從霧島山使僧、山東之樣躰都於郡・佐土原迄折角故、敵六之原取切之間、音信不通之由被申上、

廿六日、未明宮内を御打立被成、辰ノ刻曾於郡之内松永川内之邊ニ而、又從霧嶋山早走之使僧を以被申上、一昨日廿四日、山東之惣人數三納仕崩、其競を取而都於郡之城攻上せ防返、川原田道場光大寺へ追詰、敵五百餘被討取、殊之外御勝利、取之城之之事、三納・平野の外ハ一ヶ所も無何事堅固ニ被持留候、往來等聊無煩由候間、可易御心通具ニ被申上、此御左右ニ各得力、軍兵以下ニ至リ堅固ニ直シ氣色、霧島山<sup>後</sup>儉難之所を無嫌輒被打越、酉ノ刻始高原被成御越着、内城上原長門守館江御着也、山東之立柄無心許被思召候由、毎々被仰出、

廿七日、辰ノ刻高原を御立、未之刻紙屋江御着也、内

城稻留新介所へ被成御座、此日伊集院右衛門太夫・上

井伊勢守此外鹿兒島衆少々佐土原江被差遣、平田左馬

介石城江御着城以來、直ニ佐土原之御番被閉目、頃兼

日笑齋從福島被續せ、先々此衆差揃談合なり、此夜半

計、太守様於紙屋内之城ニ御夢想ニ、

立田の川の紅葉哉、と被成御覽、雖然五文字なし、か

様之御靈夢ハ毎々被次せ茂候なと申合處ニ、打敵ハ、

と被遊、誠ニ奇妙之事共也、

廿八日、廿九日、

朔日、御供衆各出仕也、

二日、辰之刻紙屋ヲ被成御立、都於郡・佐土原より御

迎衆數萬騎、綾・本庄・六野原邊迄追々被參候、路次

之爲警固、五千人程別而帶ノ物之具を左右ニ分而美々

敷粧也、平田左馬介中途迄御迎ニ被參、此日茂忠棟宿

ニ而談合間、兵庫頭殿・左衛門殿・河上上野介殿・新

納近江守殿・伊集院右衛門太夫殿・上井伊勢守殿・一

所衆・諸地頭、此人數佐土原積迎堂小路迄出合被申、

各御屋之城迄御供也、村田越前守從紙屋御供也、

此日於御宿ニ終日之評儀也、

四日、就御談合、從財部川上三河守・伊集院美作守

・伊集院下野守伺公也、此日兵庫頭殿・圖書頭殿御寄

合、其砌敵陳火掛退候之由風説也、悉中途迄被爲續、勿

論雜説ニ而各被罷歸、此日川田駿河守從根白坂邊勸請

之儀有之、然則財部も敵陳於通路被掛野伏、敵十五六

人討捕候を吉詠之由ニ而、頓而川田駿河守勝吐氣也、

此日依吉日、兵庫頭殿 太守様江手裏之御武智御相傳

也、此夜平田民部左衛門高城江早々垣を忍ひ御使ニ被

差遣、野村周防介案内者ニ被仰付、彼周防介御腰物被

下候、

五日、於御宿ニ御談合、未ノ刻計從高城上床主膳介・

土橋名字兩使被參、高城弥折角御行被爲急、可目出度

由被申、此日可レ陳崩被成衆威、

六日、先々川原之陳被崩候而、諸陳可被見合談合相定

也、然處ニ此夜俄依大雨、御行被差延、御大將之御事

ハ不及申、諸軍雜兵（共）已下ニ到迄、此時ケ様之雨供水者

乍不及天道之御意如何候哉と疑敷、皆々心苦敷申合衆、

此朝平田民部左衛門從高城被罷歸、扱高城之事歴々究

之玉藥・魚塩不如意、殊ニ水之手を取候ハ、<sup>(4)</sup>腹何共無爲方様躰ニ候、片時茂御行急可然由被申上、此便ニ茂從豊後陳和平之調達中務少輔殿可被召儀由、細々申掛由御注進也、

七日、終日之大雨也、

八日、此日茂御宿ニ而御談合終日也、

九日、敵陳到通路、就賦野伏之儀、兵庫頭殿・右馬頭殿・左衛門殿・伊十院右衛門太夫殿・上井伊勢守殿、鹿兒島之御供衆少々、其外御一家衆・諸地頭人數を催、此夜半時分佐土原を打立、財部原江打上、雖然無差儀由、依御左右ニ、軍衆ハ從中途被打歸、兵庫頭殿・右馬頭殿・右衛門太夫殿・伊勢守殿其外評儀衆各財部江被差通、兵庫殿御宿於内城ニ終日之御談合、とかく川原之陳可被詰崩之儀<sup>(4)</sup>足無篇目、然共近日中吉日不近候間、先往來江伏仕役之評定也、

十日、兵庫殿御宿ニ而談合終日也、此夜飢肥之山伏大圓坊高城江從財部使僧として被差遣、從佐土原茂伊作衆山口早右衛門と云者被遣、往還無煩、

十一日、通路之仕役行亦往來之徒衆三百程、一之伏草五百餘田原橋、二之草五百餘築地之本、詰ハ草三千程、

十日之亥ノ刻ハ被打立、向ヘ野伏衆ハ夜明ニ被打出、然砌松浦筑前守從高城使也、就夫歴々人數ハ財部内城ニ而日長迄談合、一手之軍兵を相催、楯鉾を調、旗呼兵を持せ、財部川之渡口ヲ前ニ持仕役兵存不被聞合、川上上野殿・上井伊勢守殿・穎娃小四郎殿・鎌田刑部左衛門殿、鹿兒島衆少々、以同心根白坂之口ハ到川原陳出野伏、敵之振舞一行可致校量談合ニ而打上せ、陳之様躰被見廻砌、午ノ刻往來之衆被掛出旨見得、敵城之外仰天、惣陳松山之陳ハ乘馬陸立、五百二百三百計ツ、從兩陳掛續不知其數、然者一二之臥草衆茂敵依爲大勢、如何可有坎と雖心遣、互ニ恥ける故にや、臥草ニ存分籠□草同前ニ起合、我先ニと被歸掛、敵調雖防戰、大軍ニ被押崩、尔ニ鐘ヲ茂不合致廢軍、残少ニ被討取、扱手ニ立者茂なけれハ、松原陳江被押寄、根白坂之口ハ川上上野介・上井伊勢守・穎娃小四郎・鎌田刑部左衛門・税所越前守、鹿兒嶋衆少々、以同心築瀬ヲ打渡、雖爲少勢川原之陣江被差向、松山之陳輒追拂、於陳中茂大將分之者餘多被討取、凶殘たる雜兵以下惣陳之南之迫切岸を追上、跡輒寔成躰、松山陳悉燒拂、諸軍兵衆如高城馳籠、其砌城籠之田間をいて、

惣陳川原城より出合、散り手火矢を放掛たれハ、手負死人多し有、否笠刑部・福永丹後・長谷場弥九郎、此等ハ當越度也、財部渡瀬衆、兵庫頭殿・右馬頭殿・圖書殿・伊集院右衛門殿・平田左馬介・佐多殿・新納殿・北郷殿・豊後守殿、此衆を始り一家衆・一所衆・諸地頭川原表江打渡、松山口之人數江取合、間之垣を隔、手火矢野伏無陳、然者惣陳・川原陣・野くび三陣互に往來茂絶無及方、あぎれて今ハ梓弓可引道茂無、籠鳥之雲を戀たる有様也、兼而從川原陳筑州高良山之座主星野房到中務少輔殿、此渡之弓已前輒本意候間、和平之調儀可被成召由節々被申入、以其首尾、既到此日人質捕替之儀急ニ被申、依難黙止質兩人被召寄、因茲川原之陳今ハ互ニ箭ヲ被留、惣陳・野鎖(頸カ)之陳江御行可被差寄評議執々、廿萬餘騎一手ニ□伊兵を持せ、高城田間川原表江被打居、夕陽傾ハ、諸軍衆川を前ニ持、一手ニ被成勢揃、口堅固ニ可被爲持談合雖相定、依猛勢衆扱不存分衆、或ハ川を前ニ持、或ハ川を後ニ成し、足輕雜兵ヲ如外聞差出、面々かゝりを燒續、楯之端ヲ并、對甲胄弓・鉄炮・鎗・長刀側ヲ不離、敵有愾氣色(懸カ)可打崩粧、吳國之樊噲・張良茂可恥風情也、味方之仕

氣聲ハ天地震動する計也、諸大將軍兵以下迄、翌日之御行可有如何欵と、心ニ不掛人なし、太守公ハ鹿兒島・谷山・伊作・田布施・伊地知周防介・加世田衆都合三萬餘騎被召列、佐土原陳西ノ刻之始被成御打立、亥ノ刻高城之向成ル根白坂御着、篠陳御供之諸軍衆、甲之鉢を枕とし、鎧(頸カ)の祖傳(頸カ)ヲ片敷かんと夜を被明、誠無比類、此夜半惣陳之野鬮之方江火矢を被付、敵之殊之外爲驚様躰也、此夜諸陣之者共浪と成り、互ニ名筏を借故にや、諷被笛大鼓ニ而終夜慰と聞由、十二日、敵陣雖爲折角、御行凡慮難及、如何可有と、諸軍兵疑敷所ニ心を運らし、從未明思々ニ出立、御下知ヲ兎角と被致處ニ、霧島・鶴戸・正八幡・諸天三寶之擁護にや、辰カ卯之刻始、敵惣陳之大手之口ハ高城田間江落シ、川原軍衆江弓鉄鉋を打掛、馬之鼻をならべ、鎗を揃一面ニ切掛ル、味方軍兵雖爲覚悟前、彼行慮外之間、少油断ニ相似たり、然者川原表之足輕以下足を乱様躰也、去ハ諸軍兵も浮足ニ成砌、飯野之地頭本田因幡不及吳儀鎗合戰、一足も不去無比類、戰死之人數も因幡可見次由候得共、大勢被押隔、三四人程同枕ニ打死共、并庄内高城衆ニ北郷藏人手廻主從五六人

打死、其外川原表ニ而、或ハ立鎗を合弓鉄炮を討、或ハ主人傍輩ヲ茂見捨、川之瀬ヲも見分、味方江込掛たる軍兵も有、然大北斗難調日、此河之渡口ニハ兵庫頭殿・右衛門殿・伊集院右衛門大夫を始五万騎程、從宵被成勢揃たる、到時聊無仰天、即刻入替、川を打渡合戦有之、從梁瀬鹿兒島衆・田布施衆少ク、財部此衆陳也、打續右馬頭殿・圖書頭殿・喜入攝津守殿・川上殿・上井伊勢守殿、此衆を始一所外城之人數都合五萬餘騎、我おとらしと横合ニ被切入、太守様も五萬餘騎被召列、根白坂被成御下、川原之本渡を被成攻落、敵も色々雖相戦不叶、先致廢軍、松山陳之下之脇竹原山ヲ片取込掛、敵運之究メ也、彼山涯之古川漫々たる片洲江、馬乘陸立皆追入らる、されは鎗長刀執直者稀也、其内ニ茂有心者と見得、水底川厓澄上合戦して被討者も有、又太刀下ニ而引組被討者も有、扱從横入口も鎌田大膳若武者之故、無思慮掛入主從戦死也、敵過半は水ニ溺、洲之面ニ沈浮漂ける、究竟之者共を雜兵以下等迄切つき引寄、生首ヲかき落事無計、去ハ大敵ヲ被討果ノ間、從辰ノ刻未申迄時刻移也、味方茂於足<sup>是</sup>皮手負死人多シ、然ハ川原之軍半時分へ、兵庫頭殿・

右馬頭殿・圖書殿・川上殿・喜入殿・伊十院右衛門大夫殿・上井伊勢守殿ヲ始、豊後守殿・佐多殿・大野殿都合七萬餘騎、如雲霞ノ惣陣指而被攻上、川原之陣衆筑州高良山座主星野兩手之事ハ、依降參高城麓江被留置、其外之者共三百程足被成、如惣陣之馳籠茂有、又如野頸原へ直ニ逃遁茂有、四方八面被追散、高城者中務少輔殿ヲ爲大將、新納殿・花山殿・吉利殿、國衆ニハ東郷方・肝付方、其外一所衆・諸地頭、福島衆・市來衆・伊作衆・百次衆・都於郡衆・八代衆ヲ先として、三萬餘騎計惣陳江被攻上、敵一涯調防戦、川原之衆ヲ被討果ヲ見而、無力惣陣を被追落、陳内ニ而被討茂有、又如野頸原逃上、爰かしこの野山等ニ逃隠を狩出、或ハ頭を取、或ハ生捕ニする事不知其數、然ハ津野こみ<sup>ト</sup>候との間ニ而、敵六拾程相調騎衆待付合戦有、味方小勢の故ニや、於陣場林田伯耆・二階堂式部・海江田主殿討死、されハ歴々諸大將我先ニと耳川之渡口迄追詰、此日野頸之陳之逃口ニハ高城之地頭山田新介、地下衆又者足輕少ク召具シ、山中二三里程被追掛、敵山毛・坪屋をさして落行を、山田新助之手へ三百程被討留、太守様惣陣之野頸陽迫原とやらん迄被成打上、御手廻

之軍ハ五万騎程也、申之刻始於陽迫原川田駿河守勝吐氣被作、兼而如御下知、此度者敵依爲打捨、勝吐氣之場ニ揃頭漸二三千程也、去ハ耳川常住處迄爲切捨死骸之躰ハ誠ニ算を乱たる計也、此日茂暮れハ向井三城ニハ不渡、殊ニ大雨降けれハ軍の勞を云、猛勢耳川渡口を限ニ夜を被明、太守様を財部之内城川上三河守所江被成御坐、

十三日、筑後之高良山之座主星野方兩手三百餘、如眞幸表ノ御道遣、扱菱刈ヲ如八代可被差遣談合也、此日右衛門ヲ始宗徒之太將大□耳川ヲ打渡、日知屋・塩見・門河・山茂<sup>(毛也)</sup>・坪屋・田代・表里村迄属御案利、此日坪屋之地下人豊後衆打頼逃來を、式百程打取奉公也、此日兵庫殿耳川陸渡之口を立候ハんを、御手之衆少々被召列候之處ニ、彼渡口近山陰ニ敵二三千程隠而有けるを、独も不残被討取、然ハ豊州南郡衆清田方軍場最前ハ被逃けるにや、三城塩見え之傍迄行けれ共、大勢被押渡間、無吳儀右馬頭殿江致降參候、道之口預御免度由頻ニ懇望なり、難黙故にや被助置、可有其沙汰段被仰聞せ、此日中務少輔殿從耳川先ニ如高城被打歸、此間之御軍勞無比類由各申分けり、此日伊地知勘解由

左衛門・市來備前守三城江爲御使被差遣、并上納之事人質取替、即時ニ番手ニ被差籠、

十四日、從三城掛眞連坊・八木越後守爲使被差遣段、土持方被官前縣之事、大友入道宗麟者、十二日夜務可賀を退有之条、本之地下人迄ニ無主之様、早々御番手被差籠、可目出度由被申入、此日中務少輔ニ財部被成參上、然ハ到今度高城着陣折角之儀、寔夜白被抽戰功之故、無程被開御運、爲彼忠節御感狀、加領地下され被成給、則中務江御寄合、此日兵庫頭殿從耳川表被成參上、

十五日、出合如常、縣邊迄番手ヲ差籠、

十六日、從財部如佐土原御歸鞍也、此日福島之竹下宗悦御礼催下奉捧、此請近衛様并本所之御鞍鐙轡被成給、十七日、於佐土原兵庫頭殿江御寄合、其砌爲御加例吉、市來野之黒月毛兵庫殿江被成給、実儀忝由御礼申也、此日伊地知勘解由左衛門・市來備前守從山城被罷歸、十八日、兵庫頭殿如飯野被成御暇、此日今度<sup>「本マ、」</sup>隔乱ニ三納城江爲差籠番衆、地下之惡心人五拾程六野ニ被討詰、十九日、本田下野守三納城江爲御使被差遣、廿日、廿一日、福昌寺東堂諸塔坊主、今度之御打勝之

御祝儀被申上、此日平田民部左衛門三城江御使也、

廿二日、福昌寺東堂到高城表ニ施餓鬼、財部江被爲越、平田左馬介被成同心、昨日日本田下野守三城より被罷歸、

廿三日、高城於川原ニ、今度豊後衆爲打亡邊、少く死骸を集号豊後塚、僧三百餘ニ而福昌寺大施餓鬼被執行候事、卒都婆ヲ立之吊、此日豊州・北郷殿從三城被成參上、

廿四日、從方々御祝言有之、此日三城伊十院右衛門太夫・上井伊勢守・鎌田源左衛門以同心被參、此日都於郡地頭鎌田出雲守今度高城江着陣之砌、被馳籠たる衆中被召列罷出、於御前ニ各御酒被下、此晚左衛門殿・伊十院右衛門太夫・上井伊勢守寄合、此日福永丹後之嫡子被掛御目ニ、并福永駿河守從野尻如飯田召列候衆中被掛御目ニ、此日野村加賀守自身以伺公御祝雖可申候、今度手負申候間、乍聊尔御近習中迄以使被申上、

廿五日、御歸宅之日取雖相定候、依雨被差延也、

廿六日、已刻從佐土原御歸陳、老中平田左馬介・伊十院右衛門太夫如南合可罷歸之由被申上、上井伊勢守佐土原依番所直ニ滞留也、鹿兒島衆當番所之衆ハ勢州同心也、其外ハ悉御供被申、都於郡衆中途迄御迎ニ被

參、六野原薩摩坂邊迄御供也、從本庄平田狩野介八幡田間迄御迎ニ被參、紙屋之衆中少く瀬を渡迄被參、酉ノ刻末紙屋江被成御着、稻留新助被成御座、

廿七日、巳ノ刻紙屋ヲ被成御立、野尻御迎衆戸崎渡迄被參、野尻衆猿渡之原ヲ御暇被給、從高原之御迎衆追々被參、酉ノ刻前高原江被成御着、内城上原長門守所江御着也、此晚長門守御會尺被申上、川上上野介・大田周防介御座江被參、

廿八日、巳ノ刻高原ヲ被成御立、高原衆堂渡迄御供也、申ノ刻霞嶋坊中江御着也、頓而御在所江御社參、御宮前ノ御規式如常、御下向之刻、香堂ニ御參、即御會尺、此砌敷根越中守嫡子元服、

廿九日、辰ノ刻霞嶋坊中御立被成、曾於郡之御迎衆澤之渡口ハ出會被申、濱之市迄御供也、社家衆留守・桑幡、隈元之渡迄被罷出、濱之市別當所江被成御座、上原右衛門佐御酒持參、酉ノ刻始御出船、御迎船鹿兒島・谷山・向之嶋・大隅地下船、都合三百餘艘、順風ニ帆を上一度ニ走并たる躰、更ニ難述舌端、此夜亥ノ刻始被成御歸館、御船元江意釣齋・村田越前守ヲ始、鹿兒島之老若悉御迎ニ被參也、

「友野甲斐入道奉公覺」

一豊州來高城江陳取申候、龍伯様御張候、宮内八幡へ御參詣候、於宮内ニ龍造寺殿御返事申上候、爲其筋目肥前國より高城江人數立不被成候、此中肥前より爰元使ニ被參候、馬場清左衛門殿云、

『長谷場越前宗純日記』

一天正六年戊寅霜月十日の夜ニ入れ、時雨ふるニも御佳例とて、御大將ニハ義弘様を奉始、右馬頭・川上上野守・上井伊勢守、其外之諸軍來も我眞先ニと進ミ宛財部城ニ打寄て、川上三河守城地頭ニて有りけれハ、伊地知丹後守・酒瀬川奉膳兵衛尉案内者の事成るニ、彼兩人を召出し御尋被成者、境目の委細を被申上、就夫御評定事濟て夜半の天ニ成りけれハ、懸野伏衆を被打出折節ニ、爾も冬吹ハ嚴敷く、時雨ハしのニ降り、世ハみのニ笠をも取りあへず、我もくゝと勇ミける武士の志、たとへん方ハなかりけり、懸りける處ニ、先例之雨ニ猶見ゆ神火有り、是を軍兵再拜し、高城原ニ打上て待野伏をそさせらるゝ、同十一日午の刻の事成るニ、豊後ニ通る番歸り、安中なから往來す、道切を

せさせられ、粉骨致してハ敵卅餘人打取りて、荷物夫駄ニ到迄追付放付、取ノニ各手柄を被成ける、敵方ニ遂戦死人ニは、今井ノ上總守・和佐の何某・有家ノ久兵衛尉・赤野新介・三善ノ左近・小才ノ重仲・邊次ノ何某・毛利ノ式部・土肥何某・千葉ノ何某・須藤兵衛尉・養野何某・問住所、此人ニを始として、三百人の兵物ノ面をふらす防戦し雖碎手柄、此の庭も切崩し、其俣ニ着け入て松山陳を攻落し、あいのかきを取り破り、各致高名宛本望を被遂て、御大將の御邊を指て被參、又先手の軍兵者高城へも被籠、敵四陣より是を見て懸出て戦ふを、籠城より家久者御覽して、ケ程ニ迄志の待をはやく可迎取と被仰出けるとかや、御大將の心中上古も今も相同し、感ぬ人はなかりけり、去程ニ三池屋敷ノ本口を、山田新介・比志嶋紀伊守・鎌田出雲守兵儀を調へ被打出、如何ニも手堅く本口を被持せ、其外之軍兵は我先ニと進出て粉骨をつくしける、此場ニて長谷場弥九郎・福永丹後守籠城をより出合て、致手柄で戦死也、不笠刑部少輔ハ高城へ籠んと懸合て討死す、又於勢泊り者、本田次郎左衛門尉鉄炮受て被死去、比ハ霜月十一日の事成るに、明日とらの一点に

諸軍兵打出て、義宗陳を攻んとて、上下萬人押ならへて勇みをなせる今宵也、扱も志布志衆間瀬田刑部左衛門尉・有川備前守ハ十月廿日ニ戦死也、生て此世ニ有ならバ、ケ程の破陳をみすへきニと、籠城の人々の惜ぬへなかりけり、扱時刻も移り行、城内之軍兵者城戸の口を持堅め、時を待ける處ニ、御大將義久様押ならへて義弘様・左衛門督歳久・右馬頭・圖書頭、彼御人衆を先として、三ヶ國之大小名高城川原ニ被陣取、同霜月十二日辰ノ刻計ニハ、豊州陳衆列出て河原ノ御陳江責懸る、薩广方之一番衆本田因幡守父子三人、嫡男ハ弥五郎、次男ハ三郎五郎也、相つゝ兵ものニ廻三玉防・鮫島與介・朝倉常陸守・平原早人佑、一足不致合戦て戦死也、懸りける處ニ、本田彌五郎・弟の三郎五郎深手負て被退ケ、庄内衆ニ北郷藏人主從五人戦死也、其後祢答院・宮之城に相續きて、うさの地頭平田美濃守・同新三郎・同次郎三郎、既肥衆ニ上原長門守・同太郎五郎・上原勘解由兵衛尉・上原内藏助・奈良原安藝守・宮原越中守、此外之軍兵之五百騎ばかりさし勘へ、手柄ヲ致すといへ共、大勢ニ無勢、既ニ危く見得けるに、敵彌勝ニ乗り、拾萬余騎を二手に分

けて入る処を、時刻は吉と御下知にて、御大將義弘公一按、勝目覺書云、此役出水ノ義虎ハ肥ノロナレハ、彼右ノ堅トシテ急陣シテ、又武藏守・左衛門督年久・右馬頭・圖書頭・河上上野守・北郷モ、大ロハ肥後守ノ擧目ナレハ、出陣御免アリ、往書ト見テ、勝目記是ナルニ一雲・同次郎・薩摩守・喜入彌津守・新納武藏守・伊集院右衛門大夫・同名美作守・新納越後守・伊集院下野守・上井伊勢守・本田下野守・鎌田尾張守・同刑部左衛門尉・肝付彈正忠・穎娃左馬助・根占重武・伊地知重興・比志島式部少輔・河上武藏守・同十郎・税所新介・吉田美作守・本田紀伊守・同与左衛門尉・吉田若狹守・川上・同名備前守・桃山安藝守・吉利下總守・村田右衛門尉・河田駿河守・市來美作守・大寺大炊助・稻留新介・平田新左衛門尉・同名狩野介・新納縫殿助・同名右衛門佑一始民部少輔ト云ニ重慶・猿渡大炊助・鎌田外記・野村兵部少輔・遠矢信濃守・大田治部少輔・伊地知伯耆守・白濱周防守・鮫島土佐守・三原右京亮・木脇若狹守・大野駿河守・高崎大炊助・宮原筑前守・敷根方・菱刈・北原・東郷・入來院・桂常陸守・町田出羽守・同五郎太郎、此外之兵ものも我先と進ミ出て、築之瀬を開渡し、敵猛勢ニ懸合せ、手なミの程を見せんとて真中に切て入り、前後左右ニ太刀打し、手負死人の數ミは敵味方をわかざりき、四方へわつて攻戦ふ

處ニ、御太將義久様を奉始、御供の大勢も吐氣作り、高城河をせき渡し、各高名被致、其中ニ薩摩之住人鹿兒島衆鎌田大膳亮と名乗て、無異儀戦死を被遂、其軍場も切り崩し被成者、太刀風のはげしさへふぶきに木の葉の散る如く、古川の深淵に沈みし敵之者、大將分ニ取ては、竹田の重乗り・同九郎・白伯の乗景・其惣領ニ勝ノ太郎・吉岡・柴田・佐伯乘天、其子ニ是實弟之新介・伯父之掃部助・俣野・東野ノ何某・木槻の勘助・鳥居の何某兄弟也、蒲地ノ何某・上ノ志賀・下ノ志賀・三池皇井の何某・白伯早左衛門尉、彼人々を先として宗徒の侍計也、此外之者共ハ幾千萬共いざ不知、水に血浪の立田河、神と君との告そとて、數萬騎之軍兵も勸喜踊躍を被成ける、去間爰ニ又中務太輔家久者御運を開きましゝて、高城ヲ打出させ給ひ、御供の兵物ハ數千騎ニて堅めたる惣陳ニ懸り相ひ、息を休す攻果し、陳衆も不殘打取て、各々高名を仕り喜事ハ無限、此時ニ比志島紀伊守・鎌田出雲守・山田新助其外之兵物も、籠城之開運 主將之御前ニ罷出て御祝言を言上し、扱又河原表ニて被打洩敗軍衆高城原を逃行を、爰やかしこに追詰て被打果有様は、物之哀を留ニける、

其中ニしつ拂仕る長倉勘解由左衛門尉と聞よりも、今一戦を致さんとて追詰る兵物ハ、曲田伯耆守・梅北宮内左衛門尉・市來軍助・海江田主殿助・野村堅介・右松右馬允をめき叫んで懸たりけり、此由を見聞よりも、長倉ハ返シ合せて名乗る様、ケ程迄追詰の兵物ニ手次の程を見せんとて、爰を再期ニ合戦し、於太刀場曲田伯耆守・市來軍助・海江田主殿助は名譽の戦死を被遂けり、其外之兵物ハ痛手を負て退ぬ、長倉も同敷手負て相引きす、跡も御方勢駈付て、切捨く攻けれハ、高城と美々川の間七里と聞しか、死人の伏たる有様ハ算を亂せる如くなり、同十二日の酉の刻のさかりにハ、耳河ニ懸付て篠陳を被成けり、かくて其夜も雨ふりき、御佳例と聞及ひ、知るも知らんも押なへて、しとゝにぬれてそ居たりける、さて曉天ニ成りければ、家久様を始として、川上上野守・大田治部少輔・伊集院右衛門大夫・平田新左衛門尉、此外之軍兵に到る迄、内手之御下知ニまかせられ、同十三日にも成りしかば、美々河を渡しつゝ、山げ・つぼやの兩城ニ被打入、又余勢ニて日知屋・かと河・塩見・縣の城迄も御手の内とりひしき、土持先忠仕る其恩賞ニ被行、縣一郡拜領す、

是を見る人々ハ忠ニ進無計也、扱日州と豊州の國境目

ニ至而者、梓「山カ」と云へる大山有り、先ハかしこを方尔

ニて御下知を被仰付、御威勢の弥増ハ申計もなかりけり、於爰大敵を討亡し給ふ事御哀ミの余りにや、御吊有へき由被仰出処也、扱社福昌寺の御住ニ代賢大和尚位一千餘人之僧衆を引烈シ給ひて、爲戦亡即身成佛之一念法界の大施餓鬼を被成てハ、一心不生萬緣俱ニ休すとの廻向の法味者、誠ニ草木國土悉皆成佛とそ知られる、見物聽衆ニ到迄、知るも知らんも押なへて尊ミ申計也、御大將義久様の御慈悲を各奉存知、忝なさの余リニハ一入ぬるゝ袂哉と申限りもあらざりき、

1059 『谷口宮内左衛門覚書』

一天正六年戊寅十一月ノ誤カ十二月、日州高城江大友義鎮豊後・豊前

・筑後・筑前四ヶ國之諸勢を催し、數十之陳を付ケ相垣を結責戦ふ也、然処に御舎弟中務太輔家久籠城被成、被及大事之由其聞得有り、大隅薩摩日向三ヶ國之諸勢を催し、十一月カ十二月十二日、數十之陳を切崩し、耳川迄七里之間、六萬余騎被討取候事、

1060

『勝部兵右衛門聞書』

一豊後國之守護大友左金吾藤原義鎮入道宗麟・息子修理太夫義棟、九州の執權柄振威於四征、代々執權の家なれば、就中彼義鎮の代に到て、殊ニ世に蔓り、府内を住城ニシテ、六ヶ國の大名小名相集り、何事も心ニ任といふ事なし、物の盛衰、時の旺慶有浮世の習なれハ、家の傾廢もや來りけん、栄花餘りなる処に、南蠻の黒船流湯して府内に到着す、異流曼と云和尚來り、其方便說法吳他、其上天竺震旦の珍物錦繡紋綺綾羅厚絹の類、數々の吳獸の皮毛氈花氈等を持運て進せられハ、宗麟是に心を写され、改禪宗鬼里下宗と成給、國中輩大凡此宗ニ不成者なし、普代の賢臣ハ是を苦痛て退けハ、鬼里下時嬖者ハ驕り奢て國政を專とすれハ、國の誹謗言之不断、大友第五代出羽守貞親の建立し給ひし萬壽寺も薨下て壞レハて、諸社寺堂も崩廢して冷しかりし有様也、斯ル処にイルマン同國の船薩摩の坊津に着津す、其船を如豊後可被出之由懇望せらると、昔より吳國の着船ハ於其津商賣と云へり、或又天下の命ならハ、不及是非義也とて是を不被許容、南蠻人憤り訴之、俄に宗麟薩摩入を思ひ立る、執事白杵安藝守

・木上筑前守・吉岡入道宗観滅しつ、豊後も程近けれ  
 へ、<sup>「本マ、」</sup>との申けるへ、嶋津・伊東ハ打滅しつ、豊後  
 も程近けれ、定て豊後入すへし、中國に著陳を、若薩  
 广より入と云ハ陣を無由可引也、是本意なるへし、日  
 向の嶋津勢を追拂ん事案の内也、先日向を御知行有て、  
 其後兎も角も御計ひ給へと被申けれへ、散位入道も、  
 日向ハ吾普代相傳の國にて候へへ、君臣の好ミ未忘、  
 大友家の大勢引具して我等罷下ると申さへ、年來の者  
 共定て蜂起申へし、日向の嶋津勢難忍覚候とイハレケ  
 レハ、宗麟も義宗も可有左事也と同意し給へへ、日向  
 入ニそ定りける、廻文を以諸郡へ觸渡さる、志賀入道  
 道喜・戸槻入道道折・高橋入道紹運ハ肥後口の大將た  
 るへし、肥後一國の諸侍此下知可隨、其外ハ日向へ出  
 馬かとそ聞えける、其中ニ肥前の國の龍造寺、數年大  
 友家ニ仕住スといへとも、此高信肥前國を一分に押領  
 す、其故へ、彼先祖ハ賤しかりけれとも、高信依器量、  
 國內ニ三千町を給り、其餘ハ豊後の人と江配分と成、  
 高信下知を以収斂シテ豊州へ相納む、此節もハ大友家  
 の御下知に不隨、其地を國人百姓等ニ取せ、國民も奉  
 レハ一國ニ隨付、貴之事貴家の如旧臣、豊後へも不付、

1061

薩摩へも不屬、独自立シテこそ被居ける、

『全』

一天正六年戊寅十一月三日、豊後の府内を打立、大名小

名心に入も不入も、思ひくゝに馳下ル、大將軍義棟ニ  
 相順へ、舍弟二男田原民部太夫親家、三男同与兵衛尉  
 親盛、侍大將にハ武田入道紹哲・毛利九郎鎮範・毛  
 利左馬助鎮実・田原入道紹仁・富饒左衛門太夫鎮連・  
 蒲地武藏入道宗雪・息民部少鎮並・上蒲地備前守鑑廣  
 ・息六郎鑑光・田尻伯耆守鎮種・同常陸守種家・筑紫  
 上野守弘門・秋月筑前守種実・高橋三郎左衛門尉種春  
 ・草野將監鑑貞・久留目入道林慶・黒木因幡守・星野  
 長門守・溝口大膳亮・田原越前守種純・西牟田刑部之  
 丞・尾山修行良觀・長野三河守・城井下野守・時枝美  
 濃守・野中彈正忠・須美長門守・福島中務少・廣津日  
 向守・宗像大宮司・齊藤弥兵衛尉親利・田北兵部少・  
 奴留湯美作守・小齋下野守鎮仲・毛利式部少元実・今  
 井上總守・三善左近將監・千葉右衛門尉鎮胤・土肥備  
 中守鎮実・御臺太郎惟益・吉岡少鑑物・高崎右近大夫  
 ・速水内膳正・野上彈正忠・匹田源左衛門尉・清田越

前守・冬田三河守・一間田下總守・迫刑部丞・吉松兵庫助・佐和新三郎・有家久兵衛尉・赤野新助・保並刑部少・柴田入道了哲・木槻ノ勘介・俣野兵部少・鳥居万左衛門・三池新左衛門・星野若狹守・朽網入道道益・息平六左衛門鎮光・戸槻源三惟定・緒方彈正左衛門惟清・佐伯入道紹點・息三郎左衛門惟実・同弟新介鑑純・伯父掃部助惟忠・入田入道竜橋・岡ノ志賀入道道益・其子小二郎親宗・同新左衛門親元〔本マ、〕・白根ノ志賀入道道運・白杵ノ家督白杵少輔太郎鎮家・田原入道宗喜・執事志賀入道道喜・宗像掃部助鎮則・本城半太夫鎮方・白杵安藝二郎左衛門鎮直・志賀平次親紹を先として、其勢七万余騎、阿津佐を越る者もあり、高崎より能賀を通り船に乗下るもあり、思ひ／＼に攻下ル由聞えしかハ、日向ノ人々ハ高城ニ馳集る、其時ノ地頭ハ山田新助有信也、中務太輔家久此度大友の大軍攻下ル由聞ふる、薩摩の大事是に過す、見次へき所也とて馳籠給へ者、日向の諸頭宗徒人々籠られける、地頭ニハ吉利下總守季久・比志嶋宮内少有國・伊尻伊賀守・吉田若狹守・阿縣主土持彈正忠綱実、其外日置周防介・松筑前守・二階堂安房介、日向衆ニ福永丹後守・野村堅介

なと有武功者共數十人相籠る、都合三千餘騎とそ記れける、縦大友の猛勢寄來るとも、千騎か一騎ニならんまでハ武力を盡シて持、薩摩大勢をまでやとて、いかにも堅固に持れける、豊後の大勢を今日や明日やと待処ニ、阿縣のムシカラ本城として、津野・野貫に篠陳爲往來ノとて取連、高城ニ近づき寄、同十月十九日、先陳三万余騎を押寄て、總陳・野頸陳・松山陳其外連の小陳にそ着たりける、明廿日卯刻ニ大軍高城へ押寄、時をとつと挙げれハ、天地も響き城も崩れ破るへきにそ覚ける、外垣外垂を引破、下柵を燒拂ひ、本丸計に成ニけり、互ニ敵もみかたも此を専度と防戦程に、澁志の住人間瀬田刑部左衛門・有川備前守・川野助七なと云者、外垂に出て防ぎ戦ひけるか、即討死したりけり、本田二郎左衛門尉・貴島豊助不臆防ぎける処を、打連／＼矢庭に五六人まで射臥られ、皆そこに死にける、其外手負死人多けれと、國中馳集りの事なれハ、假名知れざるところ聞えける、城の内の人々破られしと手を碎き戦へハ、敵ハ手負死人多くして、遂に疲て引退く、高城も外柵を破れて范々と成けれハ、三ノ城戸を限に堅め、各利方矢さまをかまへ、鉄炮數百丁揃

へて待処ニ、亦其日の午の刻計に、新手を替て攻寄る、鉄炮數千挺揃へ打掛れと、矢さき上りに射けるにや、城内の人と手負更ニなし、城中よりハ調へ置たる鉄放ニて、近くと直付て打けれハ、寄手手負死人數不知、城の木戸口より陳の外垂迄三町計、血村を流しあけに染ぬ者ハなし、亦酉刻計ニ三の陳押合て廻り、時を鑿とあけ、城の内ニ打掛ル鉄炮岸ニあたり、竹山林中音霰の降ことくにして、天地も響き動すれとも、城の内ハ其構堅しぬれハ、餘手負更ニなし、敵ハ多く射殺され、臆してヤ有けん、次日ハ寄ル事もなし、慈も競ひ内端往來もあれハ、鎌田出雲守都ノ郡ノ勢二百計相具して高城ニそ馳籠る、城中の競ひ申計なく、同廿二日、川原表を見るに、敵五十丁計打出て薪を取せける、城より出て追散し、川に追入討んとする処ニ、陳中より掛出し、横かけニ掛きらんとしける程ニ、漸々城の内へそ引退たり、其より川原ニ集居て、明る日ハ陳を取堅め、相ノ垣を結廻し、内端の往來を取塞く、日州の者共ハ佐土原・都ノ郡ニ馳集り、薩摩の勢を待たりけり、更ハ豊州の人々、日向を急度可退治にもあらず、漸々としておのつから薩摩の大軍を待付んとする計也、

豊後の人々の躰をきくに、數年治る國なれハ、世挙ルニ隨て好花麗を遊興に身を樂む、軍旅に赴くといへとも其心不花<sup>ツツ</sup>られ、夜白酒宴ニ沈醉し、武勇の道を忘却して鼓太鼓乱舞にて榮花に誇ル風情也、斯ル処に樽一荷菓子<sup>ツツ</sup>の臺を持たせて、豊州の住人志賀勘六と申者ニ而候、昔より諸侯の國を諍に、是を頼む武士の弓箭を取ハ習也、互に死生定りなし、敵と成人とても何か恨の候へし、御大將に籠城の御窮屈を奉問と云て、是をそ送ける、次之日返礼せんとし玉ふ折節、高城の地下人に永利助七と云者、高城川に釣を流しけるに、大鱸を數多釣上て、中務ニ奉之、寄特成仕合とて、彼鱸一掛ニ樽一荷持せて、中務の侍に上野半介・妹尾仁介陳ニ望て申けるハ、昨日御返禮申さんとて、城内より使二人罷出て候といへ者、亦陳中ハ出合て返酒を受取、陳と城との其間ニて酒を取出て、使の人ノに酒を進む、妹尾仁介ハ乱舞を得たる者なれハ、金さやまきの大脇刀を弓手の脇ニ押廻シ、茜の胴服ニ金の扇を抜開き、謠をあけて舞たりける、陣中よりもあはれ舞たるやとそ誉たりけり、中務大輔殿も御感有とそ聞えける、然処に川原陳より敵小勢出て、慈を偽引躰ニ見へける、

此方よりも出合、互ニ矢軍しける処に、敵會釈し防きはせて、薩广衆に物申さん、今日此日の番の者にて候か、矢誌を進せんといひもあへず、能引て射たりける、取て見れハ、文を書、矢に押巻ハリ付てそ射送りける、是を大將に奉見せ、其状云、

今度、任豊州催促不慮ニ罷下候、近年大友之行跡蔑待虐民暴政之到、旁以胸底ニ雖含鬱憤、独叛之力不足、徒ニ待時而已、傳吾等属從二百余人奉憑、萬ッ必ハ得時拔忠節者也、誠惶謹言、又自然事のあらん時ハ、笛の音とりを吹申へし、

とそ書にける、筑後國の住人星野長門守・川原山執行良觀とそ書たりけり、先吉左右也、目出たしとて、大隅薩广の勢を待処ニ、大將軍ニ修理太夫義久・兵庫頭忠平・左衛門太夫歳久・從弟右馬頭以久・圖書頭忠長、一家ニ豊後守親久・北郷入道一雲・樺山安藝守範久・佐多山城守忠孝・新納近江守忠武・川上上野守久隅・大野治部太夫・寺山四郎左衛門尉・桂常陸守、一郡一庄其外地頭職の人々ニハ、穎娃左馬介久虎・種子島左近大夫時高・祢寢右近太夫重武・伊地知民部太夫重興・東郷弥左衛門尉重尚・那答院二郎能重・入来院彈

正忠重豊・肝属三郎兼則・加治木の肝付彈正忠兼連・菱刈民部太夫頼清・本田紀伊守親廣・同大炊太夫親重・敷根中務丞頼繼・上井伊勢兼長・比志嶋式部少國季・川田駿河守義朗・伊集院下野守・同右衛門兵衛尉・同名三河守・同名源助・鎌田筑前守・同又七郎・新納伊勢入道一慶・同右衛門尉・比志嶋美濃守・河上備前守・同名左近將監・大田治部少・大寺越前入道休角・同大炊助・新納十郎左衛門尉・河上美河守・市來備前守・伊地知備後守・宮原筑前守・鮫島土佐守・同又左衛門尉・猿渡大炊助・新納縫殿助・税所新助・吉田美作守・伊地知伯耆守・同又八・町田出羽守・本田下野守・鎌田尾張守・同刑部左衛門尉、執事ニ本田美濃守・村田越前守・喜入攝津守・伊集院右衛門太夫忠棟を先として、其外地頭職を欺くほとんどの勇士七百餘騎、義久打立玉ふといへハ、民以下ニいたるまで、心有者ハ必、催促なけれ共いさミ聚り、三ヶ國の軍兵我不劣と馳連るほとに、國內の事なれハ、日向ニ馳集て、佐土原・都の郡・富田・財部ニ合て、都合其勢五六萬騎ニハ不過とそ申ける、山村田島を不嫌陳屋を打程ニ、四五ヶ國の勢にも不劣とそ見えニけり、出水の義虎ハ肥

ノ口なれハ、彼の口の堅として參陳し給ハす、大口ハ新納武藏守、肥後求摩の境目なれハ、出陳御免あり、住番とそ聞えける、去程義久佐土原ニ着玉ひたる其夜、不思議夢想あり、何処イッやら大ひなる宮殿の艶なる、其內衣冠正き人の御座ニ義久祗候し玉へハ、左の方ニ請して其人の云く、立田の川の紅葉也と詠して、義久句し給へと宣ると、夢打覺、不思議の瑞相哉と思召に、五文字なかりけり、義久聽てよミ給ふ、打敵ハ立田の川の紅葉也と申、七字になし給ふ、河田駿河守を召、奇特成瑞相也とて、自ら願書をなして、國の宗廟・氏神・諸軍神ニ能祈誓申へしとて、兵法の檀ニそ籠給ふ、此由を忠衡・歳久一門の人々ニ使して宣ひけれハ、誠に慈の勝無疑とそ喜ひける、去て隅薩兩國の勢着合たれ共、敵も慈も大軍なれハ、其時刻の宜しからん事をそ候ける、高城の無往來も無心元そ思ひける、されとも若き足輕共、我不劣と山潛を心かけ、或山を忍ぶも有、河を忍もあり、又ハ敵ニ打交り紛れ通らんとするもあり、無縁者ハ打殺され、或川ニ追入れ、道具を捨て命計助ルモあり、爰ニ鹿兒島の住人否笠刑部少、足輕數多友なひて高城ニ籠られける、義久聞召、此山

潛りたる事、我と自ら進む事ニも通得る者ハまれなり、人の損ん事ハ治定なりとて、被仰付事もなし、されとも通得る者御内ニ六人、兵庫頭の内ニ二人、中務太輔内ニ四人通得て、内端の事を通しけり、自夫可有勢分とて、鎌田尾張守・新納伊勢入道・伊集院右衛門兵衛・川上參河守・上原長門守・伊集院美作守・奈良原狩野介、此等の人と承り、所賦分の其勢、先根白口へハ兵庫頭・右馬頭の手ニ二万餘騎、中河口へハ左衛門大夫・圖書頭の手ニ一萬五千餘騎、麻松の川原口ニハ北郷入道一雲の手ニ七千餘騎、其外打入一萬餘騎ハ義久の陳をそ守護しける、兎角して時刻を移しける程ニ、十一月月上旬に、武功有者とも二三十人寄集、物詣ニ事よせて、久峯の觀音堂に出會ひ、小陳士卒を談合す、心かけたる若者共聞付ノ寄ル程ニ、六七百人ニ成ニけり、何と是ほとにおもひきりたらん勢にて、一手立せさらんや、其手立の様ハ二三人も川原の陳ニ忍入、尾山の法印星野ニ取合談合して、此六七百人ノ者共川縁の山ニ付て忍寄、逢火逢を約して内より城戸を開き、内外取合、寅の刻計ニ同士合ひの誌へして、白八卷ニ小幡腰幣取付て向ひ、忍入ニ切入て、敵評儀もせ

さる其内ニ、此や彼ニて打取り追拂ひ、假引破り高城に取合ハ、定て慈方の大軍馳續くへし、川原の陳を燒拂ひ、纏て根白坂ニ引挙り、向陳を取、陳士を出、敵の通路を掛切ハ、慈ハ強く敵ハ弱り、夜崩して引へきか、左なくハ降を乞て和談するか、別の事ハ候まし、御家ハ目出度成へしと評定一決して、伊地知伯耆守を以て申上けれハ、義久年來の者共なれハ、御家をおもひ身をかるんす、されとも仕損す事もやあると思召、暫返事し煩ひ玉ひしか、手立の様を具ニ聞召て、能武略仕へしとゆるされける、自夫今日よ明日よとする処ニ、兵庫頭始として、右馬頭・圖書頭・川上上野守・肝付彈正・伊集院右衛門兵衛・上井伊勢守・鎌田刑部左衛門尉・新納刑部太輔・上原長門守・伊十院美作守・奈良原狩野介など、地頭ハ川上參河守高城へ打寄て、武功有者共なれハ、伊地知丹後・逆瀬川奉膳兵衛・富山備中、其邊の案内能存知たれハ召出し、境目の様躰委く相尋、兵儀有て伏兵を企ル、十一月十日の夜に入けれハ、雨少止もなく降ニけり、時雨けるをも御佳例とて、夜半ニこそ打出らる、しかも冬吹烈して難忍折節なれば、勇ミける八方と照しけり、是を見る者伏拜

ミ、我も／＼と勇ミけり、去程ニ奈貢と陳の間に伏へし、路次近き所なれハ大勢ハ難成とて、百四五騎忍ハせて、受の大將ニ肝付彈正忠・新納刑部太輔・伊集院右衛門兵衛尉二千餘騎、別府村ニ臥居たり、懸手司ハ逆瀬川奉膳兵衛・富山備中・伊地知丹後守以上三百計ニて待ける処ニ、同十一日の午の刻計ニ、豊後ニ通る番歸り、案内ニして通りける、馬上三人、上下三百計通りを中ニ取籠、吐と時を作り懸けれハ、一人ハ馬ハやニ逃延たり、馬上二人以上七十三人討取て、雜駄物を追落し、慈競を成ニけり、敵陳よりは是を見て猛勢馳つゝ程に、無勢ニてハ難仕師なれ共、力なく請留て一戦せんと勇む処に、其夜高城ニ山潜を遣し内通有けれハ、家久日出ニ櫓ニ上り見給ひて、如何様内端ニ子細あり、敵ハ大勢野頸ニつゝ、時の聲をあげ陳ニ掛る風情せよと仰けれハ、城中も打出て、時を作る其風情しけれハ、敵續き戻り高城へ押寄んとす、三池屋敷の本口にて、山田新介・比志島宮内少輔・鎌田出雲守下知を成て防ける、其外の軍兵我も／＼と粉骨を勵しける間、漸く敵も退ニける、其場ニ福永丹後守・長谷場弥九郎打死す、引ける敵の間ハ成を、陳の外垂

まで追入ける、敵數百丁の鉄放を揃へて打掛くる、其より引退ける程ニ、鎌田出雲守・日置越後介能鎧を着、能馬ニ乗たれハ、あつはれ大將と見てのかさしと討程ニ、色々會釈して城の中へそ引入ける、手負も少く有けれど、慈の勝利なれハ事ともせず、野頸の仕合如何と思ふ処ニ、松山陳より豊州の宗徒の人々ニハ、今井上總守・毛利式部少輔・土肥備中守・赤野新介・三善左近將監・保並刑部少輔・小齋下野守・有家久兵衛尉・佐和新三郎・千葉右衛門尉を大將として、千騎計馳出、不臆こそかゝりけり、伏兵勢受留て戦せんとする処ニ、根白口・財部口の慈の勢高城田間ニ万々と打出、高城よりも出合へハ、慈はニ力を得、相掛りにかゝりて散々に攻戦、豊州の人々も不振戦へと、此場をも切崩し、其競ひに着入ニ追入、間の垣に敵大勢居ける、慈も猛勢也けれハ、追捲り追拂ひ、間の垣を引破り、番屋物見を壊かけ焼拂、高城ニ取合ひて、颯と引いて根白より川縁下りそ備へたり、各軍芳申計なかりけり、従夫中書へ御喜參者由々敷こそ見へニける、敵陳より是を見て懸りけれと、互ニ相討れてさせる事もなし、其日も酉の刻ニ成けれハ、備をかへ川を前に

當て、根白々川縁下り、靡松の河下まで六萬余騎、九備へに備へたり、其夜ハ轉々に篝火を焼けれハ、晴たる空の秋の夜の星の光を見ることく、焱々そ見へニける、總陳口・河原口其往々の通路に五百人三百人の外陳士出し、用心稠くせせられける、去程ニ高城より川原の陳の尾山の法印へ、前の約束如何ニと仰せけれハ、大ニ喜、馳て使ニ打列てそ參られける、夜中の事なれハ、焼拂ひたる下柵ニ柴屋して、疊二三帖敷並てそ是に入、五十人の番を付、篝火を焼てそ置れける、然処ニ陳大將白杵少輔太郎・佐伯新介・田原入道紹仁の城麓ニ來り、大友の執事ともニ談合仕り、明日より矢を留、御陳へ參り和平の調法いたすへし、路口をあけて給り度候とそ申ける、山田新介承り、無事の調法と被仰出、可然事共也、當城の下知を申こそ幸也、乍去境目の外陳士を勢々出候へハ、案内ハ存たり、津野・奈貫迄も行廻と承る御心底の程如何ニ存候へ共、和談をいたすよりしては城麓を通し進らせ、薩摩陳の坂口迄案内付申さん、但多人數ハ叶ましと、上下十六人城麓にそ參ける、暫案内者共の仕合する其間、星野長門守の所ニそ請し置、野村堅助伊東滅亡、其後ハ傍輩共を

郎等ニ引列けるか、四五十人計リニテ高城に籠たり、伊東滅し根元を豊州之人ニ聞傳る事なれば、陳中よりの言闘に、義無し堅物未堅固ニ有けるが、義理無しの堅介と口々に呼びけるを無念ニや思ひけん、其夜銀杏の立物の甲を臺ニ受させて、花鮮なる鎧に袖引付て、籠手楓楯まで仕合、三尺余の金鞆・二尺計の張鞆一腰揃へて帯まゝに、武者杖をつき、郎等十余人引くし、豊後の使の其坐ニ出、腰ニ草摺ゆりかけ動と居て、此ほと御陳方も呼れし、義理なしの堅介と申者ニテ、御覚有へきとそ申ける、使者時の會釈ニ申ける、堅介殿ハさすかの武士と承及候ニ、掛御目こそ幸也とそ申ける、堅介方々御免候へ、明日ハ必戰場ニテ申承んといふまゝに卓立けれハ、物々敷見へてける、やかて案内者出けれハ、陳へ送り坂口より引歸す、引陳ニ成、そして夜を待明す処ニ、謀なれハ、左ハ無て津野・奈貫の勢まで陳へくり入、七万余騎を二手ニ分、雜兵少く打取て二番備をも切崩ス、此を堅たる鉄肥地頭本田因幡守・鹿兒島住人廻三玉坊、相續ク兵ニハ朝倉常陸守・鮫島與介・平原隼人佐・北郷一雲郎等ニ三侯の地頭北郷藏人、一足も不退戦ひしか、即其ニ討れたり、因幡守

か子ニ本田刑部丞・弟の三郎五郎痛手負、郎等共ニ漸く助退られける、敵ハ競ひ薩摩勢を捲り立、高城川の中の瀬迄攻渡す、慈に平田美濃守・同新三郎・同次郎三郎・上原長門守・同太郎五郎・同名勘解由左衛門・同名藏介・奈良原狩野介・宮原越中守、其外軍兵五百騎計差忍防ぎ戦といへとも、無勢なれば危く見ゆる処ニ、義久の御勢左衛門大夫・圖書頭の手勢、以上三萬騎築瀬を閑渡し散々ニ攻戦ふ、北郷一雲川下より坂口上り、一万騎にて切て入、兵庫頭・右馬頭の其勢武萬餘騎横合、面も不振切て入、前後左右ニ付當り、四方八方に戦へハ、今迄勝ニ乗たる豊後勢、靡泥(マドロ)と崩行く、慈の勢土氣を動と作りかけ、高城川を閑わたり立立く戦へハ、半ハ衣張を敗軍す、半ハ高城田間の北の方ニ、ふかき一二丈も有ける淵ヌたる古川ニ輪々マと追籠ハ、人か人ニ弥重て淵も平地と成ニけり、下成者ハ水ニ溺れ踏殺さる、上成者ハ同士具足ニ貫、一村ニ追入て兎や角とする処を、或弓鉄炮ニテ射殺シ、或月劔鎌ニテ引寄て頸を取者もあり、誠ニ冥官阿鼻地獄の消息も斯こそあらんとおもへる計也、されとも先きの戦ニ、鹿兒島の住人ニ鎌田大膳亮と名乗て戦死比類な

かりけり、中務太輔家久ハ高城勢を相具して、總陳へ切て掛り、此陳をも即追崩し、薩摩の慈勢ニ取合ひ、競を出て打洩されたる豊後勢、高城原を落行を此や彼に追詰て、五十騎三十騎五騎十騎目次ニこそ討れける、靡立たる勢なれハ、大軍一同ニ取返へき様もなし、適々返んとするも、各々ニ蹈んとすれとも、負軍の習ニや、臆病風の立けれハ、豊後の盛なりし時ハ鬼神之様ニいわれし者共、無介うたるゝ者のミなり、斯ける処ニ、豊後普代の大名武田入道紹哲・息の九郎鎮範・柴田入道了哲・吉岡堅物・鳥居万左衛門尉・同弟隼人佐・木槻勘介・星井若狭介・保野兵部少・赤野新介・臼杵少輔太郎鎮家・同左京亮則景・同早左衛門尉・佐伯入道紹點・息三郎左衛門尉維実・同弟新介鑑純・同伯父掃部介維忠、筑後の住人柳川の主蒲地入道宗雪を先として、其勢以上三百余人究竟の者共、大膺貫ニハだぬきて、道具も不残指刀抜持て、曳や聲にて一向ニ不振面切てかゝる、奈貫の原にて差忍へ、梅北宮内左衛門・市來軍介・海江田主殿助・曲田伯耆守・野村堅介・右松右馬丞などを先として各戦といへとも、思ひ切たる敵なれハ、慈の勢をまくり立て追崩す、市來軍介

・曲田伯耆守・海江田主殿、佐土原ニ大山何某、戰場を一足不去して太刀下討れぬ、されとも豊後方ハ敗軍也、薩摩競ひ成けれハ、返合ハ大勢馳重て戦程に、十余人を大將以下皆悉く打死す、此十余人の人々ハ、此度日向下り心ニ不入思ひけれ共、催促迄ニ下り、實ハの時ハ爲君の家恥と思へハ、皆返合て打死する、臣として忠を遂る侍共、義理成哉とそ申ける、此比執權成し鬼里下とも、よく馬ニハ乗たり、足ニ任て逃延掛、むしかより舟ニ乗もあり、梓佐をさして落行もあり、田原紹忍ハ夢の告もや有けるか、陳ニ掛らす後に引へて在けるか、早く山ニそ入てける、十余人の人々討れしよりハ、立歸んとする者もなく、暴風ニ伸伏草村ア、唯一方ニ落行を、五十人十人隙もなくつゝひて討れけれハ、本道ハならずして、野方ニ付山ニ登る者共、百騎二百騎、或五六十騎村々に退けれとも、敵も慈も疲果、山ニ向て追んと思ふ者ハなし、心易きニまかせつゝ、平地を目次に討にけり、さすか慈も大軍也、高城より三分ニシテ二ツハ生シト申ケル、既ニ其日モ西ノ刻ニナリケレハ、美々の常任坊ヨリ津野ノ原中ヲ、堅横ニ隅薩ノ軍勢篠陳ヲ取タレハ、積地モナクソ見へ

ニケル、其夜各陣取て、人々ノ有サマ手負ヲ加病するもアリ、打死スル假屋ニハ憂ヲ含ムモアリ、或手柄ノ程ヲワメヒテカタル者モアリ、資財雜具ヲ拾得テ喜合者モアリ、人ノ禍福ノ無定コソ面白ケレ、夫ヨリ若キ者共、兩ハ頻ニ降ケレ共、求舟川ヲ渡シ、退タル迹ニ打入見レハ、兵糧故実酒肴皆打捨テ置にけり、幸也、此ほと之窮屈伸とて、何ニソソル、コトモナク、酒宴してこそワメキケル、是を聞付／＼ワタル程ニ、夜中ニ四五百人モ涉シケル、御下知ハナケレトモ、楚忽成者共カ、虫賀ニ逃集タル者討んとて、六里の間其朝間ニ馳行見レハ、虫賀ハ舟津ナレハ、人一人もなし、皆阿津佐のごとく落行ケリ、大友大陣ヲ思ヒ立コトナレハ、兵糧倉若干造置ケルヲ、先掛シタル三十人者共押領シて、徳に付てそ居タリケル、後陣ノ者共兵糧ヲ乞ケレトモ不取セ、皆人独取ス、弓箭同慾カマニル悪キ奴原カナト云ケルカ、如何成者カシタリケン、比ハ十一月ノコトナルニ北風強ク吹タリ、丑ノ刻計ニ風雨ニ火ヲ放チタリケレハ、兵糧資財盡ク煙と成、一時ニ馬場小路マテ燒塞ク、漸々身計遁出、後ニハ吐と笑テ打烈テソ退キニケル、其日大將宗徒ノ人々皆耳川ヲ打渡

シ、日知屋・角川・塩見掛ニ打入、山家・坪屋の兩城まで召取テ掛レハ、本領ナレハ、土持彈正忠ニ遣ハサル、去程ニ中務太輔家久、其翌日高城ニ打歸り、此度大軍ニ打勝籠城ノ運ヲ開キ、御内方ノ人々皆召出し、軍勞ノ一禮宣ラレ、次日ハ佐土原ニコソ着玉フ、由々シサ申計ナシ、釈迦堂ノ前ヨリ馬に下り、義久御館へ参り御悅を申、宿所へ歸り玉へハ、御悅ニ参る者上下〔本、一〕キ□ル也、其次日ハ太守ノ館へ各參會有て、御三獻過、碗飯の饌へ着座の人々ニハ、兵庫頭忠衡・左衛門太夫歳久・中務太輔家久・右馬頭幸久・圖書頭忠長・豊後守久廣・北郷入道一雲、末坐伊集院右衛門太夫・平田美濃守・村田越前守・喜入攝津守・鎌田尾張守、其外宗徒の人々皆參會して、酒盃數巡たれば、殆歌舞にそ及ける、曰ニ御通になりけれハ、家久根限に折下り、此度籠城の人々を召出す、山田新介・鎌田尾張守サシ寄、御禮ノ由一々ニ伸ラル、伊集院九郎酌ニ立テ酒ヲソ進ケル、其次ニ中書、此度山潛一人參候へハ、内端の躰をも承り、城中千騎ノ競ヲ成、彼ハトモ抛身命、其心掛莫太ノ勲力ニ候と申玉へハ、其者共御タ、シ有へシトテ召出サル、一番ニ平田豊前介、其ヨリ續テ出

ケルニ、椶木<sup>サウキ</sup>隼人佐・有馬主馬首・勝部弥二郎・堀内大圓坊、兵庫頭之内に和田圓覚坊、中務太輔之内矢上彈正忠・田中筑前介・永山大炊左衛門尉・長野金兵衛尉、御末に罷出取面目てそ入りけり、義久陳中より鉄炮責へいかにと仰けれハ、山岸にあたる音ハ雨の降ること候へ共、城中の者共其覚悟堅く仕り候へハ、慈ニ餘り手負も候はず、只野頸の近陳に右松平太助と申者、大鉄炮を城の眞中ニためらひ構へ置候程ニ、いかなる業か仕らんと存候処、其日も不打、次日も不打、敵も慈も靜なる折節、未ノ刻計ニ動と打たれハ、大地振ひ動、櫓の構を打崩し、倉の梁口打折て、圍の外廻なる大榎ニそ打留候、其より亦共不仕候と申玉へハ、仕候の人々あやまちなきニそ御仕合なれと、吐と動し申さるゝ、其時日新入道が相傳し玉ひたる鎌倉行光の二尺六寸赤銅作り目貫竿、後藤か作とて頭巾袈裟を物の見事ニ彫りたるを、中書へ是を引給ふ、中書面目施て御腰物を押戴き居直、纏て帯キ給ふ、暫して御兄弟御一門の人々各宿所ニ歸り玉ひける、去程ニ隅薩の軍兵佐土原・都の郡ニ群集して、箕納の城ハ伊地知民部太輔ニ被仰付之処ニ、豊後の大軍下ル由ヲ聞て、競を

取て其邊を發向し、城ニ引籠て高城の様ヲ見、都の郡へ打出んとまつ処ニ、思ひの外豊州勢打負たれハ、妻子などを退へき様モナシ、誠ニ思案餘リナル、佐土原ヨリ今日寄ル、明日攻ルナト云へハ、今日モくど心迫て見へニける、依之評定有ケルハ、城ヲセムルハ定メテ人ヲ損スヘシ、是程の仕合ニ左様之義不可然、只絡入謀ヲ以テ可退治トテ、鎌田尾張守・同出雲守・上原長門守、都於之郡石ノ下城の使シタル僧、石城の佳例トテ呼出、箕納ノ使ヲ被仰付、二度の奉公能申調ふ者ナラハ、内山ノ寺ヲ本領本ノ如ク相付有ヘシトノ仰ラル、其意趣ハ、各豊州へ與力テ薩摩へ怨ヲ成楯籠ラレ候へ共、義久天運宜武將ナレハ、大軍ニ打勝テ國民までも安堵せり、各楯籠レタルト云トモ、近國ニ與力スヘキ者ナシ、遂ニハ徒ト成ヘシ、其上三ヶ國ノ兵、賊ノ与黨數千騎ノ者トモ歸陣スヘキトセシカトモ、箕納ノコトヲ聞テ未歸、野狼シテ資財雜具ヲ捨んとていさミ敢ル、箕納滅却只今の事ニ候欤と、此度豊州退治ニ付ても人數ならねとも、御評定ノ末坐ニ連て謀ヲイタシ、人ヲ亡し多ノ罪ヲ作、箕納ノ人ヲ助ケ、是ニ報謝スヘシトヲモイ、愚拙等ニ一人和平の調法是非トモ

ニ相望候、又各ノ謀叛本意ナシトハ不存、野村・福永カ謀叛ニハ吳也、爲君ノ憤伊東殿を一度日向へ奉入とおもふ志、臣としてハ忠タリ、世話ニイヘル、毒藥變シテ良藥ト成ト云へハ、其惡心ヲ翻シ薩摩ニ參ル者ナラハ、何ソ別儀アラン、惡ニ強キハ善ニモ強シ、敵ニ強キハ慈ニモ如此ナレハ、賴敷こそ候へ、箕納の人々ハ内山ニ移シカヘシト、僧ニ能云含てソ遣ハサル、使僧即チ箕納へ行キ、和平ノ調法と申ケレハ、上下馳集テ其意趣ヲ聞んとす、弁口明なる僧にて、三人ノ意趣ニ差副テ、実之やうに有くとそ申ける、箕納の人々聞之喜合、おもひ／＼ニ引手物なとして、或ハ稚子ワレシヤキ共持たる者ハ弟子に進らず、去て地下の者共、豊州より一人の本人有と披露ス、使僧聞之て、無下城内ニ其男ニ目な放シ、落行ハ打取て己レ達の忠にせよ、と云含テソ歸リケル、箕納ノ者共忝キ御陵の通ニ、人質の沙汰ハ不似合とて、三人使僧ニ打列て佐土原ニコソ參ケル、即チ參上神妙ナリ、暫御用有トテ召留ラル、上下五六十人箕納へ打入、豊後の本人ヲ討んとシケレトモ、亦地下ニモ心置ノ者アレハ、其仕合ヲ伺ヒケレハ、三日迄ソ相延たり、義久御氣色悪クシテ、東郷与介・

友野左近將監ヲ承テ參ルヘシトテツカハサル、討ての人々、彼レ此コ彼コニテ仕合ヲ伺ひける程ニ、其色ヲ覺て抜開キテ切テ廻ル、與介相打ニ丁ト切レハ、与介痛手ヲ負ひニケリ、討手の人々鐘を以て突伏、即頸ヲソ取ニケル、左近將監即佐土原へ參リ、箕納の躰委く申ける、箕納ハ以上三百人ニ及候へハ、輕々數候ハす、仍三日相延申也、其方人を以足浮て候へ共、やう／＼に相治りたりと申けれハ、尤さる事有へし、皆々辛勞神妙也トソ仰ラル、与介驕て參りたれハ、手柄仕タリトテ、御腰物ヲ拜領シテ、手負タレハ薩广ノ如ク歸リケル、自夫評議有ケルハ、野心ノ者ノ向後ノ戒也、是ヲ打果サルヘシトテ、内山ノ鎌田尾張守ニ會テ屋敷ヲ取、早速住所替仕ヘシト有ケレハ、聞之喜ヒ、狼籍人ニ恐テ案内者ヲ請ひ、一同ニ内山ノ如ク行處を、六野原ニ千騎計相伏テ眞中ニ取込、八十六人打果シ、漏行者ヲ方々ニ追詰テ打取り、箕納ノ城ヲモ心ヤスク退治シ玉フ、亦此夏ノ陳中ニ内端ニ立火ヲシ、慈ヲトヤシタルモノ河北・河南ヲ礼成敗セラレ、前ヨリ地頭在所ハ其ノコトク、無キ所ニハ地頭職ヲ定テ日向ヲ治玉フ也、去程ニニヶ國ノ若者トモ競ニ追付豊後へ入タラハ、

何ノ子細モ有マシ、輒ク御利運有ヘシト勇ミ敢ル、仍テ御評定有ケル、有効之者トモノ申ケルハ、此度大軍ニ打勝玉フコト是ニ過タル喜ひなし、善ヲ見テハ、又悪ノアランコトヲヲモヘト候ヘハ、天道モ如何ニ存候、先此度ハ國の軍兵共の勞レヲモ休、重而御出陳有ヘシ、他國ノ覺モ目出度折節、先々御歸陳可然もや候と老臣申シケレハ、大將モ尤ト同意シ、御歸陳ニソ定リケル、御歸陳トテ義久打立玉ヘハ、日向ノ人々ハ六野原を暇たび、宿所有に歸リケリ、大名小名御供ニテ、其日ハ竹原ニ着玉ふ、北郷入道一雲ハ中途ヨリ暇給、庄内八の外城の者共ヲ引具して、宍キつれて歸らるゝ、其ヨリ諸懸・肝付・根占・大隅・竹原を近方ナレハ、眞幸・菱刈・牛屎ノ人々暇給り、其翌日ハ霧島ニ御參、座主の坊ニ御着、御祈誓の結願、法印快督へ被仰置、馳て御立、大隅正八幡宮へ立願御成就を留主・桑幡ニ仰付られ、濱の市ニ御出あり、大隅・曾於郡・桑原の人々暇給りけれ共、いまた大軍ナレハ、加治木・帖佐ノ陸地ヲ經て白かね坂ヲ上ルモアリ、船ニテ海上ヲ渡ルモアリ、我先ニト喜ひつれて歸ル程に、義久朝臣鹿兒島ノ御館ニソ着玉フ、其ヨリ薩戸・入來・那答院・日

置・伊作南方の人々皆々暇給にけり、去程ニ鹿兒島着御ナレハ、及モ不及モ御悅ひヲ申サン者ハナカリケリ、次日ハ御祝言ノ言延とて、伊集院右衛門大夫・喜入攝津守・平田美濃守・村田越前守・町田出羽守・本田下野守・河田駿河守・鎌田刑部左衛門・吉田美作守・伊地知伯耆守ナト參上して、御三献ノ後、美膳の饌御酒宴始りけれハ、近習外様の侍、下之間御末ニ并居たり、其比都の藝者ニ澁谷大夫か子千夜又とて、年のほと十四五歳ニ成ける器量少童有り、義久より金鞆卷のだから脇さしを拜領し、御前ニテ押戴き下ノ間ニ下リ、己か刀ヲ後サマニ投捨、給りたる御脇サシヲ其ヲ直ニさし、御前ニ參り御酒ヲ奉獻、金の扇ヲ抜開キ御前ヲ舞下リタルヲ見テ、都者とハイヒナガラ、仕合結功サヨト申さぬ人ハなかりけり、去程ニ三州の大名小名寺家社家等ニイタルマテ鹿兒島ニ群集シテ、御家の繁昌弓箭ノ面目ト祝言ヌ者ヘナシ、去テ亦筑後ノ住人尾山法印・星野長門守薩摩の如ク具給ひ、出水の義虎へ送玉ヘハ、もてなし奔走して、舟傳へして筑後へこそ入ける云々、

一 豊州衆高城へ陳取候、河原之陳崩之時、武庫様御横入被成候御手ニ付軍仕候、同心竹内主殿介殿・伊地知刑部少輔殿、其日分捕二人仕候、義久様御前より辛勞申候通、御言相懸候、面目取申候事、

## 『大村重頼古戦記』

一 大友殿が被仰候へ、今一度伊東殿ヲ日向へ入可申由候て、十一月、四ヶ國ノ諸勢八万余、義様・中務太輔殿高城江御籠城被遣候、其時之地頭山田新助殿也、義久様・兵庫頭殿・左衛門督殿、其外右馬頭殿・出水ノ義虎・豊後守殿・大野殿・吉利下總守殿・喜入殿・枕山兵部太輔殿・北郷讃岐守殿・新納江州・佐多殿・圖書殿、合御兄弟衆・御一門衆拾三人、外ニ一所衆、入来院殿・根占七郎殿・頼娃左馬助殿・肝付三郎殿・同名彈正忠殿・菱刈伴右衛門殿・種子島左近將監殿・伊地知縫殿助殿合八人、三ヶ國之諸地頭七十五人、又内之地頭衆五十七人、此外諸軍兵惣合八萬弐千有余、旗先ヲ揃我もくと大友之陳へ、十一月十二日ニ相掛られ、被切崩、豊後境あつさ山迄追打、切捨之者數不知、左候而、太平之御吐氣御坐候事、

但高城之衆利運ニて、美々川迄七リ之間、六万余衆被打取候事、

豊前衆・筑後・筑前衆・秋月殿・星野殿・赤星殿事ハ、大友殿之旗下ニて加勢被仕候而、日向高城へ被相立候、被及一戰候處ニ、秋月殿・赤星殿・星野殿事ハ、前かと被申入ニ付、御取分命ヲ助け、本國へ送届被遣候事、

## 『日向記』

一 島津方、豊後ノ大軍成夏ヲ聞テ、【天正六年】同十一月、島津義久頓テ佐土原へ入陣シ玉へハ、兵庫頭忠平・右馬頭行久、大隅・薩廣ノ勢ヲ卒し、都於郡・財部ニ打入評証有、豊後ノ多勢ニ島津ノ勢ヲタトヲレハ、蠟蜋カ斧ヲ以龍車ニ向フカ如也、世ノ常ノ戰ニテハ勝利ヲ得コト有マシトテ、霜月十日、先野付ノ原ノ往來ニ野伏ヲ懸ハ、定テ豊後ノ惣陣ヨリモ人數ヲ可出、其時敵ノ多少、懸引ノ位ヲ見計テ、味方ノ軍位ヲモ積ルヘシト、同十一日野伏ヲ出シ、豊後ノ往來ヲ懸散シ、數十人殺害シ、財部ノ如引取、大友方松原陣衆是ヲ見テ、イサミ切トテ吾モノくと打出ル、薩方方ニハ兼テ計シ夏ナレハ、シトロニ成テ逃散シケル、豊後勢弥勝ニ乗テ追掛ル、思

フ所ニ釣籠ラレ、無詮方命ヲ限ニ相戦名ヲ得シ士、今  
 井下總守・和田民部少輔・鳥居・阿賀新助・野中大膳  
 亮・日出刑部少輔・同注所(マ)ヲ始テ五十人余討死ス、依  
 其筑後蒲池ノ陣崩シカハ、本陣ヨリ柴田何某眞先ニ仕  
 合切テ出、名譽ノ討死也、二番白杵想右衛門馬手ノ方  
 ヨリ進出、薩广方ニテ名ヲ得タル花堂院ヲ打捕テ、大  
 將ノ御目ニカク、明ル十二日ノ卯刻ニ合戦ト定リシニ、  
 豊後ノ勢二万余人惣陣ヲ、ロシ、薩广ノ案陣へ押寄タ  
 リ、島津方ニハ二千人指合、五ニ貝鐘ヲ鳴シ、爰ヲ  
 専度ト相戦フ、無勢懸合ス、引退ケト下知ヲナス所ニ、  
 伊東常陸守島津方市久軍助ト取組刺違ル、伊東下總權  
 守河上殿討捕玉フ、長倉勘解由左衛門丸目凡ヲ討取玉  
 フ、塩見ノ地頭右松四郎左衛門ハ北郷藏人ニ懸合刺違  
 ル、豊後住人村上殿ハ本田〔本マ〕幡守ヲ討取玉フ、同住齊藤  
 監ノ助鎮實ハ目久利珊玉ト取組刺違へ、其外打取薩广  
 ノ宗徒ノ侍ニハ、山中惣左衛門・村田能登守・河越外  
 記、彼等ヲ始數百人討取、是ヲ競ニ猶深々ト攻込ケル、  
 嶋津勢ハ竹大藪ノ瀬口ヲ頼ミ引退所ヲ、嶋津右馬頭行  
 久横入備ナリシカ、眞先ニ掛出玉フ、豊後ノ諸勢地形  
 不案内ト云、殊ニ長追シテ勞倦ノ身成上、思ヒヨラサ

ル横ヲ討レ、谷瀬河ノ淵ニ追入ラレ、水溺テ失ニケル  
 軍勢若干也、惣而大軍ノ引立タル夏ナレハ、返シモ不  
 合敗軍シ、豊後ニテ名ヲ得タル士討死數ヲ記ス、先一  
 番ニ田北相模守鎮周、二番佐伯紀伊守入道宗添、